毫も名利の爲めに憧憬せず、書畫骨董に趣味を有し、夙に嗣子精一君に家道を委ね、俗塵を避けて光風霽月の概あり。

氏は曩に里人の推薦辭み難く村長に擧げられたりしも、崇高なる人格は能く俗務に堪ゆべくもあらず、人と爲り溫厚にして名利を趁はず、聞達を求めず、窃に一身の修養に怠らざるが如きは、當今稀に見るの人物たり。

## 神戸米穀取引所仲買人委員長

# 岸本恒太郎君

（高砂町）

少壯にして大厦の頽廢を一木の下に支へ、終に能く名を成し家を興して既に其富鉅萬を累ねたる而已ではなく、前途洋洋として逆睹すべからざるものは岸本恒太郎氏である。

同家は元木綿屋吉兵衛と稱し、高砂町の素封にして姫路藩の用人、別格の家格を賜ひ、高砂の倉廩を支配し來り、其富地方の群豪を壓したると共に、代々風流數奇を好み、天下の文人墨客を優待せりと云ふ、されば同家の爲めに其技を揮ひたるもの太だ多く、隨て其所藏の富贍なる、天下多く其比を見ず、先代政吉氏は頗る豪宕華奢、加ふるに氏が幼少の交に歿し、爲めに維新の變革と共に踵を接して倒產したる各地の舊富豪と其軌を一にして、家道大に荊棘を生ずるに至つた。

氏は性英敏東都に出でゝ商業學校其他に學び、歸來只管家道の恢復を以て任じ、少壯自ら家政改革を斷行したる而已ならず、積極的致富の策に志し、夙に時運の趨向を看取して身を商業界に投じ、神戸米穀取引所仲買人となるや、氏が新進の手腕を以て堅實なる經營は、幾もなく世人の認識する處となり、業務益々繁榮に趣き、遂に已倒を挽回したると共に、更らに今日の富を爲すに至つた譯けである。

一體世人は仲買人と云へば直に以て乘るか反るかの相場師となし、一種の僥倖的事業として侮蔑的眼光を以て見るものが甚だ多い、然れ共取引所なるものは生產の需用供給を調節し、價格の標準を指定する、國家經營上必須缺くべからざる有要の機關たるは勿論、最も文明的にして然かも才幹的の職業である、然らば最も世に尊重せらるべき職業たるにも拘はらず、稍もすれば異樣の觀を以て遇せられつゝある所以のものは、是等仲買人の多くは人格の劣等にして、自己の地位を輕んじ、自ら投機師を以て任じて居る結果である、氏は夙に之を憂ひ、自ら其責任を重んじ文明的行動を以て終始すると共に、取引所仲買人の改善を主張し、現に神戸取引所仲買人委員長に選ばれ、各組合員を指導して地位の向上進步を圖りつゝあるが如き、恰も本年米價の暴騰に際して、東京大阪等の各米穀取引所仲買人中には種々の醜陋失態を演じ、國家社會を蠹毒したるもの多きに反し、神戸取引所が之に雷動せざりし所以のものは氏が指導戒飭の功大きに居る。

氏は性淡快にして毫も名門を誇り、人を侮る等のことはなく、其事業が稍堅實に過ぎて消極的の嫌ひはあるが、飽く迄自己の責任を重んずる處は迫に新教育を受けたる賜である、又素封の主人公たるにも拘はらず愛錢家の傾きある所以のものは、年少家道の恢復を以て膽に銘したる習慣性であらう、要するに氏は春秋遙に高い、されば僅に前半生の經歷を以て其全般を品隲する譯けには行かぬが、今後倦まず傲らず向來の天地に向つて活動したなれば、蓋し發展の偉大なるものあると共に、遊惰安逸を以て能事とせる素封家の若主人としては珍らしい人物である。

# 松野一角君

（加古郡北在家）

播州は由來交通の便に富み、從つて盛衰興亡の極りなきものあるにや、但馬地方に比較すべき舊家と稱すべきもの殆ど稀なり、否な絕へて無しと云ふにはあらねど、多くは沒落して舊家の俤を存するもの極めて鮮なし、然るに今加古郡に於ける松野家が播州に於て最も正しき由緒ある家柄たるにも拘はらず、今尙隆然として家格を存しつゝあるは、亦以て同地の誇りたらずんばあらず。

同家の事績は今爰に詳にする能はざれども、代々松野一學と稱し醫を以て業とす、氏に迨んで二十三代、中頃炙醫を始め、家傳として今に之を營む、維新前姫路侯の典醫として家

祿を賜り、名聲四方に喧傳して、姫路こみやの龍虎丹と松野の灸點は播州の二名物と稱せらる、而も世の香具師的の灸醫と異り代々仁術的にして、人類に貢獻したること太だ多し、

# 私立三木圖書館長

# 三木凋楸君

（飾磨郡木場村）

製金の術は易し、唯だ散金の術に於ては至難也、播陽は由來製金家の淵藪にして、未だ散金家を出さず、蓋し播州人は金を作るには鋭敏なる手腕を有するも、之を有用に有益に散するの智識に乏し、然るに偶々三木凋楸氏の如きは同地方の異彩たらずんばあらず。

氏は明治二年を以て生れ、家代々醫業を營む、七年清流義謙の門に入り、次いで龜山雲平氏塾に入つて和漢の學を修め十八年九月播陽投扇協會を創立して其總代となり、二十年一月修身社を創立して之が社長となり、專ら地方教育の普及を圖ると共に無料貸籍の縱覽を許し、同年求友吟社の社主となり、二十二年印南、有馬郡芳桂吟館員となり、內外同盟倶樂部、學藝改進倶樂部を創設し、其後大日本風俗改良會、赤十字社正社員、新日本同盟社員、文友學會、與仁會正社員、宍粟郡教育會員、大日本教育會、播磨助長會、帝國農家一致結合會、華月館員、姫路城北女教會員等に列し、二十七年自ら貲を投じて三木圖書館を創設し、以來單身經營以て今日に迫ぶ、其藏する處の和漢書籍六千七百四十四部、洋書百七十三部、參考品標本類五千三百三點、自己の邸宅の一部を以て館舍に充て、自ら受付ともなれば應接係りともなり、一切の館務を處理して毫も閱覽料を徵せず、資を投じたること數千圓に及ぶと云ふ、以て一般智識の啓發に盡瘁しつゝあるが如きは、稀に見るの美擧として其功勞永く沒すべからざると共に、一は播州の誇りたらずんばあらず、其後播磨鄉友會飾磨教育會、帝國教育會、日本赤十字社修身社員等に列せられ、身を挺し貲を捐して國家公共の爲めに奔盡する處太だ多く、資性溫良嫻雅にして毫も邊幅を飾らず、聲望隆々として、蓋し播州人物界稀に見るの異彩なりとす。

# 印南郡醫師會長

# 井內中正君

（印南郡曾根村）

氏は飾磨郡御着村に生れ、神戸醫學校を卒へ明治二十一年曾根村に於て開業せり、夙に學校衛生の幼稚にして教員の衛生思想に乏しく、兒童に對する衛生設備の不完全なるを慨し之が奬勵を皷吹し、兒童發育の狀態を精細に調査して之を統計に示し、就中教員に肺病患者あるは最も危險なりと警醒して、教員の身體檢査勵行を唱導し、同時に兒童の救急處置法の必要を痛論して、各村に教員の救急療法の講習會を開きて之を奬勵し、傍ら學校備付の救急函を發明して三十三年岐阜縣に於ける全國教育品展覽會及高松教育品展覽會に出品して賞狀を受くる等、學校衛生に努力する處尠からす、而して此救急函は會社、官衙、警察等に最も必要にして、其函中には醫師の來診時間迄に要する應急的藥品、及外科的治療材料を納め、臨機の施療に備ふるもの、爾來縣下の各學校に之を備付應用して其效果を奏したると共に、寔に衛生普及に貢獻せる功勞の沒すべからざるものあり。

斯の如く氏は教育界の衛生に腐心せると共に、郡衛生會、教育會等に會長又は副會長として盡瘁し、印南郡醫師會長に擧げられ、又教育、衛生、勸業等の各會合同して三治協會を設立せらるゝや、其衛生部長となり、或は學校、警察の囑託醫となり、地方公共の事に奔盡したる功勞太だ多く、されば衛教育會及衛生會は氏が多年の功勞に酬ひんが爲め木杯を贈りて之を表彰せり。

氏が地方民人に衛生思想を皷吹し、凡ての病氣は之を未發に防がざるべからざる事を只管唱導しつゝあるが如き、世間多くの利己的醫師と同一視すべからざるものあり、氏は斯る內外多忙の身を以て常に醫術の進歩に後れざらんことを期し去る四十一年上京して胃腸病專門の長與博士に就きて斯病の研究を爲し、其他專門各博士に就きて專門的の調査研鑽を遂げ歸鄉するや、胃腸病專門に從事せり、蓋し郡部に於ける專門的開業は氏を以て嚆矢となす、氏は性洒落にして業務には忠實熱心、患者に處する親切叮嚀にして、從つて信望と聲名は遠近に喧しく、常に門前市を爲すと云ふ。

# 醫師　植杉郁次郎君



（印南郡中筋村）

醫師が文明の先覺者たることは歷史の示す處にして、又醫師と本屋の良否を以て、各地方の智識の程度を卜することが出來る、されば都會の地が何れも新進の醫學者と、高尙なる書輔を有せるに拘はらず、未だ地方に及ばざるは、我國の文明が一般に普及せざるを證するものにして、一は地方人士の爲めに吾人が常に慨歎に堪へざりし處、而かも日進月步の趨勢は稍普及の傾向を表し來れるは、洵に喜ばしき現象にして試みに地方醫界に於ける近代の傾向を見るに、古き草根木皮の漢法醫より、進んで關醫の糟粕を嘗めたるものとなり、更らに明治初年の醫學校出身者によつて泰西の醫術に移り、其後大學別科の出身者時代たること既に久しく、例へば兵庫縣に於ける醫界の成功者が、別科大學の出身者に最も多きを以て見るも其一斑を知るべく、然るに今や新進の系統的教育を受けたる、醫學士が續々地方に開業しつゝあるは、地方人士の幸福と云はねばならぬ、而して植杉郁次郎氏の如きは、醫學士として地方開拓者の先驅である。

氏は曩に京都醫科大學を卒へ、都會の招聘切なるものあるに拘はらず、未だ文明の恩澤に浴せざる地方民人の救濟を以て自ら任じ、豚然名利を鄙つて鄉里に開業したと云ふことである、されば氏は自ら田舍醫師を以て甘んじ、恬淡寡慾、洒洒落々常に書生的態度を以て患者に接し、敢て貴賤貧富を別たず、昔仁術を以て任じて居つた、長袖者流の俤を偲ばしめ多くは名利の奴隷たる當今の醫學士輩には見るべからざるの美點がある、蓋し地方醫界の一異彩として吹稱するに足るであらう。

# 坂田藤藏君

先代啓太郎氏は酒井公の藩士に列せられ納戸役（木綿の取締役）となる、然るに明治維新の際宗教上の關係に依り士族の稱を返上して平民に下り、一族八戸あり、坂田新左衛門氏を以て總本家となす、されば同家は舊家として將た同地の名門として從來信望あり、從て現主藤藏氏は播磨銀行重役たる外各名譽職に推選せられ、去る二十九年迄は縣會議員として令聞あり、資性謹厚幼少明石藩儒柳田氏に就いて漢學を修め造詣淺からず、氏の家格と信望、竝に學識才能を以て、引續き政界に活動したりしならんには、必ずや地方のものにあらず中央の政界に一大飛躍を試みたらんも、清廉以て世に處せんとせる氏は、現今の腐敗堕落の政治界に伍することを好まず功名一擲、退いて悠々自適閑日月を送りつゝあるもの、如く氣格高雅にして書畫骨董に趣味を有し、同地方逸すべからざるの好紳士たり。

# 別府製紙所主　播磨銀行頭取　多木元三郎君

（加古郡別府村）

氏は藤井忠兵衛氏の實弟にして、夙に東都に出で、中央大學に入り、法律を專攻して明治三十五年に卒業した、翌年三月請はれて加古郡多木某方に婿養子となり、爾來家政を繼承して以て今日に迨んで居る、嘗て多木粂次郎、同增次郎等と共に別府銀行を創立して專務取締役となり、三十八年別府港に製紙場を設けて新式の機械を据へ付け、以て古來播州の特產たる製紙の振興と改善を圖り、同四十年更らに業務擴張の爲めに合資組織となし、自ら業務を擔當して眞摯熱心なる經營の結果は、今や別府製紙と稱して紙質の良好を以て聲價頓に昂り、大阪市場に歡迎せられつゝあると共に、今日の發展を見るに至れるもの、要するに氏が多年奮闘の賜である。

氏は又曩に友人中村之嘉、奥山政敬等と謀つて、筑前の某鑛區を買收し、炭鑛會社を創立して採炭事業の經營を主宰し播磨銀行を創立して重役に擧げらるゝ等、播州に於ける新進實業家として、未だ揮然大成の域には達して居らぬが、學門あり抱負あり手腕才能併せ有し、大に後來を嘱望するに足るべく、人と爲りは家兄忠兵衛氏に酷似せりと雖、寵の口天下で僻陬の多可郡に成長した其六と、少々笈を負ふて各地に放

浪し、書生々活を嘗めたる氏は修養に於て自ら別がある、從つて忠兵衛氏の如く温潤なる美徳はないが、淡快にして洒落八に接すれば一見相識の如く、克く談じ能く語り、奇警縱横四角張つたる法律論もあれば、訶々解頤の滑稽もあり、才氣喚發衝闘的覇氣滿々たる人物である、而して兄弟互に親交なる、事業と家政は勿論、區々たる事情の秘密に至りても毫も障壁はない、されば對坐の談笑異域の友に逢へるが如く、常に笊碁を圍んで樂んで居ると云ふ風である、蓋し多く見る能はざるの美風であらう。

## 五十六銀行取締役　松井伊三郎君

氏の家世々酒造を業とし、先代伊三郎氏に至つて家道倍々振ひ、勢力頓に物輿したかの觀がある、現代伊三郎氏亦た善く父業を大成するの手腕を有し、材幹伎倆乃父に亞ぐの風あり、加古郡の巨富として仰がれ、地方篤行の人として稱せられつゝある、氏は三十九年乃父に代つて家督を相續し、爾後村長その他の名譽職に擧げられ、地方の公共事業に竭すもの尠からず、現に二見銀行、五十六銀行の重役として聲望信用最も厚く、性亦た温厚にして長者の風を備へ、圓滿にして圭角なき美質は、社交に巧妙にして偏執の人ならざるを證するに足るべく、今は地方資産家の重鎭として衆望最も高く、恒産ある者にして恒心ありと云へば、氏が巨富を擁して驕らず、極めて尊大倨傲の風を避け、たゞ一長者としての悠揚たる邊において、氏の眞價値は認識せられつゝあるのである、されば五十六銀行が針路を謬らずして、克く經濟界の風潮に和し、資金運用の妙を極めて、以て預金貸出兩方面の商策に穩健の見地と適切の按排に任じ、綽々として餘裕あるを示すもの、固より頭取米澤氏の信望手腕によると雖、氏の功勞又沒すべからざるものがある、氏を稱して單に無能平凡の長老とのみ見るべからず、又前途を有する多望の紳士と云ふべきであらう。

## 山口吉五郎君

（多可郡杉原谷）

十數萬金の機畧は投機者流のことである、殖産唯一の實業家なるものは、功を百年の後に收め、業を永遠に垂れて、以て確固不拔の基礎を定め、而して子孫をして其處に賴らしむると共に、一面國家に貢獻することを心懸けねばならぬ、然かも此目的を達せんとせば、敢て僥倖をねがはず、譎詐を須ひず、稍もすれば運綾隔靴の感ありと雖、決して棄を一時に壟斷する慧才の狡兒に模つてはならぬ、されば今山口吉五郎氏を敍するに及んで益々此感を深ふするものである。

兵庫縣下の殖林家を云ふもの必ず山口吉五郎氏を云ふ、然り氏は眞に殖林家である、近時時世の進運と共に交通の便も開け、加ふるに頓に木材の需用を喚起したるが爲めに、志を殖林に致すもの漸次多きを加へ、自ら殖林家を以て任ずるものありと雖、未だ交通の便なく、木材の需用今日の如くならざるに當つて、遠く百年の謀を以て造林を企てたる山口家の如きは、其祖先の卓見に敬服すると共に、一面國家の生産を助長せる功勞は亦偉大なるものである。

山口氏の先は今を距ること三百餘年前、長州山口の藩士が故あつて同地に來り歸農したものである、同家の造林は其起原太だ遠く、當時は自然木を利用して、人工的に經營するものは稀であつた、又同地の如き僻邊の地は良材逸木ありと雖之を都會に運搬すること能はざりしにも拘はらず、必ず有用の時あることを慮つて經營し來つたと云ふことである、從つて其所有の山林多くは喬木鬱然として豈尚太陽を見ることは能はず、今や杉原谷縣道の開通と共に其價格を昂上したること夥多しく、其富亦偉大にして到底算數の及ぶ處ではない、氏は道に舊家の生れだけに風采態度の準墨にして、稍もすれば田舍の蛙切りを顧扱にして居る癖があつて、威張つて居るやうではあるが、併し親しく接すれば濕情を發して來る、却却の粹人で常に京都の祇園町杯へ、喬きな杉の木や檜を運搬することもあると云ふ、至極お目出度い圓滿な人である。

## 多可郡銀行頭取　縣會議員　藤井忠兵衛君

（多可郡中村）

南播州の地は古來物産の販出上風雅なる京阪地方に往來して商業を營むもの多く、近時頓に交通の便拓けたるが爲めに、人情は浮華に流れ、狡智猾才互ひに嫉視陷穽して、眞に嘔吐を催さゝるもの稀なるに反し、多可郡の如きは概して人情

朴訥にして恰も上古の風を存し、猥りに自己の利害に齷齪せず、又暴富を夢みるの射倖心もなく、華奢に流れず吝なるにあらず、比較的圓滿なる人物に富む、而かも殖産興業は益々發達して、播州に於ける最も富裕郡たるの觀あるに至りては偶々吾人の理想鄉として之を吹聽するに足るべく、而して多可郡の氣風を代表せる人物を擧ぐれば藤井忠兵衛氏であらう

氏は明治三年十二月を以て生る、家代々酒造を營み、父忠二氏は勤儉節約家道を興し、古稀の頽齡を重ねて今尙家政を執掌しつゝあると云ふことである、氏は乃父監督の下に家督を紹ぎ、幼にして英敏鄉倡の推稱甚しく、嘗て中村々長を初めとして地方の各名譽職に擧げられ、縣會議員に選ばるゝこと三回、其間縣參事會員として縣政の樞機に參劃し、議員中の錚々として重きを爲して居る、蓋し當今の政治家と稱するもの、多くは實利に暗らく、徒らに空論坐談快を一時にとつて後計を知らず、窮迫自ら殪れて世の嗤笑となるものあるに反し、氏は身を政界に處して朝野に斡旋し、縣政の得失に參する一面に於ては、能く實業を重んじて殖產を圖り、曩に多可銀行頭取に擧げられ、同地は北に山林あり南に機業あり、常に資金を要すること夥多しきにも拘はらず、單に東播銀行

## 多可郡銀行取締役　殖林家　山口新五郎君

（多可郡杉原谷）

文明の發達するに從つて木材の必要は益々痛切になつて來る、人口の激增は建築の增加となり、交通運輸の發達は船車の製造も多く、昔は建築造船の用材たるに過ぎなかつた木材が、今日は鐵道、製紙、燐寸を初め、其他工業の原料として



が西脇支店を有するに過ざざりしかば、之を慨して文明的の經營に改め地方殖產の金融機關を以て任じ、常に各機業家に向つて金融を便じつゝあると共に、杉原谷に支店を設けて北部の金融機關となし、或は北播物產會社を創立して社長となり何れも堅實にして機宜に適する經營を主宰し、同地の物產が今日の發展を見るに至りしもの氏の力に負ふ處多く、又神戸神榮會社、同農具會社の各取締役として、播州に於ける新進の實業家として嘖望せられつゝあるが如き、自ら他の大言放語を事とせる恒產なき政治家と稱するものとは、其選を異にするものあるを窺ひ得べきと共に、又手腕才能の凡俗にあらざることも推して知ることが出來るであらう。

氏は性溫淳にして思慮周密、極めて智惠の分量に富み、心事公明にして人に接するや眞心を披瀝して餘す處なく、勿論詐譎け引等の事はない、一面には俠あり同情あり、氣格嫻雅にして趣味を有し、當今多く見るべからざるの好紳士である、唯だ余輩が彼の前途に向つて一言せんとする所以のものは、徒く迄現狀を以て推移し、功を晩成に期して身を持すること厚く、些々たる誘惑に試みらるゝ勿れと云ふことである。

用途は無限に增加して來たが、一方我國の林政林業を觀察すれば甚だ寒心に堪へざるものがある、何人と雖家屋に住まんとせば木材を造ることに意を致さなければならぬ、殊に木材なるものは直接有用なる計りではなく、間接には最も安全なる富の貯蓄となり、或は水害、旱魃の害を防ぎ、風致防風ともなるもので、人類社會の必須缺くべからざるものである、然るに近時浮薄なる人心は唯だ目前の利益に汲々として百年の長計を忘れ、之が栽殖に意を致さゝる而已ならず、濫伐妄狀も實に甚しい、一體播州の北部は陰陽を界せる山脈を負ひ廣島、神戸間の材木供給地たるにも拘はらず、現在の狀態を見れば何れの處にか能く此任務を全ふするに足る材木があるであらう、而かも此任務を果すべき責任ある所在地の人物を見るに、多くは祖先の栽培せる樹木を濫伐して毫も栽うることを爲さず、近時交通の便なるに從ひ、叨りに都會に往來して之を消費するに努めて居ると云ふ風である、甚しきは都會の成金を夢みて、祖先が百年の苦心經營を一朝にして水泡に歸しつゝあるものもある、豈慨嘆すべきではないか、此の時に當り多可郡の人物が何れも自己の立場を辨へ、意を殖林に致しつゝあるは吾人の悅ぶ處にして、殊に氏が近時頓に殖林に重きを置き、之が經營に任じつゝある如きは、大に意を强ふするに足るべきである。

氏が所有山林材積の巨大なることは未だ山口吉五郎氏に如かぬ、然れ共其面積の廣大と、近年植込の數量に至りては遙に多いと云ふことである、殊に氏は道に新智識を有するだけに、其栽植法の秩序的にして嶄新なる經營は縣下の模範造林家たるに恥ぢぬ。

氏は常に殖林に努めつゝある半面に於ては、公共事業に力を濺ぎ、嘗て村長、郡會議員、或は縣會議員等に擧げられ、卽ち現に郡會議長の任にある、其間道路の新設、學校の建築等は最も盡瘁したる處にして、往年丸岡寬三郎、藤井忠兵衛氏と共に多可銀行を創立して、引續き之が重役に擧げられ、杉原谷に支店を設けて以て地方金融に便じたる等、同地方の重鎭として功勞の沒すべからざるものが太だ多い、人と爲りは溫厚にして圓滿、無色透明、俯仰天地に恥ぢざる眞に品性の高潔なる紳士の典型である、されば氏が杉原谷の僻隅に在つて常に地方に重きをなす所以のもの決して偶然ではない。

## 中村々長　池田九兵衛君

（多可郡安樂田）

多可郡に於て藤井忠兵衛君と共に、少壯人物として最も將來を嘱望せられて居るものは池田九兵衛氏である、家は同地方の名門にして代々酒造を營み、氏も又此を繼承して居る、一體氏の居村安樂田村は一見して穢多村貧民窟の如く、一人

として氏に對抗するものはなく、定めて鳥無き郷の蝙蝠で、客嗇一偏、僅の資産を鼻にかけ、威張り散らして、田吾作や芋七を苛めて居る田舍の防痴であらうと想像して居つたが、彼は其態度は毛頭なく、追がに新時代に生れて新教育を受けたゝけに、總てが平民的で人と隔壁を設かず、磊落洒脫の半面には、頗る義俠と同情に富み、德は草木に及ぶと云ふ風である、されば里人の尊崇甚だ敦く、遂に推されて村長となるや、身を挺して自治體の發達に盡瘁し、手當の如きは毫も之を受けず、時に或は多くの貲を捐し、眞の名譽職として而かも熱心練掌しつゝあるの結果は、村治の圓滿にして、縣下

# 凍蒟蒻同業組合長　藤田平右衛門君

（多可郡杉原谷）

縣下の一少多可郡が比較的富裕の地たることは余輩既に之を說けり、然かも駸々として向上しつゝある所以のものは、農家の副業たる地方物產の發達に歸せずんばあらず、されば同地の狀勢を一瞥するに、北に豪大なる山林あり以て殖林するに足り、南に沃々たる田畑あり以て農桑に適す、加ふるに西脇の織物は縣下有數の物產として近時の發展驚くべきものあり、然るに又爰に凍蒟蒻の製造が頓に偉大なる發達を來したりと云ふに至つては、錦上更らに花を添ゆるもの、同地の富裕決して偶然にあらざると共に、今や農村の荒廢日に甚しく之が經濟を支持するには偏に副業に俟たざるべからざることを唱ふるの時に當り、加古印南加東郡の如き、單に米麥を以て甘じ他に何等副業なき地方は之に學ばざるべからず。

藤田平右衛門氏は多年凍蒟蒻の製造を營みたりしが、同地の製品が稍もすれば粗製濫造に流れ、各製造者が往々目前の利益に汲々として更らに遠大なる抱負なきを慨し、爰に同業組合を設け、更らに同地に接近せる氷上郡と步調を一にせざれば、效果を見る能はざるを慮り、同地方の同業者に說き、以て一團となし諸種の弊害を除却するに盡瘁して怠らず、遂に今日の產額に達し、同地方の有數なる產物として謳はるに至れり、而して其今日に至れる徑行に至りては全く氏が熱心唱導の結果にして、地方產業界の爲めに特筆すべき恩人ならん歟。

氏は又一面多可銀行杉原谷支店長として、同行の經營に與つて力あり、資性溫良村夫子として地方に尊信せらる。

# 藤井茂兵衛君

（多可郡日野村）

罕に見る自治體の首腦者として謳はれて居る、以て其信望手腕の凡ならざるを覗ふに足るべく、今や彼の人物は一般の認識する處となり、本年縣會議員の改選に際し、候補者として推薦せられたりしも、固辭して受けざりしが如きは、偶々以て當世の弊患たる虛名心に淡きものあるを知るべきであらう氏は又嘗て多可銀行の重役に擧げられ同地方の實業界にも重きを爲して居るが、蓋し家格あり信望あり、加ふるに人格ある同地方の異彩として、今後必ずや一頭地を抽くことがあるを疑はず、吾人は刮目して彼が洋々たる前途を嘱望する所以である。

金貸しと云へば直ちに鬼權を聯想する、世間に金貸程評判の惡るいものはない、而も金貸必ずしも惡辣な者計りではないが、地方の習慣は金を借りて約束通りの利足金を支拂ふのは當然であるにも拘はらず、或は利息が高いとか、嚴格であるとか、種々な批難をするやうである、勿論銀行業者の如く低步ではあるまいが、併し擔保も薄く信用も乏しく、多少の危險を蹈んで貸すのであるからそれは當り前である、又約束通り追窮するのも權利である、然らば畢竟金貸が惡いのではなく、金借りが惡るいのである、例へば神戸の先代小寺泰次郎氏の如きは、生前金貸を營み爲めに種々の批難も受けたが死後の今日で誰一人惡るい人であつたと云ふものもなく、益益人物の光輝を發揚したやうである、故に人は地方の評判のみを以て品する譯けには行かぬ、されば世間に金貸程評判の惡るい商賈はなく、爰に留意した金貸は何れも名を銀行と改めたが、獨り藤井茂兵衛翁は今に個人の金貸を營んで居る、而かも常に十餘萬圓の貸出金額があると云ふことである、然るに氏は案外にも誰れ一人批難するものはない、そこで種々の方面から調べて見ると、氏は金貸ではあるが、自利を輕んじ社會の金融に重きを置いて人を助ける佛金貸である、其人と爲りは朴訥で圓滿、叩りに金の齊しい人でもなく、公共慈善としあれば率先して財を捐てると云ふ風で、眞の金貸の旦那樣である、されば世の弱者を苛むる高利貸の如く惡評のないのも道理である。

# 東播銀行頭取　岡澤瑳玄太君

（多可郡津萬村）

世人は徒らに貧賤より起つて富貴となつたものゝみを目して之を人物と稱し或は成功者と云ふ、然れ共名門に生れて名門を襲ぎ、父祖の遺業を旺んにして聲譽を失墜せず、其宗を辱めざるものあれば、ヨリ以上の人物であると云はねばならぬされば岡澤瑳玄太氏が、丹波の名門青田家に生れ、多可郡の素封岡澤家を紹ぎ、而かも明治維新の革變に際し、各地方の門閥家と稱するもの、多くは時世の飜弄者となり、踵を接して倒産破門の境遇に陷りたるにも拘はらず、固確不拔の信念を以て時世を看取し、身を持すること堅く、虛名を趁はず、開達を求めず、毅然として家道の維持に努めたるが如きは、守成的の人物として稱揚するに足るべきであらう。

岡澤家は多可郡唯一の素封家として著聞して居る、然れ共氏は多く之を語るを好まず、故に爰に詳述することは出來ぬ而して氏は幼少の交岡澤家に入り、祖先の遺業たる農業を事とし、別に汲々として資産の增殖を圖らんともせず、勿論虛名を求むる人ではない、而かも財産を增殖したることは莫大にして、又擧に推されて縣會議員に當選せしも、性高雅なる氏は腐敗堕落の政治家と伍することを好まず、其後一切の名譽職を放擲して了つた、其間東播銀行を設立して重役に擧げられ、一昨年同行不始末事件以來氏の力に俟たざるべからざるもの多く强いて頭取に擧げられ、其刷新經營を主宰しつゝあるが、さしもに瀕死の難關も氏の信望によつて既倒を援して來たやうである。

氏は性謹厚篤實にして品位あり品格あり、家庭圓滿にして起居進退禮に協ひ、毫も財産を鼻に掛け、門閥を笠に着て威張る等のことなく、人を遇すに厚く從つて欽慕に堪ざるものがある。蓋し多可郡の人物界に於て遙かに一頭地を抽いて居る人であらう。

# 大志銀行頭取　上月安重郎君

（多可郡黒田庄村）

播州の僻阪に位する一少多可郡は比較的資産家が多い、而して此多き資産家を見るに何れも舊思想の人物にして、要するに祖先の遺産を擁して、交通の不便は變遷の遲緩なるより自然時世の進歩に伴れて價格に昂上をを來たし、從つて今日の財産を有するに至つたものゝやうである、故に活潑進取能く一代にして大を成した人は尠い、然るに獨り上月安重郎氏は自ら運命を開拓して今日に迨んだもので、同地方資産家中の一異彩たる而已ならず、亦偉大なる成功者である、想ふに明治の財界は非常なる變遷の歴史を有し、例へば切りに輕進妄動して産を敗つたものもあれば、又徒らに舊思想を以て舊慣を墨守し、遂に時勢に失脚せるものあり、或は一介の書生が風雲に乘じて舊富豪を凌駕するに至れるものもある、蓋し氏の如きは稍此第三者に屬するもの、固より氏は同地方の舊家にして相當なる遺産を擁したりしに相違なきも、少壯にして志を致富に注ぎ、勇往邁進、夙に時世を達觀して地方の遺利を拾ふことに怠らず、明治初年貸金の傍ら地所の有望を見越して之を買ひ占め、尋いで安全なる富の貯蓄として造林の有利なるを看取し、此を買占めたるもの又多く、曩に大志銀行を設けて貸金を秩序的に營み、更らに擴張して和田村に支店を設くる等、如何に行動の進取的にして志の遠大なるかを窺ふに足るべく、今や土地、山林、又は貸金額に於ても優に一頭地を抽くに至り、多可郡の巨擘を以て稱せらるゝに至つて居る。

氏人と爲り堅忍不拔、大膽なる一面には頗る細心にして、勤儉力行、質素にして節約を重ずるの結果は、往々地方人士をして吝嗇家にあらざるかを疑はしむと雖、氏は決して吝嗇家たらず、一錢も忽にせざる半面には、義務的のことには敢て之を吝まず、人に接しては慇懃、其頭腦は明晰にして、春秋遒に前途更らに偉大なる發展があるであらう。

現代の紳士は別莊、蓄妾、邊幅を飾り虛榮を衒ふを以て理想とせるに反し、富參拾萬を擁し、質素簡樸、一田夫を以て自ら居る來住廣次郎氏の如きは、稀に見るの資產家である、されば多可郡の資產家來住廣次郎氏と言つても、廣き播州一圓において、誰れ獨り記臆に止むるものは無い、是れ卽ち氏の氏たる所以にして、軈て氏の性格を語つて居るものである。

僅に產を得れば直に以て貴族を氣取り婢僕里閭に傲り、金衣玉食を事とせるもの多き世の中に於て、氏は薄汚なき茅舍の中に、唯だ老夫人とゝもに吃々として、自己の天職に他を顧みるの遑がない、夫人が炊事に任ずれば、氏は卽ち鋤犁を提げて隴畝に天命を託し、一介の婢僕なく、家政萬端老夫婦によつて按排され、別に不自由を感ぜないと云ふに至つては如何にその居常の平淡にして仙味あるかを窺ひ知らるゝであらう、氏は儉素自から持し、麁衣麁食敢ねて恨みとせず、ただ天の時を樂しみ人道に徇じて正しき富を積む、世間恁る人物に吝嗇の聞へあるもの多しと雖、氏は之れに反し公共慈善事業と云へば、惜氣もなく私財を投じて敢て名聞を冀はず、この一事既に氏が心事の高朗を語つて餘りありと云ふことが出來る、氏は別に利を征し富を增さんとも思はず、唯だその富を擁し人道を重んじ、悠々として閑日月を送りつゝあるが如きは、大愚か大德か、到底凡慮の窺ひ得べき處ではなく、余輩が仙的資產家として大に吹稱する所以である。

## 來住廣次郎君

（多可郡西脇村）

## 元辯護士　來住泰次郎君

（多可郡西脇村）

氏は來住廣次郎氏の實弟にして、幼にして學に志し、長ずるに及んで笈を東都に負ひ、法律家たらんと希望を懷き遂に法學院に入つた、智才儔に絕する氏が在學中の成績優等にして、多くの將來を期待せられたるは固より其所にして、苦學三春秋、無難に所期の學科を終了して一旦鄕里に歸るや、俗官臭味の司法官たる我心に非ずとなし、人權擁護の天職に竭さんため、大阪に辯護士の門戶を張つた、然るに氏は長者風の廣次郎氏に酷似し、資性溫良にして絕ねて人と爭ふが如きことを好まぬ、氏の性格よりして辯護士の如き、理窟一遍、喧嘩商買は、寧ろその適所ではない、されば始め氏が恁る無趣味の職業を選びたるは、奇異とせらるゝ所ではあるが、現世紀法治政下の公民が未だ智識の程度は法制と駢行せざる短所を看取し、爲めに正義を擁護して寃に泣くの人を濟ふは、寧ろ我が本意なりとし志士の本領なりとして、辯護士の職を選んだのである、而かも實際其職に衝りては面倒此上なく、想像以上の沒趣味職業なるに嫌氣を催ふし、人權を擁護せんには自から他に途もあらむ、而かも大都の辯護士界、先輩又は新進の英才雲の如く、性格と職業と相愜はざる我等は、都門百斗の蒙塵中に、無爲の凡骨を橫たへんより、退いて野に嘯くに若かずと、心機一轉門を閉して鄕里に歸つた、想ふに俗臭、銅臭に蔽はれたる喧嘩仲裁の辯護士商買は、氏の性格にとつて慥かに不適材たるとゝもに、苦痛たりしに相違なく氏は又恁る難所に立つてまで財を造るの必要もなく、また何を苦んで天の與へたる命數を、辯護士商買に委して、可惜損傷するの愚を學ぶの要もない、是に於て故山に耕さんとの志に返りたる氏は、日夕山河草木に俗腸を洗ひ悠々天然を樂まんとせるも、俗緣尙ほ蘊きざるものか、竟に鄕里の一郵便局長として之を鞅掌しつゝあるものゝ如く、これ亦た氏の志に辜くものなるも、野に遺賢を見ざる現代の社會は、氏を驅つて復たび俗界に處せしめたのであらう。

余輩は氏の如き新進の人物が草莽の中に引退しつゝあるは寶の持腐れとして之を惜しむと共に、其恬淡高雅の人格を欽慕するものである。

## 多可郡織物組合長　來住兼三郎君

（多可郡西脇村）

由來產業組合は情實と慣習に纏綿せられ其統一頗る困難にして、之が組合長たるもの專門的智能は勿論、聲望の相備らざるに於ては到底組合の機能を發揮すること能はざるべし、多可郡は播州の避趨にあるにも拘はらず織物業の發達は、今や其產額に於て優に縣下に冠たる所以のもの、固より企業者の一致協力熱心奮勵の結果に外ならずと雖、又一面に於て織物組合の指導奬勵の結果たらずんばあらず、換言すれば多可郡機業界の發展は現組合長たる來住兼三郎氏の努力奮勵に負ふ處多く、曩に三十二三年頃粗製濫造のため一時聲價を失墜するや、氏は組合長として大に之を檢束し染色の均一、寸尺の整一等製品の精良を圖り、一面代價を至廉にして一般の需用を計りしかば忽ち聲價を恢復したる而已ならず、從來近府縣にのみ限られたる販路は漸次擴張して今や全國に普及し、播州織物として謳はるゝに至れり。

氏は去る二十五年組合長となり、更に三十四年重要物產組合法に依り組織の改まると同時に重て組合長に擧けられ、郡費の補助を仰いで技師を雇聘し、或は相生、足利方面より福島縣地方へ視察者を派遣し、或は技師をして各製造家を巡視して染色織機の檢査を勵行せしむる傍ら、織機の改良職工の養成より郡內機業の奬勵に至るまで、氏が全力を傾注して奔

盡せる結果は、遂に斯る急速の發展を見るに至れり、而して木綿製造の動力織機に至りては多可郡を以て嚆矢となす、されば氏が斯の如く播州の重要物産として同地機業界の明星となり、多年盡瘁した功勞によりて、去る四十年銀盃を下賜せられたるが如きは、單に氏一家の榮譽たる耳ならず、同地機

# 多可織物同業組合副長　片岡源十郎君

國家の生産を助長するには產業組合の必要なる機關たることは、爰に縷說する迄もなく已に世人の認識する處なり、從つて近時各地に之が創設せらるゝもの百千も曾ならずと雖、多くは名あつて實なく、之が原因の重なるものは、首腦者に其人物を得ざるに基く、抑も同業組合の組長たるものは、同業者の粗製濫造を戒め得べき德望を有し、一面對外的販路の擴張に努むるの才腕と、當該事業の專門的智識を要す、此三者を具備せざるものは當然首腦者たるの資格なきものにして而かも此三者を具備するものを求むれば、勢ひ同業者の人物を擧げざるべからず、同業者を擧げんか、卓絶せる人格にあらずんば、徃々組合の名義を以て擴張したる販路、否な顧客を自家一己の顧客に吸收せんとするの弊害を惹起するは人情免れざる處なり、此卽ち各地の同業組合が紛擾を絶たざる所たらずとせず、故に此弊を免れんとなれば、同業者中比較的小事業家にして才能ある人物を選ぶの勝れるに如かず、此點に於て余輩は多可郡の機業組合、揖保郡の素麵組合の如きは其首腦者に人を得たるものと斷言すると共に、兩組合が縣下に傑出して圓滿に發達しつゝある所以ならん乎。

氏は曾て多可郡役所に勤務せしが、織物組合の創立と共に同組合理事に擧げられ、後副組長となり、爾來間斷なく、組長を補佐して同組合事業の刷新改良發達進歩に努力至らざる莫く、其間物產會社を創立して製織原料の共同購入、或は製品の販賣機關として、之を經營しつゝあるが如き、同地方製織界の爲めに多年盡瘁劃策したる功勞は永く沒すべからざるものあり、蓋し稀に見るの適材ならん歟。

播州に於ける加東郡は比較的資產家が多い、今尙舊資產家が依然として存續せるものあると共に、一代分限も又多く、就中成功の顯著なるものを擧ぐれば柴崎鹿之助氏である、氏は美嚢郡に生れ、少壯請はれて柴崎家の婿養子となり、柴崎家は固と相當なる資產はあつたが、義兄某氏放蕩遊惰にして家道大に失墜し、爲めに氏が當然割讓さるべき資產は殆ど之

# 機業家　高瀨定次郎君

（多可郡西脇村）

氏は多可郡機業家の嚆矢者として其老舖と信用は同業者間に鋲々たるものあり、主として生木綿及晒木綿を製出し、從來內地取引に止りしも、去る三十五年頃より進んで朝鮮向白木綿を製造し、現今盛んに同地へ輸出せられ、朝鮮各地に支店特約店を設け、白木綿の巨擘と稱せらる、氏は專ら上等品の製造に努め一箇年の輸出高實に二十一萬反以上に達せりと云ふ、最も其の今日の成功を見る迄には日韓貿易の手續に困難し、直接輸出に面倒を惹起して徒らに商機を逸したることありしも、不屈不撓努力奬勵の結果は遂に今日の成功を見るに至れり。

氏は製織業の傍ら酒造を兼營し製織は自家に五六十臺の織機を据付け他は多く賃織にて製造し居れりと云ふ、而して一面多可物產會社重役たり、郡內機業家の先覺として同地の發展に與つて力ある新進の人物なりとす。

# 東條銀行頭取　柴崎鹿之助君

（加東郡東條村）

を受くること能ざるの場合となつた、延ひて家庭の軋轢絶ゆることなかりしも、養母某頗る賢婦人にして、反て氏に待つこと甚だ敦く、氏又之に仕へて命に背かず、而かも至誠以て家道を治め、初め米穀の賣買を營み、明治初年地所の有利なることを看破して同地方の耕地を買占め、果して今日の昂騰を見るに至りき、其後酒醬油の釀造を開始するや、品質の佳良なる同地産の米穀を以て原料となし、加ふるに氏が誠實熱心なる經營は、勢ひ品質の上に表はれ、稀に見るの逸品として忽ち江湖に歡迎せられ、今や阪神地方を初め、三田町竝に福知山には支店を設け、同聯隊の用達として販路頓に擴張して以て今日の發達を來たし、今や其富巨萬と算せられ加東郡に於ける一大成功者として謳はるゝに至つた、氏は又單に一家の經營に止まらず、曩に東條銀行を創立して頭取に擧げられ、廣く神戸地方に貸出を行ひ行運益々發展に趨き、加東郡に於ける唯一の信用機關たるに至らしめ、或は社銀行の重役に擧げられ、又加東郡は農業を以て專門となし、他に農家の經濟を支持すべき副産物なきを慨して、織物會社を組織し、範を一般に垂れつゝあるが如き、同地方實業界の雄鎭たると共に、一面諸種の名譽職に擧げられ、郡會、郡參事會員等を經て縣會議員に選ばれ現に其職に在る、性溫良にして素朴、而かも奮鬪的性格を有し、同地方稀に見る人物である。

嗣子幸太郎君曩に釀造試驗所を出で、目下釀造部を擔任し斯業の進歩に貢獻しつゝある、品行は端正、將來大に面目を發揮する人であらう。

## 縣會議員　三木町長　玉置福藏君

（美嚢郡三木町）

美嚢郡に於ける土居、小河氏と共に資産家として、常に公共の觀念に富んで居るものは玉置福藏氏である、氏は慶應三年を以て生れ、明治二十六年町會議員に擧げられたるを初めとし、郡會、郡參事會員等に擧げられ、三十九年三木町長に選ばれ、同地の發達に腐心する處多く、嘗て同地の特産金物の發展策として、粗製濫賣を矯正せんが爲めに金物同業組合を組織し、或は金物保護協會を設けて技術の奬勵を謀り、又は物産陳列所を設くる等、努力至らざる莫く、一面小河秀太郎氏と共に三木銀行を創立し引續之が取締として經營を主宰し、能く今日の發達を來たし、或は又三木電燈の重役として創業に盡瘁したるが如き、同地方の代表的人物たるに恥ぢぬ宜なり德望一鄕に普く本年縣會議員の改選に際し、獨占候補として當選するに至る、財産あり德望あり、同地方は今後氏の力に俟つべきもの必ずや多きを疑はぬ。

## 社銀行取締役　西村隆次君

（加東郡小田村）

加東郡の人物界に於て最も辛辣過酷の敏腕を有するものは西村眞太郎、西村隆次の兄弟である、兄眞太郎氏が百錬千鍛の鐵面皮は誤つて奇功を奏し、衆議院議員たること前後數回而かも卓拔なる抱負あるにあらず、私利を貪らんが爲めの代議士たりしが故に、笊碁の助けによつて大隅伯に取入り、臺灣銀行の監査役となり、糖業政策抔と一角の財政通を以て日糖會社に喰ひ込み、收賄の發頭人として乍ち獄裡に投せらる國家の選良を以て自ら任じ、國民の代表として努力せざるべからざる彼が、之を一時の奇禍とすれば恕すべし、同一被告人中賄賂の金高は最も多く、而かも天地に容れざる大逆も過つては改むるに憚る勿れ、悔ゆれば別に咎むるの必要もないが、被告中の不謹愼は勿論、吾人は彼が釋放後淸水山に入つて坊主にでもなる事と思ひの外、今尙政界に念を絶たゝざるが如きは、彼の鐵面皮に驚かざるを得ない、實弟隆次氏は、氏を知るものゝ言を聞けばヨリ以上の鐵面家であると云ふ、然れ共余輩の見る處にては、兄の眞太郎氏が斯る不行績あるにも拘はらず、氏に地方の輿望が副ひつゝあるを以て見れば氏が性行の惡しからざることを推知し得べく、要するに氏は未知數の人物であるから爰に其全豹を品隲することは出來ぬ乞ふ家兄の罪を償ふに足るものあれば幸である。

# 牧畜家　土肥喜男君

（加東郡中東條村）

縣下畜產界に人材乏しからざるも其規模の大にして純良なる種牛を飼育し、斯界に貢獻淺からざるものは板東國八氏と共に土肥喜男君を推さねばならぬ、氏は明治二十六年頃創めて范蠡の故智に倣ひ、牧畜の將來有望なることを看取し洋牛を試養して牛乳搾取業を營む、其後熱心奬勵着々として事業の成功を遂げ、自ら飼養牛を種牝牛檢査に提供して始めて合格することを得たるは卽ち三十四年にして本郡に於ける種牛飼育の嚆矢である、而して氏は三町歩の牧場を設けて常に畜產の增殖を圖り各品評會に出品して賞與を受けたること枚擧に遑あらず。

四十年韓國京城に畜產株式會社を起し只管畜牛の改良を圖り、又明石試驗場、加東郡農會、縣園藝場へ牝牛を寄附し、或は四十年二月衆望否みがたく村長となり、其他東條銀行、東條織物會社重役として地方產業の發展に努めて居る、氏は將來種牛の改良進步に奬勵するのを畢世の事業として活動することは寔に推奬すべき心懸けである。

# 宮崎新藏君

（三木町）

氏は曾て法學院に學び歸鄉後政治界に乘出し、總ゆる問題の發生に伴ふて、つねに地方政治界の中心力となり、夫の三木町長に推されて、紊亂に傾きつゝありたる町政に向つて一太斧鉞を下し、所謂快刀亂麻を截る底の辣腕を揮ひたるがごとき、慥かに氏が政治實地科の講習に、滿點及第の榮を荷ひたるものと謂ふことが出來やう、然り、氏が政治的手腕はこゝに認識を得るに至り、つねに地方政爭渦中の達者として衆望を繫ぎ、竟に縣會議員に擧げらるゝに至つた、其後幾たびか改選は行はれたが、氏が政友會を地盤とする優勢と、將たその政治手腕の功妙敏活とは、彼れ敵黨を制して毎に當選し自黨の勢力をして倍々鞏固の地盤を造らしめた、政治的系統より、將た地方黨員の領袖として、伴食的ならざる縣會の有力議員としても、氏は必ずや石田氏の後を襲ふて、衆議院議員たる輿望と地盤を有して居る、然るに一朝不幸にして、夫の濱職問題に連坐し同志を庇護するに過ぎ、遂に刑辟に甘んじたのである、併し當時氏を信ずるもの〻多き、氏に一點の疚しき所なしとなし、寧ろ事實の眞相を暴露せよと慫慂した而かも男子の意氣と面目を重んずる氏は、これ等の忠言に聽かず、斷じてその刑に甘受したる高朗なる心事は、却つて人の諒とする處である、氏俠勇の風あり性また磊落細故に拘泥することなく、極めて東洋的政治家の風貌と氣品とを備ふ、氏の家業と造酒を業とし、產また鮮からず、而かも君が不生產的政治運動のため、約ね遺產を蕩して、今は清貧の國士を以て任じ、稻荷山上瀟洒たる一茅舍の下に、酒を煽り氣を遣る所ろ、氏また政界の一浪客たる面目の躍如たるものがある。



# 中村合資會社長　中村祐七翁

（姫路市龍野町）

姫路市に於て最も成功の躍如たるものは中村祐七翁となす翁は石見國の邊隅に生れ、幼にして大志あり、明治維新の際長州征伐に加はり、其後志を實業に傾け兵庫に來りて有ゆる苦楚辛酸を嘗め、折柄陸軍用達商專崎彌五平氏（先代）の店員となり、其後同家の姫路支店を擔任し、彌五平氏の歿すると共に、自ら同支店を引受け、獨立經營に着手せしは明治二十二三年頃のことなりき、彼が熱心と誠實なる行動は乍ち當局の信任を博し、日淸、日露の戰役に遭遇し、經營悉く機宜に適して、遂に今日の大を成すに至れり、世に今日の彼が成功を目して、所謂火事泥棒國家の危難を機貨として拉し得たるものなるが故に、毫も尊敬に値すべきなしと云ふものあれ共這は彼を貶するの甚しきもの、夫れ或は然らん、然れ共單に御用商人たるが故に全般を推すべからざるは勿論、或一面に於ては當時彼が敏活なる行動は偶々以て國家に貢獻せるもの多かるべく、而かも消極的を事とせる姫路市に於て終始一貫實業界に活躍しつゝあるは、以て多とせずんばあらず。

彼不幸にして往年明を失す、肉眼物を見る能はざれ共、心眼千里の外に徹し、利を見る頗る敏、古稀に垂んたる殘骸を提げて、今尚店舗を輿掌しつゝある活動力に至りては、宜しく後年の模範たるに足るべく、彼が斯る性格は應て今日の成功を贏ち得たる所以ならん乎、而かも世に多くの批難ある所以のものは、彼が製金に敏捷なる半面に於て、散金の術を知らざるによる、蓋し一代の成功者に免る能はざる性癖にして強ち彼一人を咎むべきにあらず。



## 姫路市會議長　前代議士　町田猛郎君

（姫路市光源寺前）

闘子彌之助氏は夙に翁の店務を補佐し、其才を愛して闘子となす、慮名を趁はず邊幅を飾らず、性溫順にして覇氣に富み、同地方に於ける少壯實業家の一異彩たり。

高歩貸と潜り代言、徒らに鞅念的人物の跋扈を極めつゝある姫路市に於て、比較的素質の善良なるものを擧ぐれば町田猛郎氏であらう。

氏は姫路藩士文久元年を以て同市櫻町に生る、幼にして藩校好古堂に學び、次いで龜山雲平、多田準平の門に經子の學を修め、維新後商飾學中學校、又文部省直轄大阪師範學校に入り、卒業後丹波、但馬、播州地方に於て教鞭を執り、明治二十二年姫路市政の實行と共に市會議員に擧げられたるを始めとし、爾來數回の改選毎に引續き當選して以て今日に迫び其間市參事會員となり、現に市會議長の椅子に凭る、曾て品川子爵が國民協會を組織するや其麾下に馳せ、後ち佐々友房氏が帝國黨を組織するに當り、之が擴張に盡瘁し、三十五年兼議院議員の改選に當つて推されて同黨候補者となり、進歩黨の砂川雄峻と爭ひ、不幸僅に一票の差を以て落選したが、尋いで三十六年再び總選擧となるや、再び立つて岡本柾太郎濱本彌三吉の兩氏と鬪ひ遂に月桂冠は氏の頭上に落ちた、其他姫路家屋稅問題、或は市獨立請願委員、姫路奬勵會の設立等に盡瘁し、市の公人として方面の將である。

性は謹厚にして態度禮節兼ね備はり、毫も詭計を弄する等のことはないが今尚教員氣質を脫せず、從つて其輪廓の狹少なるは、偶々以て木ッ葉人物に頭を擡げしめ一頭地を抽く能はざる所以ならんか、此れ卽ち氏が一長にして一短ある性格として人の惜しむ處である。

## 姫路圓證寺住職　近藤純悟師

（姫路市東魚町）

十三年大谷女學校、三十五年淑女學校の設立に盡瘁し、同年淑女學校長となり、主として修身科を擔任し、傍ら師範學校德風會を起し、市内佛教青年會、婦人洗心會を創設し、深淵なる學識を披瀝して宗教思想を皷吹すると共に德風の向上を絶叫し、教育界に貢獻せる功勞太だ多く、されば徒らに出世間的に拘泥して信徒に寄食するを以て能事とせる厄介坊主の多き時に當り、師の如きは活氣ある新進の宗教家として大に嘱望するに足るべし。

方今の教育界が多くは物質的に偏して更らに道義を顧みざる弊風あるの時に當り、身を宗教界に起して專ら精神教育に盡瘁しつゝある近藤純悟師の如きは大に吹稱せずんばあらず師は明治三十二年眞宗大學を出で、更らに研究院に入りて教育と宗教の關係に就いて專攻し、曾て精神主義を唱導し、絶對他力の信念を皷吹し、眞宗一派の革清を企て、最も健全なる宗教家として嘖々の聞へありし、浩々洞清澤先生の門下に肩し、其意を承けて身を精神教育に委ぬるの決神を固め、自ら發起して本山を擁し、明治三十二年姫路大谷小學校、翌三

## 姫路醫師會長　藤岡慶次郎君

（姫路綿町）

因循にして頑固、消極的にして卑吝陋劣を事とせる姫路市に、近時新進の醫學者が頓に增殖しつゝあるは、幾分か進歩的文明的の傾向を迎へたるものとして、之を悦ぶと共に、且つ同地の杏林は比較的清新の色彩を帶べる唯一の精華であらう、願みれば明治文明の先驅は多くは蘭醫にてありき、されば姫路市が此等新進の醫家によつて開發指導せらるゝもの多かるべく、余輩又此を期待せんとするものである。

今より十年以前の姫路醫界は何れも草根木皮、傷寒論を以

て唯一の信條となし、カラコロと利休下駄を穿ち、患家の臺所を出入する底の人物にして、客ちん坊なる姫路の風習は亦却て之を歡迎し、而も人類の最大罪惡たる病患を治療するに足るべき技能を有するものに乏しかりき、此時に當り新進の學識と才腕兼ね備へ、依然として官醫たらんか昇進榮達の洋洋たる前途を有し、若しも都會に開業せんか一流の大家を壓するものあるにも拘はらず、蹶然として名利を擲ち、姫路の醫界を革新すべく起つたものが卽ち藤岡慶次郎氏にして、播州人士の大に感謝に値する次第である。

醫師　黑田玄通君

（姫路市吳服町）

播州の杏林人物に乏しからず、而かも熱心に研究し、孜々として其職に盡すもの黑田玄通君の如きは稀なり。

家は岐阜縣大垣藩士にして代々醫を以て業とし、氏又其志を紹いで明治三十年東京醫科大學を出づ、其間內科を專攻して成績優等儕輩に絕す、卒業直に同大學の助手となり、後ち桑名病院に聘せられて內科を擔任し、其後更らに姫路病院長に轉じ、明治三十七年同地に開業せり、今や藤岡慶次郎氏と共に姫路市の雙璧として重きをなし、氏の診療に從ふや一種の趣味と愉快を以てすと聞く、之卽ち醫人になかるべからざる條件なり、若し夫れ利慾の爲めに同情を忘れ、人の子を見る器械の如き、當今醫界の弊風は氏によつて之を見ることを得ず。

氏は性謹嚴一見して大に尊大なるが如きも、親しく接するに及んで、一種の溫た味を逸出し、患者の信賴厚き決して偶然にあらざる也。

氏は備後福山町に生れ、明治二十九年頃東京醫科大學を出で、翌三十年姫路病院に聘せられて副院長となり、尋いで院長に進み、令名太だ高かりしも、遂に官を辭して同地に開業し以て今日に迨んだ譯である、性恬淡寡慾、當今醫界の弊風たる、利害の爲めに患家に阿諛する幇間的のものと異り、毅然として醫家の神聖を重んじつゝあるが如きは、腐敗墮落の刀圭界稀に見るの人である、曩に姫路醫師會長に擧げられ、斯界の向上進歩に盡瘁して居る。

醫師　山本壽雄君

（姫路市豐澤町）

古きを尊む我國の風習は、家柄の古きを以て社會的の尊敬を受け、又商人が老舖を重ずることも甚しいが、此と同時に刀圭家の如きは尙更ら家格が必要である、其一例を擧ぐればロンドンの或名高き老醫の談に曰く「私が醫師になつた初めに、パーソロミユ病院に居つた、所が或日一人の田舍者が來て、コンナ不思議な腫物が出來て、田舍の醫者がエー癒さぬソレで態々貴院へ參上したので診察して下さいと云ふ、そこで早速診察したが、實は私にも分らぬ、如何にも不思議な腫物である、ケレ共職務上分らぬとも云へぬので、よい加減なことを云つて御茶を濁ごし、傍にありし膏藥を塗り付けて歸した、其膏藥は豚の脂に何か少し入れたもので、元より太したものではなかつた、然かるに翌々日患者がヤツて來て、大きに具合がよいと云ふ、診察して見ると先きに眞紅なりし腫物が大變によくなつて居る、又豚の油を付けてモウ直に癒ると云ふと、患者は流石に名高い病院だけあつて偉らい、田舍の醫師では癒らぬが、當病院へは一度來た丈けでコンナになつたと悅んで歸つた」此談話は所謂爾の信仰爾を救へりで、病院の老舖が精神的に治療したと云ふ告白である、這は併し獨り西洋耳ではない、日本は尙更ら家格が必要である、されば山本壽雄氏の如きは、今を距る十九代以前より醫を以て業とし、代々阿保村に住し、阿保家と稱して姫路醫界の代名詞たるに至つたもので、最も尊重すべき家柄である、其後先代敬之氏が夭折せられ、一時中絕の不幸を見るに及んで、弟の梅田丁氏が其後繼者となつて居つた、然るに氏は明治三十九年京大醫科を出で、其後同大學の助手となり孜々として實際的の研究に努め、三十九年十二月祖業を紹いで開業せられたが、氏が新進の技術と家格の威嚴と相俟つて、患家の信賴太だ敦く、常に門前市を爲して居ると云ふ有樣、定めて祖靈は地下に勇躍しつゝあるであらう。

## 醫師
# 豫備海軍々醫中監 岡部千之君

氏は明治十八年海軍々醫生として東京醫科大學に入り、海軍々醫となり同三十二年病氣の爲め辭職し、三十七年二月日露戰爭に召集せられて海軍々醫學校教官となり、戰役終るや共に三十八年姫路に於て眼科專門に開業し、現に豫備海軍軍醫中監たり。

氏は資性淡快洒落にして軍人流の人なり、患者に接するや親切職務を執る最も忠實、其信用と聲望は倍々地方に嘖傳せられ、手腕の凡ならざる縣下有數の名醫たり、地方に於ける專門醫は頗る經營に苦心すると聞くも、氏の如く醫學の蘊奥を極め多年實際の經驗あり、且つ熱誠なる扱振りは能く今日を致したる所以ならずとせず、其人格は又紳士として推奨するに憚らざる所なり。

（姫路市新見町）

# 姫路電燈會社專務取締役 矢内久七君

姫路市に人物がないは否な姫路の人間は殆ど愛想の盡きるものであるとは、單に余輩一個の私言ではなく、天下一般の定評である、曾に現代の人物に乏しき而已ならず、將來同市を雙肩に擔つて立つべき責任ある後繼者、卽ち青年の人々に意を強ふすべきものなく、同地の青年輩が魚町と博奕と親の金を費ふことより他を知らぬと云ふ、惰弱嬌靡の風潮は實に慨歎の至りである。されば矢内久七氏の如きは、今尙年齒少にして、彼が今日迄に於ける半生の經歷に至ては、未だ大に

（姫路福中町）



賞揚に値すべきこともないやうであるが、併し比較的志を遠大に馳せて居る有爲の人物のやうである。

先代久七氏は同地實業界の雄鎭として、呉服商を營み頓に家道を起した人である、氏は乃父の歿後家督を承け、遺業の發展に努力し、更らに業務を擴張して支店を設け、益々文明的の經營に腐心して居ると共に、現に電燈會社の專務取締役として之が經營の衝に當り、水力電氣工事の創業施設を擔任して、遂に竣工を見るに至りたるが如き、氏の手腕による處多く、大に後來を嘱望するに足る。

氏が經營の衝に當れる姫路電燈會社が單に姫路市に止まらず、播州地方僅に人家彫密の處とし見れば、直に電燈事業を經營して射利を目的とせる、固より營利會社としては不可なしと雖、田舍の村落に不生産的の電燈を點せしめ、地方人民を奢侈に導くに汲々として、他の生産的事業を顧みざるに至つては、苟も國家的觀念を以て事に當り國家の前途を憂ふべき代議士の任にある、社長を初め、地方の先覺者を以て任ずる氏に向つて一言反省を促さんとするものであるが、併し同社は今尙草創過渡の時代に屬し、爰に品隲するの早計たるを思ひ、之を他日他の誌上に讓つて置く。

## 石町長
# 鷲塚貞操君

（明石郡明石町）

氏は明石舊藩士、嘉永五年を以て生る、幼にして聰明類敏既に十四歳にして大番士となり、翌十五歳兵庫市街整頓の爲めに出頭を命せられ維新に際し十六歳にして京都御所警衛の任に加はり後ち岡山藩に新式兵術の修業を命せられ、歸藩後藩の兵術教官となる年漸く二十一歳寇に神才と謂ふべきであ



る、されば其資性寛厚襟度洒落の裡に自から武人の氣魄が窺はれる。

斯くて後氏は大藏省十五等出仕を命せられたが病の爲め幾許もなく鄕里に歸臥し、更に明石郡一等戸長を拜命せしも後ち去つて實業界に其儼然たる風姿を見はし、岸本豐太郎氏が

明治二十五年岸本銀行を創立するや氏は其相談役として萬事に預り今日に至るも青松の和音は兩者の間に傳へられて居る其清廉剛直の士風は又夙に播州松平家の顧問として、子爵の信頼厚く、聲望を擔ひ、別に兵庫貯蓄銀行重役としても尚且令聞がある。

明石は風光明媚の地、貴顯紳士の來往繁く又永住の居を卜する士人の增加によりて、晩近驚くべき發達を來たし、從つ



# 明石電燈會社長　內藤彌兵衛君

（明石町）

明石は阪神の市場に接近して航運の便を有し、古來商業の要衝地として、此地に據つて巨萬の富を獲得したる、先代米澤長衛翁の如き、一大成功者を出したるにも拘はらず、現在の明石人士は頗る消極的にして、遊惰安逸を貪りつゝあるもの多きに反し、終始一貫實業界に立ち、地方の爲めに盡瘁しつゝある內藤彌兵衛氏の如きは同地資產家中の一異彩である

家は代々海產物の賣買を營み、傍ら質屋を業として居つた氏も又現に之を營みつゝあるが、性溫良事に當りては熱心、一度企劃したる事は如何なる障碍に會ふも、貫徹せざれば止まざる底の牢固たる意志を有し、常に地方實業の振興を圖り產業の開發に努力し、明治二十七年頃明石電燈會社を創立し引續き社長に擧げられ、種々の難關を排して今日の發展を劃し、更らに業務を擴張して加古川、高砂町電燈を兼營し、或は明石貯蓄銀行創立以來重役として其經營を主宰せるが如き共に氏が眞摯なる經營指導の功多きに居る。

嗣子輔之君は龍野藩士脇坂家の出にして、曩に東都に學び今や家政の一切を擔任し、性淡快、同地方少壯人物として稱に見るの人である。

# 亜水村長　安井保太郎君

（明石郡垂水村）

明石郡に於ける國民派の雄鎭として、將た少壯人物として最も將來を嘱望せられ居るものは安井保太郎氏である、氏は垂水村の農家に生れ、元來同地は一村落として、親譲りの田地田畑に蕪や大根を植ゑて居つたが、神戸市の發展と別莊の流行は、自然蕪畑に家が建ち並び、爲めに意外にも地價の昂騰を來たして、今日の如く財產が太つた譯けである、加ふるに氏は少にして聰慧、殊に性質の溫良にして悠揚たる、毫も躁り侮る等の氣障な處がない、從つて村の漁師や百姓には、大變に崇められ、氏も又金はある名譽が博したい野心の起るも當然で、去る四十年の改選期に縣會議員を爭ふて之に當選した、元と明石郡は政友派の根據であつたが、氏が之を制したと云ふ功勞によつて縣參事會員に推されたと云ふ、洵に仕合せな人である、併し氏を單に幸運な人であると言つて評し去る譯けには行かぬ、何となれば現に垂水村の村長となつて居るが、同地は戸數又は人口の上より見るも、優に町制を施行すべき資格がある、而已ならず同村に住居して居る人物は誠に雜多なもので、別莊住ひの貴顯紳縉も多く、又少しも道理の判らぬ漁師や百姓もある、故に此村を司るには却々容易のことではない、然るに圓滿なる村治を擧げつゝあるを以て見れば、氏が信望と手腕の凡ならざることを窺ひ得べきであらう、要するに氏は年少未だ過去の經歷を以て、全豹を推すことは出來ぬが、今より倦まず怠らず、智識の向上と人物の修養に努めたならば、大に飛躍の期があるであらう。

# 明石貯蓄銀行頭取
# 平野林藏君

（明石町）

明石町の現代實業家中にあつて、比較的成功の躍如たるものは平野林藏翁である、同家は代々米穀の賣買を營み、翁は少壯此の道業を繼襲して、只管勤倹力行を旨とし、終始一貫一代一業主義を以て世に處し、以て今日に至つた人である、故に翁の經行に就いては、別に特筆すべき大事件もなく、勿論何時何萬圓の金を贏ち得たと云ふやうな、華々しい權謀的の經歷はない、言はゞ翁の頭には駈引もなければ無理算段もない、生涯を至誠忍耐で通した人である、從つて翁の資產と人格に比例して聲聞餘り高くはないやうである、併し世の所謂風雲に乘じて一攫千金を贏ち得たと云ふ奇驕なる經歷は、面白味はあるが、此位い青年を誤らしむるものはなく、殊に秩序の整然たる今日の時代にあつては、到底權謀を以て成功することは覺束ない、故に余輩は平和の成功者として、寧ろ翁の如き堅健なる成功者を大に吹稱せんとするものである、而して一代分限と云ふものは多くは吝嗇に流れ、唯だ製金の術を知つて散金の術を知らぬものが多いやうであるが、翁の如きは之と趣を異にし、公共慈善の爲めには喜んで貲を捐てると云ふ風で、總ての方面に批難の少くない圓滿なる人物である、今や實業銀行の頭取として、之が經營を掌つて居られるが、思ふに同行が今日の發展は翁の力に負ふ處が決して尠くはない、翁は六十餘歳の頽齡を以て今尙健全、至くの商人風で質朴なる態度を以て世に處しつゝある處は、同地方に於て得易からざる人物である。

# 明石醫師會長
# 小野寺秀太郎君

（明石町）

氏は日本武士の典型として、忠肝義膽の表彰として、歷史の數頁に色彩を放ちたる、一大悲劇赤穗義舉の名士、小野寺十內秀和の後裔にして、十內の事業及び功名は、今更ら說くまでもなく、後世士人の激賞して措かざる所、是より先き十內は加西郡に至り、義舉の消息を韜晦すべく、姑らく覆面の醫となり、仙十庵と號して玄關を構へ、四男あり、草詮、草悅、玄桃、玄南と稱す、氏は卽ち玄南の末裔にして、同じく祖業を襲ぎ醫を業とし、以て今日に迫んだものである。

氏は大學の別科出身にして、實に播州における洋法醫の鼻祖として、姬路の梅田了氏と偕に成功者の雙璧として景仰せられつゝある、若し夫れ赤穗義舉の名士中子孫の永續せるもの甚だ稀なるに拘はらず、獨り十內の血脈が三百年の今日に連綿として傳はり、儼然祖業を繼襲し來りたるは、蓋し浮沈少なき醫業の賜たりと云はねばならぬ、されば氏は常に志を爰に致し、只管家名を失墜せざらんことを期し、祖先の心を以て心となし、患家に接するや義と俠を以てし、親切懇到を極め、資性また忠直、明石郡醫師會の會長として斡旋盡力具さに至り、計畫獻替渺しとせず、僚友の信望最も敦くして、會の振作發展に勗むる所多し、息喬氏は夙に東都に遊學し、帝國大學の最高學府に入り、既に業を卒へて門を張らんとするに至る、これ亦帝大秀才の一として推され、多くの未來を有する青年紳士たり、義士の系統と餘芳をうくる氏の家門の倍々光輝ある生命を持續せんことを祈つて置く。



# 神液發明者
# 醫師　港　謙一君

（明石町）

晩近我國に於ける醫術の發達眞に驚くべく、明治昭代の賜として吾人の大に慶ぶ處である、されば斯界の大家と稱せられ、學者博士を以て任ずるもの甚數甚だ多しと雖、而かも多くは泰西の糟粕を嘗め、未だ本邦獨特の技術或は藥液を發明して斯界に貢獻したるものは稀である、然るに偶々世界的空前の大發明を以て、天下を睥倪し、人類の幸福に寄與しつゝ

ある、港譲一氏の功勢は大に之を吹稱しなければならぬ。

抑も氏は嘉永二年を以て大分縣宇佐郡長洲に生る、本姓は南氏南尚翁の愛甥たり、幼少の頃豊後國田澤町の醫叔父山下氏に養はれ、帆足萬里の高弟東橋に就いて漢籍を修め、宇津宮誠齋に醫を學ぶ、明治五年大阪に來りエルメレンス氏に、後神戸病院長山田俊郷、縣備教師ベレー氏等に就いて醫學の蘊奥を極め、明治七年明石町の港氏を冒して同地に開業した同十年頃より自ら傳麻質斯病を愛ひ、病痾に呻吟すること數年、此間に於ける氏は日夜煩悶憂苦、而かも未だ之を治するに足るべき名術良藥なく、私かに醫を以て任ずる身の腑甲斐なきを慨し、天に祈り神に誓ひ、三考九思一日として廢せざりしが、天は其至誠を憐み、俗然として遂に一劑を發明した而して之を自ら試みるや疾患乍ち癒へ、人に施せば奇效神の如し、更らに一大奇とする處は、他の併發症が共に治癒するに至つたことである、それより諸症に試みるに一として奇效を奏せざるは莫し、されば其不可思議なる奏效に驚き、遂に神液と命名して、自ら之を應用すると共に、又他人に分與して應用せしめつゝあるが、何れも其奇效に喫驚せざるはなく今や内地は勿論諸外國より之が治療を請ふもの多く、又其貢獻を多として、各患者より謝狀を寄せて居ることは、實に夥多しいものである、然かも一時は他の同業者より甚しき迫害嫉妬を受けたが、實際神液治療により九死一生を得たるものは數が知れぬ、此不可思議なる奏效には既に理論の餘地もなく、今は閉息するに至つたと云ふことである、余輩は敢て專門的の智識を有せず、然れども理論は兎も角、幾多の病患を治癒して、終局の目的を達するに寧ろ疑ふべき餘地なしとすれば、實に氏が一大發明の功勞を多としなければならぬ。

氏は人と爲り溫順、眞に仁者の俤を存し、漢籍の造詣深く詩文を能くし、其高風欽すべきものがある、今其一節を掲れば。

## 醫師　三浦幸彌君

（明石町）

人に人格の重ずべきは今更ら喋々するまでもないが、就中醫を以て業とするものは最も愛に意を致さなければならぬ、一概に云ふ譯けには行かぬが、人の病氣の多くは精神狀態に關係するものである、されば病人其者は醫師の提供する藥液が果して自己の病氣を治療する上に於て、適當なるや否やを自覺するものは尠ない、何れも醫師の人格に信賴して、天地

醫

西醫傳法到吾東　扁鵲巍波女術未窺
診脈三焦全解毒　施針九孔氣更空
刀圭奪得神通力　藥品含來造化功
不佞宮家兼顯勢　救貧誰與我醫同

も代へ難き生命を供託するのである、誠にも氣から病と云ふことがあつて、彼の醫師の診察を受くれば、必ず治癒するものであると確信すれば、藥の效き目よりは寧ろ其精神作用が治病上大に效果があるものである、又彼の醫師の診斷を受けて治れば頂上、縱し不幸にして此世を去つても本望であると云ふことは往々聞く例である、恁る信賴を受くべき大責任ある醫師が、利慾の爲めに品加減すると云ふに至つては、罪惡も此より甚しいことはない、然るに近來醫道の頽廢甚しく、徒らに門戸を張つて俗世間を眩惑し、金錢の爲めに大切なる病人を愚弄し、胃病には鹽水を注射したり、眼藥には蒸溜水を注して金を取ると云ふ、惡德醫師は世間往々あるやうである、けれども當該病人は素人である、宜しく此邊の事は醫師其人の人格に信賴する外はない、而も斯界に人格の士が甚だ鮮くないと云ふに至つては、實に慨嘆に堪ねない次第である然るに偶々嶄新なる技術と崇高なる人格を兼ね備へ、其天職を全ふしつゝあるものは三浦幸彌氏である。

## 醫師　芦田順造君

（明石町）

氏は姫路藩士幼にして醫に志し、後ち岡山醫學專門學校に學び、時の教頭眼科醫界の泰斗、井上通泰博士の高弟にして業を卒ゆるや次で同校の助手となり、飽く迄博士に私淑した人である、氏は又單に博士に就いて學術の蘊奥を極めた計りではなく、一面博士の清廉なる人格に親炙して、其訓陶を受け、當時氏が同校に助手として在勤するや、氏が監視せる眼科の學生が風紀頓に更まり、一般學生の模範たるに至つたさうで、同校の教授連が總て何事にても、眼科の三浦に見習へよと言つた位であつた、以て氏が少壯既に非凡な人材であつたことが解るであらう、其後姫路に開業して同地方眼科醫界の明星と謳はれてあつたが、家事の都合によつて明石町に移り、今尚依然として聲名を擅にして居るのも、決して偶然ではあるまい、性溫順篤實、人に接しては親切、加ふるに一種の趣味と愉快を以て診療に從事すると云ふに至つては、當今の醫界には稀に見る人物である。

氏は代々丹波國佐治村に住し地方の名門にして、維新前地方の大里正として、父源五郎氏は識見手腕凡を拔き、所謂當代の行政事務に干與して、國閒の輿望を一身に鍾め、勢力、全權一門に輝き、德行また高く、今に追ぶも里人の傳稱措かざる處である、されば氏が恁る名流の出にして乃父の衣鉢を受け、夙に醫界の達士を以て目せらるゝ所以のもの決して所以なしとせず。

氏幼より醫學に志し、天下の大國手を以て任ずるの大抱負を懷き、蚤く神戸醫學校に入學し、研鑽こゝに歲あり、螢雪の功空しからず、成績優良を以て同校の課程を了へ、進んで大學の門を踏み、以て斯學幽玄の域を極めて、學界に裨益し醫家本來の面目を發揚すべく心掛けたる折柄、神戸の大野輝吉君とゝもに、才幹伎倆傑に絕すと認められ、縣有司の推擧に與かり、縣費を以て大學別科に入り、學理及び實際の研究に心身を委ね新學の極致を窮つて明治十九年業を卒ゆ、一枚の卒業證書を手にすれば、得々として鄕黨に誇り徒らに自己を大にするを以て、當時の卒業生なるものゝ通弊たりしが、氏は之れと趣を異にし、姑らくも學に遑かり業を廢するの恐を避け、直ちに佐々木病院の一醫員として、學理及び實際の研究に年所を費し、後ち二十三年に至り病を清境に養ふべく傍ら門戸を張り一般患者の需めに應ずべく、地を明石に選み開業したのである、氏が門を開くや、病を擁して蝟集する輕重患者雲のごとく、同地小野寺君と相駢んで、聲名頓に嘖々たるに至り、地方の刀圭界の偉材として一般の崇敬を稟くること渺からず、先に新たに第を築きて家門倍々振ひ、同地の先輩として重きを爲しつゝあり。

## 伊藤家農會幹事　船津吉太郎君

（印南郡曾根村）

近時人を論じ人を評せんとするものを見るに、徒らに其事業の大にして其聲の高きもの耳を以て、直に之を英雄なり人物なりと斷じて、敢て他を顧みざるの風がある、然り一代の人と生れ同一の生涯にあつて、偉大なる事業に成功し萬人に超脫して、國を富まし世を益するものは、余輩と雖又成功者なり人物なりとして之を吹稱するに躊躇するものではない、然れ共人には時あり場所あり境遇あり、將た又天與の運命あり、以て人爲の如何ともすべからざるものがある、されば德川家光の天下無役のものなしと云へりしが如く、上は王侯大臣より、下は雪駄直しに至る迄、何れも天の命ずる處にして即ち各自の天職ならざるはない、故に人として王侯貴人を欲せざるなしと雖、徒らに他を羨望して到底萬人の企及し得ざるものなれば、各境遇を辨へ運命に安んじ、天職に忠實なるものを以て、吾人は社會國家の良民として、之を吹稱するに憚らざる所以である、然るに近時成功談と云ふこと大に行はれ、政治家となり、金持となりたる人の經歷、談話が新聞雜誌に載せらるゝこと多きが故に、青年の心は動もすれば浮足となり、何か世間に名の聞ゆる程のものとならねば、自ら意氣地なき樣に感じ、一身茅屋に住むと雖、其心掛によりては大臣富豪よりも、寧ろ深く、強く、國民の進歩發達に貢獻し得べきことを覺らぬもの多ければ、今は其對症の藥として、強く此事實を說くの要ありと感ずる所以である、然らば船津吉太郎翁の如きは、無資無名の一老農として、又逸すべからざるの人物であらう、

翁の家は紫と神崎郡船津城主菜が歸農せるものにして、同地の舊家として代々里人の信用厚く、翁は維新後同村の戶長となり、又は村長となり、地方自治の開發に貢獻する處多く縣制の發布と共に縣會議員に擧げられたることありしも、選擧運動の行はるゝに及んでは、豫然として之を退け、自ら村夫子となつて、鄕倍の周旋を以て任じ、些かも飛ばず、忠實なる老農として圖閒に重んぜられ、其人と爲りが何如にも善良なるものあるより、富豪伊藤家の信任を受け、曾て伊藤家農會の組織せらるゝや、同會の幹事を命ぜられ、其他同家の執事として、最も重用せられてある、而して翁が伊藤家の主人を仰ぐや畏心誠意、伊藤氏の翁を見ること、又普通の番頭視せられては居らぬやうである、翁も又此を無上の榮譽として陰日向なく勤めて居る處は稀に見るの美風である、翁は何れかと云へば手腕の人ではないが、性質の善良なる點に至ては得易からざる人物である、されば翁の如きは其天職を辱しめざる圓滿なる人物として吹稱するに足るであらう。

## 郡會議長　吉田喜代松君

（加古郡水尾村）

加古郡の人物は多くは消極的引込主義にして、何等事業界に活動せざる計りでなく、單に一身一家の偷安を貪り、社會公共の事にも腐心するものが甚だ少くない、恁る人物の多き中にあつて、獨り身を挺して多年地方公共に盡瘁しつゝある

吉田喜代松氏の功勞は之を逸することは出來ぬ。

氏は中津村の長老として、曾て五箇井水利組合長として奔走する處多く、町村制實施以來村會議員として村治に劃策し現に村長として村政の刷新を斷行し、發展策に努力して居る

## 神野村長　大西玉之輔君

（加古郡神野村）

氏は明治八年下西條村戸長を命せられ、後ち町村制の實施に伴ふて村長に擧げられ、以て今日に迨ぶ、四十年に遡き歳月を村治に傾注して、尚ほ倍々奬勵當職に竭盡する氏の如きは、有一無二の經世家と謂はざるを得ぬ、宜なり內務當局は曩きに地方自治奬勵の上より、氏を模範村長として選賞し、大いに其功勞の凡ならざるを稱揚した、今ま氏の村治に竭したる一斑を窺ひ、以て氏の人格、手腕を窺はんか。

氏は三十六年に於て石守信用組合を組織し、百三十人の組合會員を得て、各々零碎の金を醵せしめたるに、其額壹萬五千圓に上りて、適當の利殖法を圖るの傍ら、之れを小農者に低利貸附し、其恩澤に浴せしめつゝあるが如き、他に其の類例を見ざる農業經濟の最適法にして、氏の如き老熟なる村政家にして、初めて斯の如き意案を策することが出來る、果せるかな近鄰部落、また氏の經濟眼を偉とし、この法に則とりて以て、農村疲弊の落潤を防ぐことに努めて居る、氏はまた



明治四十年縣會議員に擧げられ、郡會議員、郡參事會員となり、今尚郡會議長として、郡政を統轄し、年尚漸く加はり、溫良恭謙、同地方の重鎭である。

自治の精神を發揚すべく、同村の士女を慫慂して戸主會、主婦會、少女會、青年會の各團體を組成せしめ、各種社會事業の改善に、德育智育の奬勵切磋に努力を促がし、つねに新氣を注入するに力め、一村の風紀をして見るべきもの有らしめ氏の指導と感化が地方德教振興の上に、至大の餘響を與へたるは、素より氏の篤行の然らしむる所たるとゝもに、堅實なる自治能力の涵養は、以て幾多農村に誇りとするに足るべくこの他、三十九年主なる村民に說き、耕地整理の目的を以て、石森西の山外二箇村の畑地百三十町歩を水田に改良せしめ、蒸汽機關を用ひて同村の水流を八十尺の高地に引揚げ、成績の優良を示して、年々植付けたる水稻より多額の增收を見るに至らしめ、近くは同村不毛の原野を開墾せしめ、同一の方法に依つて加古川の水流を引用し、貯水池を設け百五十町歩の水田を開拓せんことを企劃し、遂に現今設計成りて工事に着手しつゝあるが如き、氏は曾に無形的精神的の振興に竭すのみではなく、恁る國益的經濟的方面に着眼し、姑くも休する時がない、今や各鄕の治者被治者爭ふて氏の門を叩き氏の高風を欽するとゝもに、その村治經綸を聽取し、以て自家の用意に資せんとする者、幾百人なるを知らぬ、氏の如きは地方に於ける善政家、經綸家として、眞に幾萬村治に干かる者の範とすべき、偉大の人物と謂はねばならぬ。

## 酒造家　三宅利平君

（加古川町）

加古郡は印南郡の如く大富豪はないが、比較的中流以上の資產家が多い、而して中には多木粂次郎氏の如き、突飛なる事業家もあるが、多くは消極的で、唯だ親讓りの田地を持つて、一粒の米でも餘計に取り立て、氣樂に食ふて生きて居るとゝ云ふ風の人々計りである、斯る資產家の多い中にあつて、偶々進取的の活動をして居るものは三宅利平氏である、氏は多可郡に生れ曾て京都同志社に學び、後三宅家の養子となつた人である、同家は代々酒造を營み、現に四國岡山方面を販路として盛んに釀造しつゝある、而して氏は深遠なる學術を修めたるに拘はらず、覇氣滿々たる處より近時輸贏場裡に出入して太だ香ばしからぬ評判がある、由來同志社は突飛なる人物を出し、德富猪一郎氏が虛名を趁ふて落隕の奴隸となり金森氏が相場師となり、末路甚だ振はざるを以て見れば、固より實業場裡に駸駸せる氏が相場に手を出したりとて、別に責むる譯けには行かぬが、又餘り擧むべき業でもない、這は想ふに年少氣銳に逸りたる一時的の行爲にして、學あり識ある氏は必ずや前過に懲み着實なる行動を執つて、更らに大に成功するの時があるであらう、若し夫れ同窓三宅博士、古谷久綱氏等と共に、同志社の維持策に盡瘁し、加古川町の繁榮策に腐心しつゝあるが如きは、之を大に多とするものである

## 加古郡醫師會長　佐々木豐次郎君

（加古川町）

氏は赤穗町に生れて姬路に成長し後ち濟生學舍に入り明治三十三年卒業、直ちに加古川町に醫術を開業し、去る三十二年以來醫師會長に推薦され今日に到れり、氏は其職務を行ふ極めて忠實にして而かも開業以來二十餘年、土地に於ける信

用と令名は漸次重きを爲し、醫師會の爲め盡力すると共に加古川町の發展に就て盡す處も又少からず、以て同地方に重き

# 醫師 股野芳三郎君

（加古川町）

氏は龍野藩士股野三郎氏の長男にして、卽ち藍田股野翁の從弟たり、幼少醫を志して東都に出で、佐藤博士に就いて研鑽すること數年、明治十九年を以て龍野町に開業した、當時未だ洋醫を學ぶもの鮮なく、爲めに大に歡迎せられ、種痘醫として同地方を巡回し、後ち監獄醫師として姫路分監に在勤したが、俛く迄職責に忠なる氏は、日進月歩の學術に遲れざらんことを期し、再ひ東京に出でゝ大山節卿氏に倚り、同家の代診を勤むる傍ら斯新の學術を研究し、數年の後歸來更らに加古川町に於て開業し、以て今日に迄んで居る譯けである、其間同地方傳染病豫防に就いて町政の紊亂を指摘し、當局者の失態を皷號する等、大に努むる處あり、又產婆講習會講師、鐵道院囑託醫として盡瘁しつゝある、道に名門に生れ武士的氣風を亨けたる氏は、毅然として時流に阿らず、技術よりも醫政を以て世に處せんとする、當今の醫家と大に趣を異にし從つて患者の汲收に努むることなく、玄關は比較的寥しいやうであるが、此れ併し氏が人格の高い處であらう。氣品高雅にして常に茶を沽し、花を活け悠々として奥床しい處がある。

加西郡に於て資產信望兼備へ、實業界の代表者として重きを爲すものは志方耕三氏である、代々農を以て業とし、傍ら酒造を營み、同地方の名門として夙に里人に敬仰せらる、氏は幼にして學に志し草庵池田先生の創設司監せる青谿書院に學び、折柄維新擾亂の時に當り、同窓の志士と謀つて王事の爲めに奔盡する處あらんとせしも、恰かも家道相續の時機に際して頻りに歸鄉を促がされ、長男としては其任を辭することが出來ぬ、止むを得ず涙を呑んで同志に別れ遂に家庭の人となりぬ、爾來家政を承けて其守成を全ふすると共に更らに今日の大を致し、一面郡會議員として郡政に參劃し、村長としては地方自治體の改善發達に努力し、或は酒造組合長として製品の改良と販路の擴張に腐心し、以て同地方の產額を增進せしめたると同時に聲價を發揚し、又は山林濫伐の弊を革ひて、自ら殖林事業を經營し、範を一般に垂れて之を奬勵したるが如き、近時大に覺醒の氣運を招致せる所以のもの、氏の力に負ふ處太だ多し、氏は又夙に金融機關の必要を唱へて有志と共に北條銀行を創立し、多年取締役となり現に頭取として之が經營を主宰し、地方物產の振興に寄與したる而已ならず、更らに積極的の方針を以て各地に支店を設け、行運

# 北條銀行頭取 志方耕三君

（加西郡多賀野村）

益々隆盛に趨き同地唯一の銀行たるに至れるもの、氏が手腕信望の與つて力あるや勿論である、若し夫れ風紀の頽廢を慨いては、敎育勅語を奉戴して敎育的施設に盡瘁し、自ら貧を投じて村侶の翁媼を慰藉しつゝあるが如きは、稀に見るの美擧として大に吹稱するに足るべく、性沈毅にして寡言頗る同情の念に富み、德望一鄉に洽く同地方の雄鎭たるに恥ぢぬ。

# 加西銀行取締役
# 山下亮効君

氏は山崎藩に生れ、十歳にして桑門に入り、法華山に於て得度し、長ずるに迨び地藏院の院主と爲つた、聰慧敏達、高德の聖僧として一山の歸依厚かりしが、維新の風雲は日本の天地に革明の氣運を磅礴せしめ、排佛論亦た此機に乘じて天下の人心を動かし、此時に當り桑門の奇才たる氏もまた時勢の飜弄者となつて、翩然緇衣を割きて俗世間に出頭し、先づ姬路の世民社支配人と爲りしは、抑も氏が還俗當初の第一歩にして、後ち方向一轉換、印南郡書記てふ俗吏に登用され、次で在田村戸長と爲り、明治二十年に至りて先代伊藤長次郎氏が神榮會社を創立するに會し、迎へられて横濱支店長となり、氏獨特の敏腕を發揮して事業の發展に貢獻する所があつた、降つて二十八年に至り感ずる所あつて、久しく故山の風光に辜きたる氏は、翛然歸臥して是より姑らく俗世間を絶ち悠々風月に親むべく期待せしも、當時北條町の町政大に紊亂を極め、之れを刷掃するには氏の信望手腕に待たざるべからすとなし、北條町民は氏を起して町長の席を強い以て其廓清を一任した、一片の俠骨、直ちに庵を出でゝ之れに應じ、棟達の行政眼と多數の信望とは、克くこの難局を燮理し、紊亂の系統全く解かれ、錯綜の經緯は亂麻を斷つが如くに剖たれ氏の聲望更らに一段の重きを加ふるに至つた、而して三十年に至りては、自から加西銀行を起し、頭取の要地に在つて經營具さに竭す所ありしも、一昨年病癈の故を以て、覓に閑地に就いた譯けである、氏は道に桑門の出たるを以て漢籍の造詣最も深く、詩歌文章の風流に饒み、諷誦に値するもの亦た鮮からず、資性清廉にして里人の景仰する所のもの、蓋し偶然ではない。





# 釀造家
# 稻岡幸八郎君

（加西郡下里村）

兵庫縣の釀造界に於て特に異彩を放つものは稻岡幸八郎氏である、父某は勤儉力行を以て頓に家道を起し、同地方に產出する米穀は、其質頗る佳良にして酒造の原料に適するより自ら釀造業を開始し、氏は之を紹いで盛んに經營しつゝある近時灘地方の釀造家を見るに、何れも尊大驕傲に流れ、廣告耳を誇大にして、實質を迂んじ、甚しきに至つては貧乏華族のお轉婆令嬢を迎へて廣告の代用となし、或は路傍の廣告板を見れば、徒らに何本家と云へる文字を羅列し、以て世人を瞞着して居るものが甚だ多い、然るに氏の如きは之に反して毫も時流を趁はず、只管實質に重きを置き、未だ酒名もなければ商標もなく、廣告抔は一回も出したことはない、多少時世晩れの觀ありと雖、而かも氏が熱心製品の改善に腐心し、顧客本位を營業の主眼となし、品質の善良と價格の低廉に重きを置き、至誠奮勉の結果は、販路頓に擴張して今や個人釀造家として播州の泰斗と稱せらる、以て如何に質實なる經營法たるかを窺ひ得べく、一面氏の人物も推して知ることが出來るであらう。

氏は慶應義塾の出身にして、曾て地方名譽職を經て縣會議員に擧げられ、縣下の少壯人物として大に嘱望せられつゝありしも、蹶然として政界に袂を拂ひ、貨殖の途に汲々として亦他を顧みさるものゝ如く、爲めに地方公共に冷淡なるの故を以て、往々氏の人格を批難するものありと雖も、想ふに氏は今や修養時代にして他日大に鵬翼を張らんとする野心あるものゝ如くである。

嗣子某君は氏と大に性格を異にし、磨揚寛濶少しも衒騒の態度はなく、世態人情に通じ、同地方に於ける少壯人物中唯一人者である。

# 佐治源兵衛君

（北條町）

佐治家の系統を案ずるに、元と丹波の國久下に住して同藩の旗本に屬し、食祿二百三十石を食む、後裔文長に至り神崎郡與田村圓覺寺の開祖となり、其子氏正は卽ち佐治源兵衛氏の祖先である、系統既に係の如し、佐治家が考祖以來地方豪族として、聊を一方に稱したるは固より其所にして、同地の名門舊家として北條の與源と稱せられ、加西郡の代表せし權勢を揮ひたりと稱せらるゝもの、單り古老を傳稱する耳に非ずして、舊記の實在に照して事實は往古を默會して居る。當主源兵衛氏は年少氣銳の有爲の士たると共に、多くの未來を有し、其法學院英語法律科出身といふに觀るも、如何に現代的向上の餘地を存する紳士たるかを窺ひ得べく、併し大器は往々小成病毒に冒され易く、氏も遺憾ながら這個痼疾を獲たる一人たるを免かれずして、品性の上に尠からぬ批難を招きたることもある、惜しむべき事ではあるが、人は老成圓熟とともに自然に風格の一變を來たすを常套とすとも云へば、現在及び過去の氏が荒蕩難は、以て氏の將來を評價し去る譯けには行かぬ、而已ならず氏は現に所得稅調査委員、同審査委員、相續稅審査委員等に擧げられ、且つ地方公共的事業に熱心にして、道路の改築、學校建築等の幹旋盡力に至りては、所謂公人たるの義務を果たして餘りあり、尙且つ地方事業にして將來氏の健腕に俟つもの多からべく、氏たるもの宜しく自衞自省、ます〳〵其の天職を思ふに忠ならんことは、唯り吾人の希望のみにあらずして、實に其名門の出たり、現代の紳士たり、將た氏が考祖の遺芳を汚さゞるべき自負心に愬ふるも決して小成に安んじ偸安を貪る的人物にあらざることを疑はない。





# 加西郡機業組合長　故高井常三郎君

（北條町）

父祖累代綿絲の賣買を業とし、氏は二十歳に迨んで速くも父業を繼承し、爾來拮据斯業に盡瘁して怠らず、山來播州機業家の前身は、多くは綿絲賣買業者より轉業せしもの、氏が機業に志して後年產を造り名を就すに至れるもの、又同じく這の徑行を迪つたものである。

氏は明治初年に當つて白木綿の製造に從事し、高砂染の原料として、旺んに之が製造を試み將た大いになす有らんとするに當り、明治六七年頃に至り商勢頓に挫折して振はずなりぬ、然かも堅忍不拔、起伏は世の常なりとして奮鬪を持續したる氏は、復た頽勢を挽回し、超えて明治九年に至りては正紺染の倍々有利なるを看取し、こゝに阿波國產の正藍を用ひて、染色光澤兩全の正紺染織を開始し、製產品は三丹京阪地方に搬出し、大いに聲價を博するに至りき、氏の進取的にして大膽なる經營手腕は決して小規模に安んずるを容さぬ、十四年に至りては紺絣の製織を思立ち、大和より熟練の職工數名を招致して、盛んに織出しに着手した、名けて常盤織と稱し、巧妙なる意匠と精緻なる製織は大に世に歡迎せられ、常盤織の名は倏ちにして四方に喧稱せられ、更らに一般の木綿縞に絣を交織する新案を採つて、これ亦た如前に倍する聲價と信用を博するに至つた、氏は又常に職工の養成に努め、極めて之れを優遇し、所謂傭者被傭者の現金關係を徹して、全然一家庭の如く親切懇到の待遇に懈らざりし結果は、幾百の職工は氏に接するに慈母の感を以てし、世の冷酷なる雇主の經營法と全く趣を異にしたるより、氏の工場はつねに怡々として平和の春を添へ、氏はこの平和の賜物によりて多くの製產品と多くの勢力を作つた譯けである、時方に日淸戰爭後に當り、購買力の激增に伴ひ、氏が經營の事業も、この時において動かす可からざる根抵を樹へたるや論なく、以て氏が如何に手腕の凡ならざりしかを窺ふに足るであらう。

後ち三十二年に至りては產額頓に增加して、既に工場の狹隘を告ぐるに及び、新たに工を起して大工場を增設し、發動機を使用して事業の功程を進むるに至り、日露戰後に迨んでは幾んど機業界の覇を以て稱せらるゝと共に、機業界の模範人物、模範工場として推さるゝに至つた、氏は又單に自己一家の成功者たる計りではなく、夙きに斯業機關の設備なきを遺憾とし、加西郡同業組合の組織に盡力し、擧げられて副組長となり、組合長を幹けて貢獻する所多く、其後組長に擧げられたが、幾何もなく世を去るに至つた。

されば同地機業界が今日の發達を見るに至れるもの、氏の力に負ふ處太だ多く、今其事績の重なる二三を擧ぐれば氏が女工風儀の維持に努め先んじて寄宿制度を採り、新たに寄宿舍を設けて多數の女工を收容し、絕えて靑春の子女をして邪

路に陷るの不始末を演ぜしめず、只管その精神修養に心血を濺ぎ、或は染工場を設けて染色講習會を開き、又は檢査員を常置して製品の精緻に圖めたる等、經營轉た精到を極めて、全く斯業界の模範を作りたるは、洵とに得難き篤行の人と謂はねばならぬ。

氏に二男あり何れも父業を紹ぎて懈る所なく、長は專ら組合の施設に將た自家の營經に、孰れも精力主義の典型と仰がれ、次は常に各地に活動して販路の擴張に努め、二者相俟つて父祖の業を擧ぐるに至誠一貫、乃父に讓らざる經營の手腕を有し、斯界に於ける少壯人物として大に嘱望せられつゝある。



# 老農　横田小左衛門君

（加西郡横田村）

凡そ世を利し國を益するの人は、必ずしも顯營利達の巨商にあらず、亦王侯貴人の名流而已ではない、古來窮巷の處士邊隅の野人にして、利用厚生の偉功を奏し、治國安民の要道を立てたるもの甚だ多く、然らば卽ち人を論ずるに當つては單に物質的の財產、或は位置勳爵の高きを以て議すべきにあらず、横田小左衛門氏の如きは、地方篤農の巨人にして曩には居村助役として村政に竭くし、又は農會副會長として、農事の改良農政の發達に貢獻する處多く、曾て居村農事の振はざるを慨し、百方苦慮を旋らしたる後ち、農の本は肥料の良否に存するを感じ、種々の工夫と實驗を凝らし孜々として其の改良を圖るに努め、而して實驗に依て得たる氏が工夫の結晶とも稱すべき堆肥製造は、他の廣告のみを誇大にして實質の之れに伴はざる人造肥料の如きものではなく、終には郡内における模範堆肥場として公認さるゝに至り、現に綠肥にありては、栽培反別一町餘反歩に上り、その成績は年々佳良を示して、有力なる肥料を收穫しつゝある、氏は又共同苗代の必須なる所以を感知し、同志を糾合して之れが組合を設置し大いに農村の疲弊を濟ふべく奔勞し、其後四十年共同苗代設置に關する縣令を發布せらるゝに至りしが如きは、夙に範を一般に垂れたる氏の力に負ふ處多く、肥料改良に苗代組合に氏の精力は益々發揮せられ、從來屢々行はれたる品評會等において選賞の榮に與かりたるもの、實に一再にして止まらず其他害蟲驅除に米質の改善に、林野の開墾に新農具の購入等苟くも農事改良に資すべきものは、成さく率先して之れを採り、幾多農民に模範を示したるより、其說示を聽き奬勵を受けたる者は、孰れも氏の篤農家たる態度、精神に感奮して、一村の農業成績は、頗る觀るべきもの多く、されば日本農會より選賞に與かり、多年の功績によつて勳八等を授けられたるが如きも、決して偶然ではない。

氏齡既に六十又四、而かも鍬鍒として今に至るも晴耕雨閑一日として耕畝の人たらざる莫く、資性溫順玉の如く、同地方の長老として一般の敬仰を受け、殊に同地出身の松尾男爵の如きは氏を信賴する處頗る厚く、以て其人と爲りを窺ふことが出來る。

嗣子某父業を助けて重代の忠僕に隷し、孜々として倦まざるもの全く氏が訓陶の結果であらう。

# 加西銀行支配人　安積重次郎君

（加西郡加茂村）

人は強ち地位名望財產の大小等によりて品隲する譯けには行かぬ、總て其職業に忠實にして天職を全ふしたるものあれば、之卽ち他の模範とするに足るべし、然らば安積重次郎氏の如きは複雜なる行政事務に從事すること三十年、其功勞の大なると共に、又大に吹稱するに足る人である。

氏は加西郡賀茂村の内西劒坂村に生れ、家は田安領に屬して里正を勤め、以て郡民の輿望に副ふた、氏の考祖は才學ともに衆に秀で、地方育英事業に盡瘁せる學究的の人物たりき氏また父祖の衣鉢を稟け、幼にして聰慧、加ふるに剛直の資は權門富貴に阿らず、頗る自我心に富んでゐる、後ち加西郡書記に任ぜられ、學務と兵事を管掌し、眞摯なる事務家として群僚の景仰を鎔め、二十二年憲政の實施に伴ひ、郡制町村制の布かるゝや、當時未だ憲政思想の幼稚なる多數の郡民に向つて、法治思想を注入し愚昧の謬見を排して、大いに制度の顯揚に努め、一面所管事務たる教育事業の發達を圖り、全町村學校組合事務所を設立し二十又餘年間一日の如く教育當局を提撕して、大いに興學の風を揚げたる如き、氏の行政手腕は實に尋常ならざるものがあつた、而かも氏の行政的手腕は單り所管の事務のみに限らずして、一面殖產興業の振暢に揮はれ、時の郡長を助けて飯盛野開墾を企て、延ひて普通水利組合を組織し、幾んど不毛に等しき四百餘町歩を拓いて稻田たらしめんとし、その一半二百町歩既に成功を告げて、實

收を穫るに至らしめたるが如きは、尋常行政吏の凡想にては到底企て及ぶ處ではない、氏は又我國に於て當時最も幼稚なる兵事々務に執掌し、劃策渾べて其當を得、克く兵制の精神をして遺憾なきに至らしめたるが如き、以て行政吏僚の範とすべきものがある、宜なり氏は在任中正八位に敍し勳八等を

# 釀造家　三宅雄次君

授けらるゝ光榮に浴し、遂に四十一年四月その職を退き、加西銀行支配人に擧げられ、今尚同行に在つて經營劃策機宜に適し、大いに行務を擧げて優良なる成績を示しつゝある、官處三十有餘年、而して退くに當りて節度あり、地方俗吏中に在つて卓に見る忠實の人と謂ふも、敢ねて誇大の言ではない。



氏は加西郡の素封家として識られ、酒造を業として、家道大いに振ふ、三宅氏を識るものにして、同家秘法の吟醸にかかる「旭鶴」の商標を識らざるなく、恰も旭日の冲天に升るが如く、鶴唳一過、天爲めに高きを加へ、氣彌が上に澄む雄大の氣象千萬を包容し、旭日仙鶴と相俟つて、店勢日に昂り、聲名地方に喧傳して、「旭鶴」印を識らざるものは酒客としての資格なきものゝごまで、謳はるゝに至つたのである、當主彦太郎氏蚤く世を去り、氏はその後見として斯業經營することゝに歳あり、一日半晌も倦怠なく、十年一日のごとく心血を傾注したる勞苦の一面には、事業の發展と聲名の嘖々と贏ち得て、今は郡中有力の一人として推され、その勢力の虚ならざるを示すに至り、地方幾多の酒商、また爭ふて氏の製品を迎へ、酒仙の徒、また欣んで旭鶴の鮮醸に、酒腸を肥やしつゝある、氏が家門の繁榮はその酒の銘ごとくもに、永く久しく光輝を放つであらう。

# 郡參事會員　兒島卯藏君

（神崎郡神崎村）

神崎郡の先輩として重きを爲せる兒島卯藏氏は幼にして既に乃父の遺業たる、鐵器業を紹繼し、是より氏の才氣は所謂八面珍瑯、之くとして可ならざる莫きものあり、二十九年に迨んでは、鐵道枕木の製出に從事し、亟いで其の殘片を利して、堅牢なる果椀の漆器を案出し、汎く之れを內地及び滿韓地方に販出し、大いに聲價を博するに至つた、奇智頓才の人に非ずんば、到底模し能はざる妙案である、氏の枕木は最初山陽鐵道に、一手供給の信用を獨占し、ついで國有後の鐵道院、卽ち西部管理局に買上の榮を負ふに至り、而して今日に至るも氏の納材權は依然として、その手中に存せられつゝある、製品の精練にして、鐵道用材としての適品たるとゝもに品質また堅牢、氏の信用を一身に博取する所以、蓋し爰に存するものである。

氏は一商估として、諸多請負業者の模範たるのみならず、公人としては、村會議員、郡會議員、縣會議員に擧られ、及び縣參事會員として、縣政の樞機に參する等、氏の政的手腕は、商業の機宜に適したる如く、着々成功を謳はるゝに至り三十七年氏の公人的技倆は、社會の迎ふる所となつて、進歩派より推されて、代議士候補に立つを除後なくせしめたが而かも讓虚自己を抑損して、漫りに功利を趁はざる氏の美德はごゝに遺憾なく發揮せられて、損は我、得は人なりとの古代理想の下に、中原の鹿は前代議士內藤君に、慰斗附のまゝ讓渡して、功名利達は糞土のごとく顧みすてふ、潔白の心事を推選の輿衆に披瀝した、借金を負ふても名譽の月桂冠を獲んとする、現代幾萬の似非政客なるものは、氏の高風を仰いで果して忸怩たるもの無しであらうか。

現代の政治界は太甚しく腐蝕しつゝある、廓清の機は實に今日に存するものと謂はねばならぬ、此時に方り氏の如き皓潔の士を起して、最高議政府に起たしむ、地方民の輿論たるや明けし、諺に好かるゝ者冷淡、好かれざる者執拗、野俗の一諺、移して以て氏の心事を語るに足らざるものとするも、また以て無限の深趣味を見逃すことは出來ぬ、氏現に神崎商業銀行重役、郡參事會員の要職に在り、性磊落にして眞摯、以て地方紳士の典型とするに足る。

# 醫師　和辻瑞太郎君

醫は仁術なりと稱するも、今の世仁術のみにては經濟に背き、經濟を識らざるは之又營業の本旨でない、さりとて徐り功利維れ尚ぶは、他の百般營業に對比して、仁術的醫術としての價値は無い、然るに現代の醫師は一種高等智間的の人物多く、されば昔は醫の如きも僧の如く、一に出世間的人物のごとく仰がれ、社會の崇敬を受けたものである、然るに世の進むに伴ふて、唯物功利、唯だ生存競爭てふ惡風潮に趁はれて、絶えて德操の磨勵を顧みるの遑なきに至つて、醫界の如きも、竟に俗世間の仲間入りを爲し、昔時の面影を存せざるは時代風潮の然らしむる處とは云へ、誠に慨歎の至りである、然るに偶々和辻氏の如きは一特色を有し、多少現代の風潮と大に趣きを異にせるは現今に於ける刀圭界の異彩と謂はねばならぬ、氏が一般患家に對する態度は、實に親切懇到を極むるものありて、一たび氏の手に握られたる患者は、その治と不治を問はず、毫も不平不滿の色なく、活くる者は喜び、死する者また恨みざる風ありて、唯だ氏の神手に信じて一代の運命を賭するのである、人は信任を厚ふするほど責任の重きを感せざるはなく、矧んや醫術のごとき人の生命を支配するものに至ては、尚更らにその重きを感ずべき筈のものである、さなきだに世間多くの功利維れ趁ふの輩は、患者を一商品視してこの間貴賤貧富の別を置き、その待遇施術に手心を用うるもの多きに反し、氏が名利には淡恬、人生の秘鑰を握れる眞諦を、最も有意味に解得するは、蓋し當今の醫界稀に見る人物であらう

氏は神崎郡仁豐野村に住し、茅屋草舍、極めて邊幅を飾らざる坦懷の高士にして、また風流の嗜みもあり、詩歌を能くし偶々朗誦に値すべき傑作を示すことがある、令弟春次君、醫學博士にして現に京都醫科大學敎授たり、氏の家世々漢醫を業としたるも、氏は見る所あり、時運に伴ふて洋醫に志し、明治十一年既に大阪醫學校を卒へて、現在の地に門戸を張り而かも職責に忠なる氏は日進月歩の學術の研究に日も又足らぬと云ふ有樣である、されば今日の聲望ある決して偶然ではない。

# 溝口銀行頭取　大野宗平君　大野甚之助君

（神崎郡溝口村）

播州に於ける神崎郡は比較的資產家が多い、大野一族の如きは卽ち其一人である、兄宗平氏は當然宗家を繼ぎ、甚之助氏は別れて一家を爲し、而かも本家分家と云ふも軒を駢べて一家同樣、遒に同聖の兄弟、何れも溫順恭謹、而して質朴にして親切な人である又財產も殆ど同額雙方神崎郡に於ける大地主で屈指の資產家である、嘗て貸金を營業として居つたが、個人營業では取引が面倒な處から、曩に資本金參拾萬圓を以て株式組織の溝口銀行となし、兄弟交代の頭取で現今は甚之助氏の名義であるが、併し事細大となく協定して之が經營を主宰して居る、名は株式の法人であるが其實兩氏の無限責任であるから、銀行の信用は太だ重く、從つて株券の高いことは播州に於ける二三のものである、而して別に預金政策でもなく、唯だ株金を利用して貸金の利足を秩序的に汲收すると言ふに止まり、未だ一箇所のコルレスポンデンスもない多少保守的の譏りはあるが至つて堅實な經營振りである、兩氏共に名聞を高め人中で威張ることは大嫌ひで、地方の公職抔は斷じて應じない、又別に無理冷酷な手段を以て資產の增殖を圖らんともせず、華奢に流れず、吝なるにもあらで、唯だ何事も自然の成行に從ひ、握り潰丸で氣樂に暮して居ると云ふ風である、故に若し兩氏にして祖先の遺產が徒せば大に自己の運命を開拓するか否かは疑問であるが、併し祖先の遺產を湯水の如くに費つて、徒らに虛名に憧れて居るやうな人物よりは、守成の人として寧ろ兩氏の如きは適當な人と云はねばならぬ。

大野甚之助君

## 田原銀行頭取　山口傳重郎君

（神崎郡山田村）

現今の資産家と稱するものを見るに、滔々として華奢に流れ、他食暖衣、別墅蓄妾、自用車金時計を以て能事とせるものゝ如く、勿論自己の財産を費し、自己の慾望を滿たすに於ては、毫も他人の容喙を許さず、我儘勝手次第なりと雖、上の好む處下之に倣ひ、殊に近時社會主義等の皷吹せらるゝもの、又此が一因たらずとせず、されば地位ある資産あるの人は何事によらず、世人の儀表たるべきものなるが故に、總ての點に於て大に意を用ひざるべからず、而かも之を省みるもの甚だ鮮し、此の時に當り山口傳重郎氏の如きは、稀に見る質朴なる資産家として大に吹稱するに足らん歟。

氏は神崎郡に於ける資産家として僅々三指を屈するに過ぎず、而かも草屋茅舍に棲ひ、勤儉力行を以て旨とし、終日耕耘を乘つて自ら培ひ、又他を顧みざるもの、如く、曾て北條銀行の取締役に擧げられ、田原銀行の頭取として其經營を主宰するや、手扶を以て頰被りをなし、自造りの結び草履を穿つて重役會に臨むを常とす、人呼んで頰被り重役、結び草履の頭取樣となす、又以て珍とするに足るべく、近時資なく產なく、唯だ月給によつて衣食しつゝある、都會の銀行重役が日夕交際と稱して傾斜の巷に出入し、行員を騙つて華奢の風潮に導き、遂には私消拐帶者を續出せしめつゝある輩に向つて頂門の一針たらずとせず、而かも氏は自家の小作人を愛する一家庭の如く、又公共慈善に貲を投じて、唯一の快樂となすと云ふに至つては、實に其人と爲りの惇朴にして氣品の高尙なる、澆季風をなす當今の世に稀に見るの善人ならん歟。

## 神崎商業銀行頭取　小寺留三郎君

（神崎郡淵加村）

近時浮華衒燿なる世の中では僅か貳拾萬や參拾萬の財產を作り上げたものを見れば、忽ち世間からは成功者或は實業家と煽動する、又當人も之に滿足して威張り散らすものが多い反之小寺留三郎氏の如きは其處世振りの質朴にして未だ世間に餘り廣くは存在を認められて居ないやうであるが、而も其成功の顯著にして且つ堅實なる資產を擁して居る處は播州に於て錚々たるものであらう。

氏は家代々農を以て業として居つたが、幼にして英敏頗る商業に趣味を有し、農閑常に些細なる行商を營みつゝある折柄、恰も從來我國に使用されて居つた獵銃は彼の種ヶ島と稱する火繩筒であつた、然るに明治初年に管打銃が發明せられそこで氏は之を一見するや從來のものに比して如何にも便利な處に着眼して、それより更らに之が販賣方を特約し各地に賣試みた處が、農閑獸獵を事として居る、播但地方の農民は先を爭ふて之を購ふと云ふ風で、從つて其利益したことは夥多しく時に原價の三倍にも達したさうである、忽くして僅か數年の中に於て而も坦々たる行路を以て莫大なる資本を作り更らに之を以て地所を買入れ、或は山林を買入れて造林を行ふ等何れも豫想以上の好結果を得て、自ら時世の進運と共に今や十倍二十倍の價格に達し、遂に今日の富を作り、播州に在ては比較的資產家の簇在して居る神崎郡に於て其實力は優に一頭地を抽いて居ると云ふことである。

其後神崎商業銀行を創立して引續き之が頭取に擧げられ、同郡に於ける四銀行中最も堅實なる經營を以て社會の信用を博して居る所以のものは全く氏の力に負ふ處が多い、性は溫順素朴にして心易い人である。

## 神崎商業銀行取締役　田隅英太君

（神崎郡）

同家は維新以前姬路藩の用人として、神崎郡に於ける三木鎌谷氏等と共に在十人の一人にして苗字帶刀を許され、同地方の素封家として推稱せられたりき、されば同地方の信望は氏の一身にあつまり少壯にして戶長を命ぜられ、町村制の實施と共に村長に擧げられ、未だ自治體施設の草創の時代に當つて能く之が任務を完ふし、執掌すること多年治績の大に見るべきものあり、其後縣會議員に選ばれ縣制に參劃し、或は地方有力者と謀つて神崎商業銀行を創立し引續き重役として之が經營に與りつゝあるが如き、同地方に於ける有數の名望家として且つ資產家として重きを爲せり、賦性溫厚にして素朴、虛名を思はず利害の爲めに齷齪たらず、村夫子として欽すべきものあり。

嗣子某嬰に姬路中學を卒へ、次で中央大學に學び、而かも溫良にして衒はず、神崎郡に於ける少壯人物として大に嘱望するに足るべし。

## 兵神館社長　伊賀正太郎君

（神崎郡香呂村）

姫路の人間は概して消極的で活動しない、然らば又仲氣に世を送つて居るかと云へば決してさうでもない、同じ播州でも龍野の人は茶も嗜めば、謠曲も歌ふ、書畫骨董も弄じる、却々高尚なる趣味を有せるに反し、姫路の人は唯だ魚町と博奕と空威張より知らないと云ふ風である、されば增位温泉場の如きは、姫路市唯一の公園として是非共同市に於て經營しなければならぬものであるに拘はらず、往年同地が他に賣却せられたる際に於て、更らに爰に意を致すものはなかつた、然るに偶々伊賀正太郎氏が、同地の頽廢を慨んで自ら之を買收し單獨經營をやつて居られるのは、同地方の爲めに之を悦ぶと共に、氏が崇高なる人格の半面を窺ふことが出來る。

氏は神崎郡香呂村にして家代々農を以て業とし、同地方の舊家であるが、氏は恁る高尚なる趣味を有せると共に、一面實業界の活動家として、曩に伊賀保太郎、藤尾幸一氏等と謀りて神戸に兵神館を設け、現に會社組織となし、自ら社長として經營しつゝあるが如き、又田原銀行、姫路電燈會社の重役に擧げられ、以て同地方の實業に重きを爲して居る、性温厚にして高雅洒々落々として得易からざる人物である。

## 釀造家　尾田眼龍君
## 尾田德治君

同家は考祖以來農を以て業とし、聲望德澤夙に里人に知られ、所謂地方の家柄を以て容されて居る、一面に於ては釀造家としても聲名近郷に洽く、考祖酒造を創めたるより、既に百年の春秋を閲し、氏の家法によつて釀出せらるゝもの、芳烈千秋に輝くの實質ありて、好評嘖々、殊に近代の精釀にかかる「華頂山」印の如きは、品質最も洗練の績ありて、天下の芳醇灘の名酒を凌駕するも、劣るなき高評の下に、產地播州における釀界の覇として稱せらるゝ而已ならず、阪神一圓又は岡山地方において需要最も多く、好酒家の吸仰を博しつゝあるが、不幸にして先代の早世に逢ふや、幼冲家督を繼承したる眼龍氏は、遺產の保殖又は當業經營の大任を託するにおいて、尚ほ有力なる補佐者を要するものがある、是に於て近親會議の成案として、眼龍氏の令姉に德治氏を迎へて入れ、以て家計及び營業一切の全權を委ねたのである、德治氏加西郡の人、夙に手腕家を以て聞ゆ、氏は尾田家の家聲をヨリ以上に發揚すべく、所謂新智識の分配を營業中心として大いに店務を更革し更らに製釀上に幾多の新工夫を交へ、以て古來傳來の繼紹的因襲を一洗し、旦那風の因陋偏見を排して、顧客本位は現代の商店經綸法なりとし、氏が理想、及び落ふる所の新知見を應用して、大いに面目を一新するに至つた、故に紺暖簾が硝子戸に換るのとき、尾田家の營業主義は一轉向を來たすとゝもに、一面非常の發展向上を見て、尾田家の基礎は大盤石の上に築かるゝに至りき。

品質の精練、供給の便利、價格の低廉は、德治氏の入つて尾田家の礎柱と爲りし時に於いて、速くも衆目を惹くことゝなり、最とゝ好評を博しつゝありたる華頂山は、殆んど冲天の勢ひを以て、聲名を阪神乃至中國方面に馳せ、倍々向上の域に進み來つたのである、兵略は密なるを以て貴しとす、商買の上に駈引の必要なるごとく、また誠意は一の資本たるを失はぬ、聰慧にして機を察するに敏なる德治氏が、何條遣間の消息に迂なるべき、倏ちにして隆々の勢ひを示すに至りたるは、固よりその所と謂はねばならぬ、氏資性俊敏加ふるに恬淡の美質は、人を信賴せしむる無限の索引力を有し、その器材優に尾田家の礎柱となり、また眼龍氏補弼の忠友として劃策應施到らざるなく、尾田家の先祉に事ふる慈母に對するが如き至情の流露は、嚮て同家々庭の上に、圓滿にして毎に春風和想の愛を滿へしめ、義弟の病褥に在るや、百事を抛擲して、其の枕頭に侍し、骨肉も及ばざる看護の任を完ふせしこと一事實のごとき、以て氏の人格を窺ふに餘りありと謂つべしである、されば得難き有力なる好弼を迎へたる尾田家は、家運彌が上に長久の幸福を齎らし得るであらう。

## 長谷川五市君

（神崎郡田原村）

乃父善次郎氏は少壯時代より、勤儉力行を主義として、精力絕倫の人と稱せられ、中年大いに資產を作り、莞に酒造業に志し、着々成功を告げた、立志傳的經歷に富んだ人である氏亦乃父の衣鉢を稟けて、近代的の學門を修めたるに似ず、

極めて素朴にして家業に勵精し、現代青年の模範と云ふも恥しからぬ人物である、夙に父業を紹ぎ精醸の業に從事して曾て一日も懈らず、孜々として店勢を張り實質を揚ぐるに努め卽ち品質の精醇、價格の低廉なる二大要訣が、氏の製品理想の標型として事實に現はれ、他同業者との對抗上、粗製濫造の現金根性を全く打壞し去りて、切に信用を博するに勉めたる結果は、聲名隆々として、一鄕一家國の範圍に局限されず竟に天下の逸品として噴稱せらるゝに至つた、されば神崎郡內において醸界に名を爲せるものにして鵜野金平尾田眼龍氏あり、其家格閥閱において或は讓る所有るべしと雖も、讓品



の精、販路の大に至つては、之れを怨するとも讓る所はない從つて其資產信用の程度は、同地の素封家三木飾治氏と共に鄕中の傑と稱せらる、氏が家門の榮や亦以て誇りとするに足るべく、氏は姬路中學を出でゝ同志社に入つて深遠なる學術を修め、後ち飜然實業界に入り專ら家業に執掌して、乾々として晝夜倦む所なく、只管店勢と信用の向上に腐心し、以て他を顧るの遑なく、庸骨青年の常套とする虛榮心に囚はるゝが如きは、氏に於て見ることが出來ぬ、蓋し多くの前途を有する氏は又多望なる哉。

# 小國積次君

（神崎郡福崎村）

產科、婦人科醫としての氏の技倆は、夙に醫界の雄として推され、閭民の景仰を一身に鍾めて居る、氏は三十四年に岡山醫學校を出で、直ちに實地の術科を研鑽すべく同志社病院に入つて、佐伯ドクトルに就て熱心に實科を討究し、後ち縣立病院に在つて得意の產科、婦人科を專修し、學理及び實地の造詣淺からず、斯界幾多先輩の賞揚する所となり、三十七年に至り鄕里神崎郡に門戶を張つた。

氏が技倆と手腕を以てして、繁華の中心地とせらるゝ神戶又は大阪に開業せざるを異しみ、或友人は氏にその所思を叩いたことがある、是に於て氏の述懷談なるものが、實に奥床しくもあり、また一片の哀史である、氏の家は世々神崎郡の山奥に住して、甚しく都市と懸絶したる僻陬の地である、慈母何某刀自氏を產むに方り、非常の難產なりしが因となつて終に黃泉の客と化せられ、當時人文未開の時代とて、今日の所謂產科の名醫なく、之れを治するの醫亦た僅かに一時の苦悶を緩和する姑息劑を投じて、患者の病狀を窺ひたるまでゝある、重患のものが復たび快癒の幸福を得るは、百中一に過ぎずと云ふことであつた、慈愛の權化ともいふべき氏の生母が、終に重患の裡に悶死されたるもの、また實に醫術の不完全なりしに維れ因る、氏長じて斯の事實を嚴父の夜話に聽き生れて慈母の溫容にも接する能はざる不幸の氏は、惆悵の情禁ずる能はず、半夜人定まり草木眠るのとき、氏の感慨や果して如何であつたらう、その心事を忖度すればそゞろ同情の涙を禁じ得ぬのである、是に於て、氏は醫に志すとゝもに、殊に幾千婦人の疾苦を救ふべく、產科、婦人科專門を選んだとの事である、而して氏は繁華の熱鬧地には、醫界の先達後進亦た尠からざるを以て、都市と懸絶せし僻陬の山地に居し以て醫恩に俗せざる幾多不幸の子女を濟ふべく、斯くは山間僻地の鄕里に開業し、以て母恩の幾分に酬ひんとしたのである、氏の家自から餘財あり、門前雀羅敢ねて僻する所に非ず唯だ一婦の產に惱み病に泣く者をして、九死に一生を得せしめて以て醫恩の大を知らしめん素志なることは、常に氏の僚友及び出入の士女に語る所であつて、同時に氏が醫業に志したる稀有の理想と稱せざるを得ぬ、而るに精神家として技倆家として推さるゝ氏の手療を受くる者が、觀察百中、概ね快癒して幸福の生涯を送る者多きより、人は氏の慈母の亡靈が幽界より氏の術の神に加功し、斯くは成とく好果を收むるものならむとの臆說をさへ流布するに至る、また以て氏が如何に斯界に重んせらるゝとゝもに、幾千不幸の病婦をして救世主のごとく渴仰せらるゝ所以が、解得せらるゝであらう。



（神崎郡砥堀村）

神崎郡の有志者として近時の花方役者として持囃されつゝあるものは藤田利恒君である、氏の母堂頗る賢婦人而かも男性的女丈夫と稱せられ、家米穀の賣買を業とし、傍ら輸贏場裡に出入して今日の產を爲せりと云ふ、氏は其家政を承け、當然實業界に入るべき身にてありながら、曾て姬路中學を出で、後ち一年志願兵として軍隊に入り、日露戰役に出征して陸軍中尉となり、同地方に於ては相當なる羽振りの利く處より、勢ひ虛名の野心に煽られ、遂に縣會議員となり、縣會議

場に出席するや、田紳の集合場として、氏の如きは新進の人物として大に嘱望せられ、本年の改選に際しては、神崎郡公認候補者として模範選舉を以て當選するに至つた、以て氏の手腕信望が同地方にあつては群を抽くものあるを知るべく、されば益々人物の向下して止まざる縣會議員中にあつては、氏の如きは愴に有數の人物たると共に、若し父祖の遺産を蕩盡するの勇氣あるに於ては、餘り遠からざる未來にあつて、内藤氏の後を襲ふことが出來るであらう。

## 宍粟郡會議長　福田廣吉君

（宍粟郡城下村）

善人由來手腕を缺ぎ、總に其品性の温良なるが故に、人の認むる所となるもの多し、而かも我が福田君や然らず、其蘊蓄、識見の、郡の社交界に、嶄然として頭角を抽きたりしは云ふも更らなり、多年地方公人として、公共の事業に鞅掌し實業場裡の手腕に至りても、また大に重んずべきものあり、而して其性情の渾然として璧の如きは、茲に得易からざるの人物たり。

氏は幼にして學を好み、村侶の秀才として大に嘱望せられ少壯にして戸長となり、町村制の發布せらるゝや村長となり或は郡會議員、郡參事會員として、地方公共に奔瘁したること間斷なく前後三十年、其功勞の沒すべからざると共に、永く郡の先輩として比較的資產の乏しかりしにも拘はらず、南方の重鎭として對抗し來りしが、而かも善人多くは氣宇狹小彼の理想は縣會議員たるにありき、されば往年田舍有志が人生の月桂冠として縣會議員を憧憬すること甚しく、彼も又其數に漏れず、改選期毎に開はざる莫く、遂に志を達して其椅子に凭るや、案外にも無意義なるを解したるものか、其後豚然として思を爰に絕ち、今や出石村に隱棲して薪炭商を營むと聞く、余輩は彼が志を轉ずる十年遲かりしを惜しむと共に時代の潮流は矢よりも駛く、千里草茫々たる處、空しく道途に老ひ、死生、今多く世の關する處にあらず、業に生きながらにして、過去の人となれる彼は、揖保川の流れと共に人の行末をかこちて悶々の情に堪へず、大阪より若ものを繼し來りて、枕頭に侍せしめ、總に慰安の料に供しつゝあるもの、如く、余輩又彼が當年を思へば轉た同情の念に堪へざる也。



古語にも一將功成り萬骨枯ると云ひ、例へば日露戰役に於ける東鄉乃木兩大將の勳功赫灼たる所以のものは、要するに幾億の國帑を費し、二十萬の生靈を拋ちたる結果である、之を行政の方面に見るも、總て何事も功勞は長官而已に歸するやうであるが、併し行政事務の多くは判任官の手によつてなるものである、されば長官の功勞を吹稱すると同時に斯る事務家の功勞は永く沒する譯けには行かぬ。

三幡繁藏氏は宍粟郡役所の設置と共に年總に十五歳にして同廳の給仕となり、夫より傭となり書記となり、安原照之氏を始めとし、大野、笠井、武間、神原竝に現任那波氏と共に六代の郡長に歷任し、後には首席郡書記として之を補佐し、亳も一身一家を顧みず、身を挺して郡政に鞅掌したること前後三十年、其間安原時代にあつては十三線路五十餘里の道路新設、笠井時代の教育事業、武間神原時代に於る勸業の奬勵等、一として氏の手を煩はさゝる莫く、就中氏の功勞の最も顯著なるものは、蠶業の奬勵公有林の整理等にして、同地は曾て交通の不便より自然伐採すること能はざりし山林が、道路の開通と需用の激增に伴ひ、一時に濫伐を恣にし、爲めに赭禿不毛に歸しつゝありし五萬町歩の共有林は、今や劃然整理せられて生產的の土地と化し、以て窮態を一變せる、又恒儀貳參萬圓の產額に過ぎざりし養蠶業が一躍參拾萬圓に達したるが如きは、固より當業者が智識の發達によると雖、氏が多年郡當局として唱導鼓號したる功績は永く之を沒することが出來ぬ、其他自治團體の改善發達、或は農業上の施設、日清日露の兩戰役に際しては尙武氣象を皷吹せる等、氏が殆ど一生涯を擧げて宍粟郡の爲めに貢獻したる功勞は爰に之を言ひ盡すことは出來ぬ。

要するに我國の官吏は比較的職務に忠實を以て稱せらる、從つて郡長の如きも各其任地の爲めには何れも勞を吝しむにはあらじ、されど悲哉役人根性を免れず、榮達を圖らんとする人情は往々上官に諛ひ任地を思ふの疎なるは勢ひ止むを得ざる次第である、之れ即ち西洋文明國が自治制度を以て國家の根底となす所以にして、地方の事は地方人士の經營に勝れるものはなく、然らば氏の如き地方人物として毫も役人根性を有せず、加ふるに氏は官吏として榮達昇進を圖らんともせず、又多年の間薄給に甘んじ、以て倦怠の色なく、地方の狀勢を知悉して施設劃策を忘らざりしが如きは、眞に理想的の經營者とも謂つべく、地方人士は大に氏の勞を多としなければならぬ、宜なり氏が病を以て本年職を辭するや宍粟郡會は氏が多年の功勞を顧して金盃を贈與したと云ふことである、近時實業界の方面を見るに、少しく長年月の間同一會社に在勤せる重役支配人が其職を退かんとするや、何れも數萬の慰

勞金を贈つて老後の資となすを常として居るにも拘はらず、氏が宍粟郡五萬の人類に寄與したる畢生の功勞に酬ゆるに、僅に金盃一箇は稍其薄きに失するの感あり、然れども氏は毫も名利の士にあらざると共に、近時同地方に流行する或一村長が退職に際して、服心の者に要請して受けたるが如き金盃と異なる處あるを思へば、氏も又大に諒とすべきである。

## 前模範村長　吉田清治君

（宍粟郡安師村）

人は強ち事業の大なるもの、又は聲の高きものゝみを以て模範とする譯けには行かぬ、たとへば小さき村の村長なりとも、誠に一村の政務を善くし、自治制の長所を發揮せんか、其村は卽ち世間の善き模範となり、滔々たる洪水大潮の如き頽風汚俗を、山中の一村に依りて堤防し、其感化によつて日本帝國の元氣を維持することが出來る、果して然らんには其人の功必ずしも、廟堂の國民大臣にも讓る處はない、されば余輩は一人の小さき職務に忠實なる結果は、其效果の及ぶ處意外に廣く、意外に大なるものあるを說かんが爲めに、此處に一小村長たりし吉田清次氏を吹稱せんとするものである。

氏は明治三年を以て生れ、同二十八年頃役場書記となり、同三十年頃收入役に擧げられ、如何にも其職務に忠實なるのあるより、頓に村民の輿望に副ひ、三十四年六月には村長に推選せらるゝに至つた、そこで氏は何ふしても國家の根底は自治團體の改善進歩に俟たざるべからざることを看取し、さて此れが改善を圖らんには、單に漠然たる提案を以て唱導するも、人の耳を傾くるには足らぬ、宜しく歸納的具體的に一般の事實を表示するの必要なるを思ひ、それより村內各種の統計を作らんことを計劃し、而かも机上の數理が往々實際に齟齬するものあるを以て、村民の總會を求めて、席上事實の眞相を確め、一々之が統計表を作り、此によつて村是を確立し、以て村民の自覺を促がし、其後主要農業は勿論、殖林の經營、蠶業の改善、蓄產の飼養、其他副產物の增殖等に就いては周到なる注意を以て、範を遠近にとり、皷號奬勵至らざる莫く、一面青年會、戶主會、婦人會、等を組織せしめ、風紀の改良と勤儉貯蓄を唱導し、村內の事有形無形に拘はらず、改善發達に努力したるの結果は、從來同村の生產が消費額に對して年々參萬六千圓の不足を來したるにも拘はらず僅數年の間に於て優に生產過剩となり、三十七年より三十箇年の後に於ては、基本財產の利益によつて村稅を償ひ、無稅村たらしむるに至ると云ふ、實に全國稀に見るの治績を見るに至つた、而かも氏は其間に於て無報酬を以て、努力したりと云ふに至ては、如何に自治愛の爲めに忠實なりしかを察するに足るべく、宜なり內務大臣よりは全國の模範村長として推奬せられ、普通敎育の功勞、竝に役場吏員として忠實なる廉を以て、賞狀金品を授與せられ、或は大阪每日新聞は木杯を贈り、郡內の村長は北瓶を贈つて其勞を頌する等、賞讃せらるゝに至つた、此れ獨り氏が名譽たる而已ならず、兵庫縣下の榮譽として、富栖村の幸福は勿論、範を遠近に垂れて、以て全國の自治體發達に貢獻せる功勞頗る多きと共に、氏の如きは忠良なる模範人物として吹稱するに恥ぢぬ、其後村長を辭し、郡農會の爲めに身を挺して盡瘁しつゝあるが、飽く迄國家公共に貢獻せんとする處、氏が人物の一斑は推して知るべきであらう。

## 安師銀行專務取締役　石堂鶴之助君

（宍粟郡安師村）

維新以來徒らに物質的文明に眩惑して精神界を閑却したる我國は、今や其反動として、世道は頽廢し人心萎靡し、更らに道義の何たるやを解せず、甚しきに至りては「世の中が世の中故、ウッカリしては行かぬ、お人よしでは行かぬ、君子の眞似ばかりは出來ぬ」抔と、云ふものが漸次に增加し來つたやうである、惡る傾向は今にして大に戒飭せずんば、遂に國家は精神的滅亡を來たすであらう、而して國家の改善進歩は宜しく國民各自の自覺に俟たなければならぬ、抑も我國の文明が單に政府官人の指揮によつて來たるものにして、國民の自覺にあらざるは、眞の文明ならざる所以にして、政治、法律、勸業、行政、總て官人の指揮に待つの風がある、然れ共政府官人は、國民の意志によつて業務を執行する機關たるに過ぎぬ、國民は主にして官人は從である、故に何事も官人の手を俟たずして、國民自ら行ふの覺悟がなければならぬ、されば何事によらず國民自ら之を行はんか、形式的官人の手數は大に省くことが出來る、而かも官人の指揮を受けて未だ行はざるものあるに至りては、甚だ慨歎の至りである、然るに石堂鶴之助氏の如きは、其身は官人にもあらず、又其術に

當れる公吏にもあらずして、自ら地方有志を以て任じ、總て何事に拘はらず、之を先導して氏の力によつて、同地方の改善を助けて居ることは、偉大なるものあると共に、稀に見る篤行の人と言ふべきであらう、氏は嘗て富栖村の村長となりて、自治の改善に努力し、往年模範村に至りしもの、氏が先鞭の功大に與つて力あると云ふことである、又安師銀行支配人として、地方の者に資金を融通せんとするや、宜しく借用者が使途を審にし、使途の如何によつて、諾否を決しつゝあるが如き、其他地方公共に貲を投じ、又最も名を表はすことを厭ひて、隱れたる德行を施し、世の有り振れたる賞碑賞狀等を目的とせる慈善家と大に異る處がある、要するに之を爰に吹聽するは氏の志にはあらざるべく、余輩又絮說せずと雖燒季風を爲す當今の世には又稀しい人物である。

# 醫師　植木愁哉君

（宍粟郡神戸村）

我國の文明が明治の昭代に至りて急速の進歩を爲したることは爰に呶々するまでもないが、就中顯著なるものは醫學の發達である、今や本邦の醫術は歐米諸國に對して毫も遜色を見ざる而已ならず、中には彼を凌駕するに足るべきものもありと云ふ、然るに斯る恩澤も未だ僻陲の宍粟郡には及ばず、余輩が常に慨歎に堪ねざるものは同郡五萬の人類を託するに足るべき刀圭家のないことである、否な刀圭家は多いが名實兼ね備ふる眞の刀圭家が居らぬ、されば同地方の醫師を見るに、多くは學歷なき內務省の免許醫か、然らざれば古い神戸醫學校の卒業生、又は濟生學舍出の速成的開業醫である、而かも生存競爭の緩漫なる地方にある彼等は、漸く開業するに至れば最早技術の向上を圖らんともせず、又醫學書を繙くこともしない、日進月步の學術に晩れざらんとするも得べけんやであらう、ア、斯る先生方に生命を託する又心細い次第である、然るに偶々植木愁哉君が同地方人類の救濟を以て任んじ、鄕里宍粟郡に開業して、之が使用を完ふしつゝあるは、地方人士の爲めに多とする處である、氏は明治三十六年大阪府立醫學校を卒へ、直に神戸病院に入り、更らに兵神病院長として、實地の研鑽を重ぬること三年、明治三十九年を以て開業した、而かも氏が新進の技術は地方人士の大に歡迎する處となり、患者は常に門前市を爲し、播州の鐵道以北に於て神崎郡の小國君と共に雙璧である、氏が又自己の職責に忠なる、敢て貴賤貧富を別たず、利害に恬淡、道の遠近を問はずして其招聘に應じ、醫の天職と人類救濟に貢獻しつゝあるが如き、同地方の爲めに大に意を强ふするに足るべきである。

# 揖保郡の先覺者　故代谷順藏君

（揖保郡網干驛）

氏は遠く幕政時代に在つて里正に擧げられ、維新廢藩と共に戸長を命せられ、而して町村政實施に伴ふては依然村長の職に在り、前後五十年間一日として村政と遠ざかりたることなく、其の公生涯は實に一村の興廢に繫りたる觀ありたりしは、地方自治政の殊勳者として、氏を識る者の齊しく讃嘆措かざりし所である、舊來より傳承せる農村疲弊の常態には、同村また此理數に洩れざりしも、氏は奮つて諸多の弊害を芟除し、殖產興業の途を講じ督勵措かざりし效果として、同村今日の發達を來たしたるは、實に氏の激勵力行に俟つものあるや、言を須たずして知らるゝ譯である。

氏はまた自由民權を尊重し、曾て自由黨の崛起して政界に雄を稱するや、進んで之れに投じ、以て一郡の嚮背を荷ふ中心的人物となり、明治政黨史の上に認識を印するに至つた、夫の改野耕三氏が今猶ほ政友會の一偏將として、地方の勢力を扶植しつゝあるは氏に負ふ所頗る多く、氏は自由黨變形して政友會となるも、同じく昔日の面目を保維し同黨地方の重鎭として仰がるゝに至つた、揖保郡に於て進步黨の兵庫縣に勢力を樹ゆるが如く、其の跋扈跳梁を容さゞるは、一に氏の潛勢力ありて然るのである、由來政黨運動は不生產的にして功名の爭奪場なり、氏は政黨狂奔のために產を蕩し財を喪ふ

の愚を學ばず、一面地方に於ける有力なる實業家として、非凡の經濟眼を有し、揖保郡の特産物たる素麺製造業を奬勵すると共に、之れを各農家の副業として推奬し、地方産業振興の上に多大の貢獻を爲した、次で澤野氏に諮り製粉組合を設け、販賣機關として素麺株式會社を設立し、素麺組合と相俟て製産品の隆盛を圖り、之れが社長重役として、晝夜日も尚ほ足らざる感がある、氏は村政の嚴父たる一面、實に産業界の慈母と謂はねばならぬ。

而して地方開發策は尚ほ綽々として餘裕を見めして居る。卽ち郡内の銀行業者が純然たる質屋的經營法を採り、確實の擔保品を提供せざれば貸附を爲さゝるを慨し、堀豐彦其他の有力家と計り、資本金參拾萬圓の銀行を起し、之れが支配人として經營最も機宜に適し、行運日に倍々殷盛を來たせるよ

## 神部村長　廣田傳右衛門君

（揖保郡）

氏亦た代谷氏と相並んで、揖保郡に於ける老村長の白眉たり、明治七年戸長を拜し、爾來町村制の實施に會ふも、依然村長の要職に在り、前後三十年間の公生涯において、村治上獻身的貢獻多大にして、氏の統轄に係りたる神部村が、舊來因循せる疲弊の下に、生氣無かりしものが、氏が指據三十年の長日月に於て長足の進歩を來たし、他の町村に比して優良の成績を擧げ得たるは、一に氏の劃策運籌其宜しきを得たるに由るのである。

氏は時世の進運に伴ひ、町村自治の能力を健全ならしむべく、他に先んじて役場、學校等を建築し、次いで村基本財産學校基本財産の基礎を造り、年次增殖して今は何れも數千圓の資力を蓄ふるに至り、經營の妙は他村落の採て以て範とするに足るものがある、而して同村の山林が、多くは花崗岩の風化したるものに係り、全山赭禿して將た不毛の荒地に化せんとするを憂ひ、自から率先して之れに樹木を栽培し、一面村民に說きて殖林の經濟を鼓吹し、公有林といはず私有林といはず、盛んに樹木を栽培して、以て不毛荒蕪を防ぎ、農村百年の長計を策して倦む所がなかつた、また一部公有林を村基本財産に轉換し、之れに殖林して百町歩以上の基本財産を造りたる如き、氏の功績は神野村民の齊しく推戴して以て、人格、德風ともに光輝を放つ所以である。

氏の劃策努勵は是れのみにして足らず、更らに居村水利の便に乏しくして、灌漑の途なき畑地のみなるを慨し、今や洪大なる貯水池を築造して、數十町歩を潤さんとする計畫を立て、着々成功を認められつゝある、この貯水池にして成功せんか、舊來の收穫に倍蓰する增收を得て、全村農民の幸福は斯して待つべきものがある、三十年間終始一貫、村政に竭し村民に忠し、而して地方自治精神の發揚に、滿幅の熱誠を傾倒して、些の倦怠を示さゝる氏の精力は、嘆賞に値するものあると共に、一小農村自治政の恩人たる而已でなく、實に國家的大恩人として推奬するを憚らぬ、氏の如きは地方紳士の模範典型として、現代の現金的精神界に向つて、陸離たる光彩を發揮しつゝある一人物たるを失はず。

## 醫師　田中耕作君

（揖保郡網干町）

曾に兵庫縣と云はず各地到る處に醫師の多きに驚かざるを得ない、而かも何れも陳腐敗殘の先生が甚だ多く、遥く揖保郡に於ても其頭數六十人を超え、中には殆ど失格者もあると云ふことである、されば恁る先生に貴重なる身命を託するの危險なるは云ふ迄もなく、一日も早く新陳代謝せんことを祈るもの、蓋し余輩一人ではあるまい、此時に當り新進の醫學士として田中耕作君の開業は吾人の大に歡迎する處である。

氏は揖保郡網干町に生れ、夙に醫を志して福岡大學に入り

一昨年業を卒へ、斯學の蘊奥を極めて同地に開業した、而かも日尚淺く、未だ揮然輿望を負ふに至つて居らぬが、今後氏が神手を揮つて其業に從はんか、人智の進歩と共に古老先生を壓倒して大に發展の期があるであらう、氏は人と爲り温順寡言にして切りに患家に阿附する底の人物ではないが、洒々落々として人に接し、溢るゝが如き熱心は當今稀に見るの國手であらう。

## 上郡銀行頭取　西脇儀兵衛君

（赤穗郡上郡村）

凡そ人として家運の長久を圖り、子孫の繁榮を思はざるもの稀なり、而かも世人の多くは單に財産を作ることに汲々として、最も肝要なる相續者の養成を閑却しつゝあるもの鮮なからず、事理顚倒思はざるも甚しと謂つべし、されば播州に資産家多しと雖、能く父祖の遺業と遺志を辱しめざるもの果して幾人かある、蓋し西脇儀兵衛氏の如きは好相續人として吹稱するに足らん歟。

同家は上郡村の素封として代々醬油の醸造を營み、氏は幼にして家督を承け、家道の發展に孜々として息りなく、今や頓に物輿して龍野地方の同業者に毫も遜色なき耳ならず、反て凌駕せんとするの觀を呈し、人と爲り温順にして風采態度の悠揚たる道に素封の家庭に馴致せられたるによるべく、地方青年の多くは、父祖の遺産を笠に着て、飽食暖衣、只管虚名に憧がるゝ輩と異り、毫も閊達を求めず、安逸を貪らず、謙抑以て世に處せんとするもの、如し、從つて里人の信望は氏の一身に繫がり、現に上郡銀行の頭取に擧げられ、經營劃策に怠りなく、而かも行運益々發達して赤穗郡に於ける唯一の金融機關として、地方の實業界に貢獻せる功勞あると共に、氏が又經營の才腕を兼備ふることを窺ふに足る、今や赤穗郡は破産閉店の悲境に陷り、富豪奥藤氏の呑噬に委せられつゝあるの時に當り、氏が毅然として上郡の一角に聳ゆるもの又偉なりと云ふべく、然かも年齒少壯前途更に偉大なる發展あるを疑はず。

濱本家は奥藤田淵氏等と共に赤穗郡の名門と稱せられ、其祖は遠く秦川勝に起り、代々大和國木津郷に住し、後ち赤穗郡相生村に移りたるもの、如し、肥料賣買、傍ら海産物を以て業とし、三代以前の彌七郎氏によつて家道頓に勃興せり、先代彌七郎氏は人と爲り温厚篤實にして性頗る同情の念に富み、鄉閭の尊仰最も敦く、好んで隱德を施し、地方の救世主として仰がれ、氏の扶掖によつて成功したる人物も多く、地方稀に見る資産家として信望太だ厚かりしが、惜しむらくは明治四十年四十一歳を一期として白玉樓中の人と化せり、されば今尚里人の追慕して措かざる所也。

當主彌七郎氏は先考の歿後家督を承け、家政は擧げて父執彌次右衛門氏に託し、目下明石農學校在學中に屬す、幸にして父祖の靈を辱しむる勿れ。

## 濱本彌七郎君
## 濱本彌三兵衛君

（赤穗郡相生村）

父執彌次右衛門氏は氏の叔父に當り、先代の歿後同家の顧問として一切の家道を監督して亦他意なきもの、如く、質朴にして毫も名利を思はず、蓋し同家の爲めに貢弼ならん乎。

氏の分家彌三兵衛氏は先考彌七郎氏の義弟にして、少壯彌七郎氏を補佐して家道の發展に努め、後別れて一家をなすや區長となり、戸長、村長となり、最も難治の稱ありし相生村をして、鋭意刷新改良を圖り、同村附屬漁業權の確立、竝に共有林の整理を完ふしたるが如き、村治の功績尠なからず、後縣會議員となり、參事會員に推され、或は相生銀行を創立して引續き之が頭取に擧げられ、同地方の先輩として重きを成しつゝあり。

## 海老名源三君

（赤穗郡相生村）

昔し盛衰興亡の蹟に顧れば、播州は但丹地方に比して、頻繁なる數奇の運命に逢會したるもの多く、隨つて俗に家柄舊閥と稱する數代相襲ぐ眞の閥族なるものに至つては、晨星の寥々たるものあり、中に就き海老名氏の如きは、其門地閥閱より云ふも、殆んど閥族を代表する舊系統を有するものと謂はねばならぬ。

氏の先は遠く康平の亂に源賴義に從ひ、安陪貞任を誅伐したる功臣源親季に起つて居る、而して軍功によつて相模國海老名の莊を賜ひ、居を此地に定め、性を海老名と改めたのである、親季八世の孫家季に至り、長治年間播磨國矢野莊別名那波大島に移居し、城砦を構へて城主となり、後ち文治二年に至りては其孫盛重、現今の地領に下屋敷を構へ、相模大島に因みて相生の村名を付したのである、居城大島の北山麓に鎭倉八幡宮を、同南麓島に辨財天を、同相生村に與龍山觀世音を奉祀し、家季の陣中に拾收したる天神の像を同村北山麓に、後鳥羽院の靈を氏の庭後に祀れる等、當時を考證して舊記は歷々之れを物語つて居る、乃ち同家が此地開發の舊閥たるは疑ふ可からざる事實である。

後ち十二代を經て景知氏に至り、赤松則村の爲めに敗られ大島の居城を捐てゝ相生村の下屋敷に隱れ、降つて十八代季次氏に至り、戎衣を解き劍戟を捨て歸農したのである、恁る名流功臣の末裔として、國主は特にその勞を多とし、代々同莊の領主に封せられ、世を經るも所有田畑の納稅義務を全免し他家の支配を受けざる特權を附與せられた、現主源三氏は是より十一代の後乃父の封を承けて莊主に立つた、氏幼名を鶴吉と稱し後ち源三と改め、門地高くして閥閱を擁するも、特に聲名の隆々たるものなく、謙抑自から持し敢へて功利を衒はぬ性溫順にして恬淡、能く家政を理し以て考祖の盛名を墜さゝるに努むる處ろ、地方得難き人物として數へらるゝのである、現に株式組織を以て漁場市場を設立し、氏自から專務として立ち、拮据之れが經營に盡瘁しつゝありて、與藤、濱本氏等さゝもに里人の崇敬を受けて居る。

## 縣會議員　岩佐一郎君

（赤穗郡假里屋町）

赤穗郡に於て近來頓に頭角を擡げ新進の人物として嘱望せられて居るものは岩佐一郎氏である、氏は明治五年の生れ、曾て赤穗郡書記として歷代の郡長を補佐し、忠實なる事務家として、郡の施設に貢獻する處多く、其後實業界に入つては赤穗鹽業組合長となり、或は日本鹽田同盟會理事として、專賣制度に反對し、非專賣說を唱導して大に奔盡する處あり、又郡會議員、郡會議長に擧げられ、四十一年縣會議員補缺選擧に當選し、本年の改選に際しては更らに候補者として、岡田尙太郎氏と猛烈なる競爭を以て再び當選するに至つた、由來赤穗郡は南北兩派の軋轢甚しく、而かも假里屋地方は人物に乏しきより、常に北部の爲めに壓倒せられつゝあるの感ありしが、氏によつて大に重きを爲すに至つた、而して氏が處世に巧妙なる、同地の富豪與藤氏の信賴厚く、其後援によつて夙に坂越村長となり、電燈會社の專務取締役となり、從つて高壓的手段を以て活動しつゝあるが如き、蓋し己人主義猜疑心に厚き與藤氏の信賴を受け、巧みに其勢力を利用するに至つては、氏が當世風の紳士として手腕の凡ならざるを知るに足るべく、而かも新進の敎育あり、行政的手腕あり、縣會議員中有數の人物ならんか。

## 農　村原助治君

（飾磨郡菅野村）

溫厚にして篤實、只管居村の進步發達に心懸け、敎育の普及、風紀の矯正を以て終始し、好箇の村夫子として信用と德望を負へるものは氏なり、代々農を以て業とし明治十七八年頃高岡川を利用して貯水池を設け、荒蕪地を開墾して水田となし、或は神崎郡に於て共有山林二百町步を買占め年々殖林に怠らず、去る三十七年日露戰爭中村長として村政に盡瘁せる功勞多く、四十二年郡參事會員となり、三十二年當南親交會を組織して春秋二回に開會して敎育、宗敎道德上の講話を開き、靑年婦女の風紀矯正に努め、或は一戶四畝步（十二町步）の割合を以て、學校基本財產として共有地に造林を企て自ら會長として保護經營に怠りなく其他貧民兒童の補助就學の規定を設くる等、地方公共の爲めに努力至らざる莫し、吾人は飾磨郡が斯る村夫子を有するを嘉ぶ。

# 釀造家　瀨戸猛雄君

播州の酒造界に於て最も成功の顯著なるものは瀨戸猛雄氏である、同家は代々農を以て業とし、父幸三郎氏は頗る理財の途に通じ、襲祖の遺業たる酒造業の改良發達に專心努力したるの結果は、販路頓に拓けて阪神間に歡迎せられ、遂に今日の大を成すに至つた、氏は斯る家道の發展を劃すると共に夙に地方の名譽職に擧げられ、村長としては地方自治の發達を圖り、或は郡會議員、郡參事會員として重きを爲せり。

當主猛雄君は姬路中學を卒へ、後一年志願兵として日露戰役に出征し、拔群の勳功を奏して、現に陸軍中尉である、凱旋後父業を補佐し、今や一切を統轄しつゝあるが、當今青年の弊風たる、衒驕の態度は毫もなく、專ら家道の發展に怠らざると共に、公共慈善の志敦く、自ら資を投じて村内の里道を開鑿し、或は環寡獨を恤はし、其他人の哀を乞ふものあれば、理非を別たず、救濟するを以て、自ら快樂となしつゝあるが如く、村侶の仰慕厚く、而も年齒少壯未だ經歷の見るべきなしと雖、洋々たる前途は、同地方の後繼的人物として、川口木市郎氏と共に、大に嘱望するに足るであらう。

（飾磨郡御立村）

# 但馬之人物

## 故池田草庵氏略歷

氏名は緝、字子敬、草庵と號す、文化十年七月二十三日を以て養父郡宿南村に生る、父を彌左衛と稱し、其第三子たり年十歳前後にして父母を喪ひ哀毀人に過ぐ、幼にして聰慧擧止自ら異る處あり、其父母死する頃家道稍傾き其四子に分配するに足るべき遺産なし、されば親族協議の結果、氏を出家入道せしめんとて廣谷村の内十二所村滿福寺の住職不虛上人に託することゝはなりぬ、上人其才を愛して提撕至らざる莫く、氏も又勤行精進懈らざりければ、遂には一山の高足たるに至れり、當時高松の儒者相馬九方と云へる人廣谷村の大橋宗右衛門方に於て地方の子弟を敎へありしかば、上人の命によりて就いて經子の學を修めつゝありしが、一日相馬氏は此處を取拂ひて京都に上りぬ、氏は中途廢學の殘り惜しき限りなく、私かに師の後を追ふて京都に抵り、佛門を脫し聖人の道を極めんとて、四條室町の相馬氏塾に入りて敎を受くることゝはなれり、此卽ち天保二年氏が十九歳の交なりき。

學彌進み識愈高く、天保六年其門を辭して梅の宮祠官の家に寓し、子弟に句讀を授けて傍ら古人を友とし、後又松の尼山祠官山田氏の草菴に遷り書を閉して怠らず、卽ち草庵の雅號はこゝに起りしと云ふ。

其後屢々鄉里に歸りて不虛上人に罪を謝し、又塾岡藩主京極高行公に見ゆ、天保十一年京都一條坊に家を借りて私塾を開き、上堂する門人日々數十人に及べりと云ふ。

さて鄉里の人々相謀りけるは「斯る碩儒の我州に生れ出でたるを、遠く他鄉に置くこそ惜しき限りなり、迎へ還へして

子弟の教育を託せば、如何ばかり本州の幸ならん」とて數々歸國を勸めければ、氏も又好意否み難く、天保十四年六月京都の塾を閉ぢて故山に歸れり時に年三十一、而かも身を容れんに家なく、八鹿村西村莊兵衛の一館を僦りて居をトし、尋いで子弟の教授を開始して立誠舍と名づく。

抑も氏は一條塾も立誠舍も永住の見込あるにあらず、父母の墳墓のある處に一書院を爲膳らい、靜修の傍ら育英の事に從はんとの志なりければ、弘化四年六月八日故鄕宿南村に形勝の地を擇びて草屋を經始し、落成を俟つて此處に徙らる、靑谿書院卽ち之なり、來り學ぶもの甚だ多し、其後波瀾なく曲折なく、一意專心己を修めて人を敎へ、以て一生を送りければ、特に記すべきことなし、明治十年病の兆あり、其年十一月東京に赴きて東京病院に入り、翌十一年五月、東京を發して國に歸り、九月二十四日溘焉として卒す、享年六十有六神彩風丰自ら常人に異り、驅幹淸癯、儀狀嚴整、眼光炯々、溫にして厲しく、威あつて猛からず、躬行實踐、純乎たる有道の君子なりき、門下甚だ多く、現貴族院議員北垣國道、仙石政固氏を初め六百七十有二人に及ぶ、蓋し但馬の人材多くは氏の門に出づ。

# 製絲業　日下安左衛門君

（朝來郡粟賀村）

世に富有の家に生れて祖宗の惠澤に浴するものを見るに、放肆に流れ豪奢を事とし、父祖の膏血に成れる家產を蕩盡するか、然らざれば鄙吝陋劣、徒らに其遺田を死守して利用厚生の道を知らず、以て世の嘲笑を招くに過ぎざるものが甚だ多いやうである、殊に但馬の地は古來交通の不便なる處にして商業として見るべきものなく、富の擁護に安全なる農業國たりしが故に、盛衰興亡も亦比較的緩漫にして、數奇の運命に蓬着することなく、從つて門閥を釀成し、今尙舊思想に驅られ、遊惰安逸を貪るを以て榮譽とするの風がある、此時に當り縣下稀に見る名門、日下安左衛門氏が、夙に志を殖產興業に致し、奮鬪活躍、以て國家の生產界に貢獻しつゝあるが如きは、實に同地方の一異彩である。

氏の先は粟賀神社に奉祀せる祭神の末裔として、其姓氏を日下と稱するが如きは、以て之を證すべきである、爾來連綿として今日に到れるが如きは我國に於ける稀有の名門にして世々里人の崇敬を受け、隱然たる土豪である、氏は幼少の頃同族梁瀨村の田次米氏より入つて養嗣子となれるものであるが、若し但馬名門の瀨に傚はゞ、里人を奴隸扱となし、遊惰安逸を以て無意義なる生活に甘ずべき境遇の人なるに拘はらず、維新以來官尊民卑の風甚しく、更らに實業を顧みるものなきを慨し、謂らく今や人情浮薄に流れ、風俗華奢に傾き、徒らに歐米枝葉の文化に沈醉して、能く其根幹を養ふことを爲さず、叨りに皮相の美を競ふて、灼々たる花をのみ觀んことを期す、洵に憂ふべきの極みである、若かず吾れは殖產興業の道を講じて肥糞を國土に加へ、以て國本培養の急務に就かんと、而して熟ら但馬の國狀を觀るに由來蠶絲國として最も古き歷史を有するにも拘はらず、未だ舊套を墨守して少しも改良に志すものなく、遙に上信地方の下位に在るを慨し、之が改良發達を圖るを以て自己の天職ならめと、自ら養蠶敎師を聘して、或は試驗場、傳習所等を設け、又桑樹の栽植より、蠶兒飼育の方法等に至る迄で範を一般に示し、早くも明治十三年に卒先して製絲場を設け、嶄新なる製絲機械を据付け、進んで製絲法の改良に着手したのが、是れ實に兵庫縣に於ける機械繰絲の嚆失にして、輸出生絲製造の濫觴である、固より私利を思はずに、國家公益を念とせる事業なるが故に其後失費の增高、或は價格の變動等によつて、往々莫大なる損害を受けたることもありしが、他迄も不屈不撓の精神を以て經營の結果は、遂に規模を擴大して今や二百人繰りの機械を据付け、其品質に至りては、橫濱市場に於けるエキストラとして、常に信州上一番の高位にあること一捆に付二百圓に及び、本邦に於ける輸出生絲の模範として其名歐米の機業界に轟きつゝある。

氏は又自ら製絲場を經營すると共に、八鹿製絲場、其他株式會社の製絲場を創立し、或は生絲直輸出の目的を以て神戶港に生絲會社を設立し、又は縣蠶業組合長として、之が發達改善に盡瘁したるが如き、氏が多年先導となりて縣下の蠶業界に貢獻せる功勞や頗る多く、今や品質の向上と且つ其產額に於ても全國有數の地たるに至りしもの、固より當局の奬勵と、當業者の智識が發達したるにもよると雖、氏の功勞大に與つて力あるや勿論である。

抑も氏は殖產興業を以て其生命と爲すものであるから、獨り蠶業の發達振興に盡瘁したるのみならず、夙に復た志を殖林に致し其所在地を初め、丹波地方に於て最も大計畫なる殖林を企て、其後年々植込む處の杉檜十萬本を下らず、既に植込を了したるもの今や五百萬本以上に及び、又信州木曾地方に於ては二萬餘町步の大山林を買入れ、單に殖林家としても全國に於ける有數のものたるべく、或は伊豫國に於て銅山を經營する等、總て天與の富源を開發することに勗め、國家の生產界に寄與貢獻しつゝあるが如きは、自他互に利益を爭ふ商業家と異り、國家的事業家として大に尊重しなければならぬ。

氏は性謹直にして毫も富貴を衒はず、名門を誇らず、自ら奉ずること最も薄く、而かも國家公共とし云へば如何なる負擔勞苦も之を辭せざるの風がある、されば同地の粟賀神社は但馬草創の守護神として祭祀せるものなるに、格式の低きを慨し、種々の考證査覈を得て、昇格申請の事に鞅掌し、自ら數千圓の基本金を獻じ、或は又海防費、軍資獻納を初め、常に鄕閭の貧民を救恤する等、一々數ふるに遑がない、而して

又同地方の金融機關として梁瀬銀行を設立して引續き頭取となり以て其經營に任じつゝあるが如き、實に縣下の事業家として、將た又富豪として模範的の人物である。

終りに余輩が一言を禁じ得ざるものは、近時僅に一小村の治績を見て直に當該村長に藍授章を授けつゝあるにも拘はらず、氏の如き國家的事業家として且つ其功績の顯著なる士に向つて何等の表彰をもせざる事である、殊に服部知事の政策を見るに、但馬地方に於て徒らに消極的の德行家平尾在修翁を激賞しながら、未だ日下氏を還賞せざるが如きは甚だ怪訝に堪へざる所である、固より日下氏は虛名を厭ふこと蛇蚓の如く、彼れの地位として疾くに衆議院候補に立つべき筈なるに斯る事は少しも好ます、唯だ終始一貫實業家を以て任じ、且つ知事郡長等の送迎を厭ふの風がある、斯る人物であるから還賞せられたからとて別に喜ぶやうなこともあるまい、事ろ大に忌む處ならんも、去りとて國家の功勞者を閑却するは奬勵の趣旨にもあらざるべく、之を以て見るも、藍綬章は藍授章たるを知るべく、全體服部知事の如きは常に但馬に出入し城崎温泉に遊興を恣にする餘閑を以て、一度日下製絲場でも視察し、但馬地方に於ける蠶業狀態などを調査するならば大に覺る所があるであらう、抑も實業方面の事は單に蠶業學校、農學校等の成績にのみよつて判るものではない、宜しく個々の實業家に就いて其施設連爲のさまを窺ひ、其實相を窮むることは牧民官として良二千石たる所以であらう。序ながら一言して置く次第である。

# 生野銀行頭取　淺田貞次郎君

（朝來郡生野町）

生野と云へば銀山に依て其名は日本國中に知られて居るが場所は僻遠の山奥、此處に住む者は野武士の末か野人の輩のみと思ふて居る者が多いのも無理からぬ事である、然れども古來英雄傑士として謠はれたるもの、多くは千山重累の間、若くは洋海千里の濱村より輩出して居るを見れば、都會熱鬧の巷よりも却て山間濱村の地に偉大なる人物の潛んで居ることを知らねばならぬ、然り僻遠の山間には今日尙無名の人傑が往々にして其英姿を潛めて居るが、世間は之を知らざる迄の事である、否な知らざるに非らず、之を知る丈けの明識者が無いのである、ア、淺田貞次郎氏の如きも人は唯だ一地方に於ける先輩又は有力者として認めて居るが、併し彼は單に生野の人物たるに止まらずして、實に縣下有數の人物である。

氏は福本藩士にして後ち生野町の素封家淺田家の養子となり、以て淺田家を相續しぬ、爾來生野地方の爲めに終始一貫





蹉跌し、其功積んで今は同地方の長老として人の尊稱して措かざる所である、去れば各種の名譽職の如きは殆んど之を漏す所なく、又先年衆議院議員に擧げられ、一度は枹鼓臺の議政樞上に現はれたりしも、腐敗混沌たる政界の狀勢に嫌焉たらずして遂に再び選擧場裡に立たんとせず、又當時内藤利八鹿島秀麿等と共に播但鐵道を創立して、但馬方面の株主は殆んど氏の力に依て拉致したものである、且つ其資產といひ、又功勞と云ひ當然氏は社長たるべき地位であつたが、併し氏は頗る名利の念に薄く、自己の名譽利益を思はずして一意社の隆運と事業の進捗とを圖らんが爲め、當時日本實業界の先輩且つ有力者たる原六郎氏の意見を徵せしに、兒童をして其く養育せんとせば先づ嬰母の賢良なるを選ばざるべからず、會社事業も亦同じく、之をして成功せしめんと欲せば先づ重役其人の人物伎倆に俟ざるべからずと言はれし一言に飜然として覺る所あり、以爲く、社長は創立者を以てせず、須らく實業界に於ける一流の人物を拉し來らざるべからずと爲し、原六郎か池田謙三を迎へんと主張した譯けであつたが、其創立者は何れも政界の我利々々者のみにて、資產家と稱するは殆んど氏一人のみ、爲めに氏の高邁なる意見も衆の用ゆる所とならず、終に鹿島氏が社長となるに至つた、茲に於て氏は從々政治屋と共に事を爲すを嫌ひ、且つ元來が政界の狂奔家ならざりしを以て、其後政界を去りて專ら實業界に志すに至つた譯けである、時偶々同地に明礬の原料あるを發見し、其將來有望なる事業たるを察し、自ら飾磨町に製造所を設立して苦心經營すること多年、或時は頓挫し、或は絕望の淵に沈み、困苦慘憺を重ぬるも毫も意と爲さず、不屈不撓遂に今日の盛大となり、今や全國に於ける獨占の事業として世間より其事業の有利盛況を謠はるゝに至つたのも、要するに氏が堅忍不拔の精神と事業を愛するの觀念とより來れるの賜である故に氏が多年の苦心慘憺たる過去の經營を知る者は、例へ今日如何程莫大なる利益を擧げつゝありとするも、固と是れ他人の到底企て得ざりし所にして氏に於て始めて之を爲し得たるもの、去れば今更ら羨望の念も起らぬといつて居る、之を見ても如何に努力奮鬪の結果であるかゝ分るであらう。

其間には又資本金六拾萬圓の生野銀行を創立して其頭取となり、今に尙引續き其職に在つて經營に任じ、又往年生野銀山が御料局の經營を離れて三菱へ拂下げらるゝや、此急變より生ずる地方の影響尠なからざるものあるを思ひ、生野町の總代となりて之を御料局に哀訴し、氏の盡力に依りて遂に六萬圓の恩賜を受け、爾來生野町が全國三箇町村中に數へらるる無稅町村の一となれるは、實に右の拜受金六萬圓を以て町の基本財產となした結果で、一に氏の功勞に歸せねばならぬ

氏は漢籍の造詣甚だ深く、其神心は殆んど儒學を以て鍛へ上げたる丈けありて、今日の學校敎育などを受けた學者先生とは其人物の根底を異にして居る、元と藩校に敎鞭を執り、目下我陸軍部内に嘖々たる藤井中將の如きは實に氏の薰陶に浴したるの一人にして、今尙淳厚なる情義が保たれてあると云ふことである、然れども其人物は儒學を以て根底と爲してあるにも拘らず、世の所謂道學先生の如く徒らに道學の奴隸とならず、其思想と云ひ、識見と云ひ、社會の先覺者として

萬人の指導者たるに耻ぢぬ、隨て如何なる問題に對するも必ず一箇の識見を有せざる莫く、近くは生野町が年々町費の膨脹に伴ひ、本年度より多少の町税を徴收せざるべからざる狀態に陷るや、土地の有志家と稱する者は多年無税町として誇り來れる名を惜しみ、今更ら此名譽を毀損すべからずと爲し皆擧つて之に反對したると共に、各有志家は其町費の不足を醵出して之を補ひ、飽迄で無税町の名を維持せんと主張したが、氏は獨り之に反し、凡そ國民として國税を負擔するが如く、町民として町税の負擔を爲すは、是れ地方自治民の本分にして、無税は必ずしも町村團體の名譽に非らざると共に、町税の負擔がないからとて其町民が發達するものではない、殊に自治的の觀念は町村費の負擔に依て益々發達すべきもので、現今内務省が盛に無税町村を奬勵するが如きは謂はゞ消極的の遣り方であるから寧ろ町民たるものは進んで町税の負擔をなすと共に、積極的に福利を增進せしむるの覺悟なかるべからずと爲し、遂に無税主義を廢止せしむるに至つた、ア

ア其識見の高き、議論の堂々たる内務省の無税主義も殆んど之には顏色なしと云ふ有樣である、斯の如く氏は世の道學先生に似ず、其思想及び見識は實に文明的である、而して又健實であると共に、其人物は押しても突いても動く人間ではない、飽迄も自己の所信に依て行動し、又意思の堅確にして且つ自信力の强きとが益々其人物をして重からしむる所以である、而して其體軀は尨大魁偉、其畫き損ひの達磨みたやうな顏付は一見して人を威壓し、親しむに從つて畏敬の念を拂はしむるに至る、洵に當今珍らしき人物で、敢て但馬と謂はず播州方面などにも此位の人物は居らぬかも知れぬ、年は今年六十にして一町會議員として地方の爲めに盡して居る、少しく威張るやうな傾きはあるが、併し群鷄の一鶴として人も許し、自らも亦任じ、毫も之を怪しむ者がないのみならず、其人格も亦頗る大にして品性も高く、同地の元老として衆皆尊敬し、服從し隨て其勢力の偉大なることは言ふ迄もない、兎に角但馬の名物男である。

田村銀行理事

# 田村賴太郎君

（朝來郡生野町）



生野町には財産家多し、田村賴太郎氏も亦其一人として、而かも同地一流の大資産家である、其富は先代に由て俄かに增殖したのであるが、氏が二歳の時に早世したから、氏は幼にして同家を相續した譯けである、されど幼にして未だ家事を見る能はず、乃ち叔父の勘兵衛氏が其補佐の任に膺り、同家をして安泰なるを得さしめたので、其功は沒すべからざるものである。

氏は長じて專修學校に理財の學を修め、業卒へるや大志を樹てゝ實業界に投じ、新進有爲の實業家として盛んに活動し又播州派の實業家と相提携して種々の事業を起し、劃策經營する所ありしが、時甚だ非にして事は意の如くならず、蓋し新進氣鋭にして進むに勇、爲めに四圍の事情を察するに聊か周到ならざりしにも因るであらうが、之が爲め氏は一時事業界の活動を中止し、其後の行動は聊か消極的に流れて來た嫌ひはある、而して今は先年創設したる參拾萬圓の合名組織なる田村銀行の理事として經營に任じつゝある傍ら、羽二重會社、山陽醬油會社の重役たるに止まり、他に新活動を爲さんとするの模樣なきは、或は一時の反動として今は修養に努めつゝあるものゝ如く、年は尙三十の少壯者であるから、眞の活動は固より今後に在ると共に、今や滿を持して容易に放たざると云ふ場合であらう、又斯くあらねばならぬ、先年佛國の萬國博覽會へ縣の囑託に依りて出張し、續いて歐米文化の視察を遂げて歸朝したが、洋行後は頗るハイカラ風になつたやうである、人と爲り、溫厚の質、頗る書畫骨董に多大の趣味を有し、又之が爲め、洋畫の大家白瀧幾造氏に資を給して洋行せしめたるを始めとして、書生を愛し、學資を與へて勤勉せしめつゝあるものも少なからぬと云ふことである、又公共慈善に吝しむ處なく、世の所謂金持とは大に趣きを異にし實に富豪たるの地位責任を解する文明的の資産家と稱すべく但馬の人物が多くは祖先の餘光に得々として、鄕閭に重望されあるも、彼等は單に一鄕の有志に過ぎずして、若しも他方に往かんか卑吝陋劣にして能く交際場裡に立つて地方を代表するに足るべきものがない、然るに氏の如きは已に新時代の學問を修め、又歐米の新智識を吸收して世界的の人物に交はり、加ふるに財産あり人格あり、同地方の資産家中對外的人物を覓むれば、恐らく氏の右に出づるものはあるまい、余輩は地方の爲め縣下の爲め氏の如き人物が、益々社會に活動されんことを望むものである。

# 田村銀行頭取
# 前生野町長
# 田村勘兵衛君

（朝來郡生野町）

人と生れた以上は多少吾人を包容する社會國家に貢獻するのが義務である、而して國家社會に貢獻すると云ふも、強ち大資本家大政治家に限つた譯けではない、爰に良心に從つて忠實に業務を執る職人ありとせよ、其職人の忠實と勤勉が自然を化して立派な加工品を作り出す而已ならず、其勤勉忠實は人に感化を與へ、恰も一波動きて萬波動くが如く、一人の手本は他の模範となり、其社會に及ぼす成績は、役員の爭奪を能事とせる立法府の議員、又は埒もなき政治家が大臣となりて、法律命令に盲ら判を捺すもの、或は官僚と結託して自利を壟斷する政商、祖先の遺産を笠に着て遊惰安逸を貪る財産家等に、優ること天淵の別ありと云ふべけれ、されば經世濟民の事業と云ふは、必ずしも大政治家にあり、大資本家にならずとも、實は聞わざる老農、老圃の類にも出來得ることである、例へば小さき村の村長にても、誠に一村の政務を善くし、自治制の長所を發揮せんと骨折りたらば、其村は他の模範となり、滔々たる洪水大潮の如き、頽風汚俗を山中の一村によりて堤防し、其感化によつて日本帝國の元氣を維持するを得べく、果して然らんには、此人の功必ずしも一國の大臣となりて廟堂に立つものに讓らずと謂ふべきであらう、而かも此を之れ覺らず、近時若き人の心は多く浮足になり、實の伴はざる虛名、實際の價値以上の名を得んとする不自然の行爲を敢てし、榮譽の爲めに心の平和を破り、人として爲すべき義務を怠つて居るものが甚だ多いやうである、されば此等の輩を戒飭せんが爲めに、一鄕の善士として田村勘兵衛氏を紹介せんとするものである。

氏は田村賴太郎氏の叔父にして、明治十年頃別れて一家を成し、間もなく賴太郎氏先代の歿するに逢ひ、同家の後見として、年幾に二歳の賴太郎氏を補翼し、遂に其器を成就せしめたる而已ならず、同家の家道に一大發展を劃し、明治三十一年一族の合名組織を以て田村銀行を創立し、自ら之が社長となつて堅實なる經營の結果は、斯界の信用最も厚く、後ち增資を企て、參拾萬圓となし、今や同地方に於ける確實なる金融機關として譏はるゝに至つた、此間に於ける氏が自我を沒却して宗家の爲めに盡したる美情は、同地方の美譚として喧稱せられ、世の往々本分の間に於て幼主を機貨とし財產を橫領する等の後見人の爲めに慥に頂門の一針として、氏が美德を窺ふに足るものがある。

氏が宗家に對する美德は又地方公共の治績となつて表はれ明治三十六年生野町長に擧げらるゝや、同町の一部が二十九年頃御料局より拜受せる六萬圓の內壹千圓を神子畑村に頒ち殘額を利殖して三十八年には九萬餘圓となるに至りしが、恩賜部落より內五萬圓を生野町に寄附せしめ、其他の部落より壹萬五千圓、有力者より壹萬五千圓の寄附を募り、自ら貳千五百圓を拂して總額九萬圓を町基本財產となし、之が收入を以て町稅を全廢し、全國に於ける三無稅町として推稱せらるるに至れるが如きは、固より各有力者が公共心に厚きによるや勿論であるが、又以て氏が公共に敎く一鄕を德化したる結果であらう、氏は又單に消極的基本金而已にては、今後經費の膨脹に伴ひ、收支の支ゆべからざるを慮り、更らに三十六年山林十五町步を植林して町基本財產に充てたるが如き、其他敎育、勸業、衛生等に至るまで、最も固到なる用意を以て自治體の健全なる發達に努力至らざるなく、在職八年の永きに及び、其間に於ける氏が毫も一身一家を顧みず、國家公共に致したる功勞は永く沒すべからざると共に、其人と爲りの一斑を解することが出來るであらう。

氏は自治體の發達に意を致したる一面に於ては、曾て有力者と共に、生野銀行を創立して引續き之が取締役に擧げられ實業界にも盡する處又多く、模範的の人物たるに恥ぢぬ。

（朝來郡佐中村）





# 殖林家
# 進藤長次君

但馬は由來多士濟々を以て稱せらる、然れども其多くは過去の人にあらずんば他鄕在住の士にして、今土着の人物を物色せんか、甚だ寂寞を感せざるを得ない、隨て又其後繼人物にして稱すべきものは殆ごない、此時に當り獨り進藤長次君の如きは、少壯有爲の人物として大に將來に嘱望すべき人物である。

氏の先は既に原六郎翁を敍するに當つて略記したる如く、藤原義氏に起り、後裔小源太敦景が同地に歸農したりしことは、同家の系圖竝に墓碑によりて詳かである、爾來七百年連綿として地方の士豪であつた、其家は鎌倉時代の建築に係り如何にも古色蒼然として奥床しい處があり、一見して名門豪家たりしことを物語つて居る。

氏は姫路中學校を終へて東京專門學校に學びしが家政上中途退學して家道を顧いだ、道に名門に生れ名家に育ちたるだけに、先天的旦那樣の典型を具へ、圓滿にして寛宏、長者の風があり、言行些の圭角なく、和氣常に面上に溢り、由來但馬の流弊たる門閥を誇り人を輕侮するやうなことは少しもなく、爲めに鄕閭氏を仰ぐこと神の如く、少壯强いて推されて村長となるや、村民の信賴太だ厚く、從つて村治は圓滿に行はれ、氏も又煩累を厭はずして其職務に鞅掌し、常に自治團體の發達に腐心し、夙に村基本財産の造成に着手し、之れが財源としては村共有山林の整理を行ひ、一面村内を說いて貯蓄を屬行せしめ以て之れに充當せる等、縣下に於ける有數の村基本財産を造成するに至つた。

氏が又公共觀念の表現として見るべきものは製絲事業經營の改善である、蓋し蠶絲の業は但馬の命脈にして、之れが消長は直ちに以て但馬の盛衰に多大なる關係を有するに拘はらず、同地は今に舊弊を脫せざるの風あり、殊に製絲の經營法に至りては、關東方面は養蠶家自ら生繭の殺蛹乾燥を行ひ適當の時機に賣却するを以て、製絲家にありても時の生絲相場の標準を以て區々に買入れ得べしと云へども、但馬地方は生ま繭の儘收穫當時に全部賣り放つの習慣あり、故に當時の生絲相場如何によりては雙方何れか損失を蒙ることゝなり、加ふるに品質の毀損、資本の關係等種々の困難と弊害がある、爰に於てか氏は此積弊を避けんが爲めに、村内大小の養蠶家を糾げて組合員となし、各自の收繭を一所に提供して之れを生絲に製造し、養蠶、製絲の利害を交涉して最終の利益を圖らんとする目的を以て山口繭絲組合を組織し、工女の如きも各組合員の子女をして之れに當らしむると云ふ風で、傭者被傭者の關係もなく、從つて作業の忠實にして品質の改善は勿論、經濟上より云ふも、又社會政策の見地よりするも、理想的の經營法である、現に氏が組長として監理しつゝあるが、其成績頗る良好にして縣下に於る模範的の組合と稱せらる。

氏の居村は山陰山陽を境せる深山に接し、其所有山林は南北數里に跨り廣袤測り知ることは出來ず、然かも樹木鬱蒼として滿山富の凝塊である、近時鐵道の便拓けたるを以て、此山林に於る無盡の樹木を輪伐整理せんが爲めに、南山より新井驛まで輕便鐵道を布設し、薪炭材木の製造と共に、附屬事業として鑛酸の製造を爲す等頗る文明的の經營法であるが、一通り伐り盡すにも數十年を要すると云ふ最も遠大な事業である、想ふに之れが植林の曉きには、山林の面目を一新すると共に莫大なる富の增殖を來すであらう、以て氏が手腕の凡ならざると共に、一面時勢に乘ずる明のある人と云へるであらう。

## 生野銀行取締役　進藤敢君

（朝來郡佐中村）

山國として但馬は日本國中に有名な所である、殊に朝來の方面となれば山陰山陽の境界地で大山脈の頂上に位し、世の文明も這んな山奥迄は及んで居るまいと思ふやうな所である然るに實際は豫想と違つて仲々開けたもの、殊に生野といへば我國に於ける有名なる鑛山地、此山奥は卽ち明治維新の大革命を惹起せしめたる所謂生野義擧を以て有名なる所、而して又現に日本實業界の先輩者原六郎を出し、老骨稜々たる北垣男爵を出し、又前大阪控訴院檢事長たりし大島貞敏氏の如き多くの國家的大人物を出して居るのは以て世に誇るに足りる。

進藤敢氏も亦此山奥の一人である、而かも其家は生野から尙一山越ねた所である、四面皆山を以て圍まれたる所、殆んど道と云ふやうな道もない、然るに其山奥こそは文明の餘澤も此處へは及んで居るまいと思ふやうな所に、而かも神戸や大阪邊にも稀に見るやうなハイカラ的の家宅を構へ、場所柄に似合はぬ堂々たる建物は之れ卽ち近藤君の住家である、而して其家のハイカラ的の堂々たる建物なると共に、此所に住する進藤君其人も亦頗る文明的の堂々たる人物であるのは、生野地方名物の一つと數へられて居る。

氏は原六郎君の甥に當り、但馬有名の舊家にして又土地の豪族として四民の尊敬淺からざる佐中村の進藤家より分家して一家を成したるものである、隨て氏の人物と相俟つて衆望甚だ高く、曾て村長を勤め、又郡會や縣會議員などにも擧げられ、進んで地方公共の事に盡瘁する所多く、一面には又新井殖產銀行、生野銀行及び但馬製絲會社等を創立して其重役に擧げられ、今や但馬實業界の重鎭として聲望あり、又信認淺からざる人物である、手腕もあれば識見もあり、それに文明的の空氣も充分吸ふて居る、而して性は活淡洒滿、但馬國中稀に見る好紳士である。

凡そ世を利し國を益するの君子は未だ必すしも顯榮利達の巨商にあらす、王侯貴人の名流にもあらず、窮巷の處士邊隅の野人時に利用厚生の偉功を奏し治國安民の要道を立つるもの古今其例に乏しからす、丸尾八右衛門氏は是れ僻隅邊陲の僧夫のみ資產未だ天下の巨商を以て目せらるゝに至らず、聲望未だ天下の名流を以て稱せらるゝに及ばずと雖、赤裸々にして身を起し質實勤儉以て家を興し產を造り一面縡々として力を共益に竭し吃々として躬を公利に勞して怠らず其功其績豈敬仰せざるべけんや。

翁は幼にして丸尾家の養子となり、臥薪嘗膽有らゆる商業を營み、生野鑛山の用達となり、後稍財本の長するに及んで二三の銅山を經營し、幸にして利益を得たり、一面地方の山林を買入れ只管殖林に努めたりしが、時勢の進歩は材木の需要を喚起し、鐵道の開通は運搬を便にし、爲めに豫想外なる價格の昂騰を來し、終に今日の富を作すに至れり、吁是れ翁が勤儉力行の報償にして亦以て明ありと謂ふべし。

# 丸尾八右衛門翁

（朝來郡生野町）

翁資性篤實忠直にして高義あり、自ら家を興し產を作すと共に、社會公人として貢獻せること頗る多く、少壯身を挺して公共に致し、地方の發展に盡瘁すると共に窮乏罹災の人民を賑恤救濟するを以て任務となす、翁が後半の歷史は全く名譽の職任を以て充たされたるものゝ如く、明治元年初めて年老役となり、亞いで副戶長となり、戶長に進み、引續き生野町長に擧げられ、明治三十二年に至る迄在職前後三十二年、其間施設の重なるものを擧れば、明治元年生野縣の廢せらるや同地の衰頽を慨き、京師に抵りて箱訴をなし、容れられて再設せられたるを初めとし、同二年米價の暴騰に際し里人の飢餓に迫るもの瀕々、老幼相携へて路頭に迷ひ、悲風慘憺として天日爲めに暗らからんとす、其狀實に見るに忍びざるものありき、此の時に當り翁は慨然として之を救濟せんが爲めに久美濱縣に出願し、七箇年賦償還を以て五百石の米を借り入れ、以て之れを救濟し、生野鑛山寮の設けらるゝや郡民を徽發して機械の運搬を司り、又同寮建築の爲めに社木を徽



發するや播州の沿道民之れを拒み、竹槍蓆旗を以て同寮に押寄せ、事態容易ならざるものありしが、自ら斡旋して之れを鎭定し、戶籍改正地租改正委員となり、同七年二學校の新設を了し、同十三年竝に二十一年洪水汎濫して道路を決潰するや、町民の寄附を以て之れを改修し、其他道路の新設竝に生野分署を建築して之れを獻じ、御料局支廳が市川の原流に貯水池を築かんとするや、一朝水害の虞ありと爲し、町民の故障を生じたりしも能く之れが調停に努め、播但鐵道の布設に際しては土地買收に斡旋し、同二十七年同地の有力者と共に生野銀行を創立し、爾來取締役に擧げられ、同二十九年生野鑛山の三菱合資會社に拂下げとなるや、同町の盛衰に關する一大問題なりとして淺田貞次郎氏と共に御料局に陳情して、遂に同町の爲めに金七萬圓を賜はり、爾來町基本財產となし現に無稅町として全國僅に三町村の恩惠を受くるに至れるもの、翁の功勞沒すべからざるものあり。

以上は翁が經歷の梗概に過ぎず、此他多年公共に盡瘁せる事績は枚擧に遑あらず、宜なり明治三十二年一月內閣賞勳局は勅定の藍綬褒章を賜ひて之を表彰せらる、されば積年盡瘁の報償は終に稀に見るの榮譽となり、以て翁が頭上に輝くに至れり、褒賞簿冊の上各名長へに沒せざるべく、翁の如きは誠に公私兩全の成功者として吹稱するに足らん歟。

# 縣會副議長　丸尾光春君

（朝來郡生野町）

氏は豐岡町に生れ幼少落の實林義塾に漢籍を學び、但馬中學校に普通學を修め、次いで縣立神戶醫學校に入り、明治二十年卒業して丸尾家の養嗣となつた、後ち傳染病研究所に北里博士の教を受け、更らに、ドクトル、井上辰七郎氏に就て眼科を研究し、而して生野町に開業して以て今日に迄んで居る、明治二十九年大日本醫會には兵庫縣醫師の代表者に選擧せられ、同會に於て高木兼寬、長谷川泰、鈴木萬次郎之諸氏と議論を上下し、醫藥分業の反對を絶叫したることありき。

然かも覇氣滿々たる氏は一刀圭家を以て甘ずることが出來ず、往年尾崎、肥塚、箕浦の諸氏が黨勢擴張の爲めに但馬に遊說するや、刺激せられて政治上に趣味を覺り、直に進歩黨に入りて政治家たらんことに志し、明治三十三年町會議員に擧げられたるを初めとし、其後郡會議員、同議長に擧げられ郡農會評議員、同衛生、竝に教育會頭となり、四十年縣會議員に當選し、郡部副議長に推されたりき、其間郡市負擔率改正問題を提げて壇上に起ち、東洋の一大市場として日進月歩の神戸市と、荒廢日に甚しき農村を基礎とせる郡部の富力は十餘年以前の程度を以て標準とせる割賦率の不公平なるを絶叫し、之れが改正に努めたりしが、市部選出議員は選擧區の立ち場として反對する處ありしも、公平なる所說に動かされ遂に彼等の反省する處となつて、改正案の通過を見るに至つた、此固より郡部選出議員が何れも鞏固なる態度を以て主張したるによると雖、又氏の力與つて大ならずとせず、されば其手腕は地方に認識せられ、本年の改選に際しては再び選擧せられ、縣會副議長に推擧せらるゝに至つた。

氏は又刀圭家たり政治家たる一面に於ては、神戸銀行の重役として實業界にも野心あるもの、如く、但馬人物界に於ける活動家である、蓋し地方公人として、政治界に縱橫飛躍を試みんとするには、財産、名望、膽畧、識見を具備しなければならぬ、而して氏の如きは稍完全なる資格を有するものであらう、併し忌憚なく云はんか、氏を知る者の氏を評する言を聞くに、氏は抱負の大なるに比して襟度の小に失し、且つ猜疑心に富んで居ると云ふ、余輩未だ之を首肯するものにあらずと雖、若し事實ならんか這は氏が先天的の性癖にはあらずして、想ふに責任的の觀念を重ずるの結果は、世に處し事を執るに當り、細心周慮に過ぎて、稍や果斷に乏しき所以にして、今後修養に怠らざれば矯革し得べき性癖であるから、之を以て氏が全般を斷定することは出來ぬ、而已ならず氏が氣品の高尚なる、幼少にして詩文を能くし、曾て書生時代にあつては、一杯庵半醉と號し、諧謔の章を以て天下を諷し、長く圃々珍聞紙上に花を添へ、又最も俳諧を好み、雅號を藍水、三脈と稱し、四世竹粹園の門に入り、造詣して其號を襲ぎ、今や斯界の宗匠と仰がれ、遒勁三唱するに足るものあるが如き、以て實利以外に趣味を有することを窺ふに足るべく俗物の累々たる縣會議員中に在つては、稀に見る逸材たることが解ると共に今や但馬政界の寂寞を感ずるの時、氏の存在は愈に重きを爲して居るの觀がある。

# 醫師　佐藤英太郎君

（朝來郡生野町）

生野の地、由來山水秀麗の地なり、然り其山水は秀麗明媚なりと雖も、偶々其鎭山は生野の人心を俗化せしめ、現實的ならしめ、山水の秀麗も何等人心を訓化するものなし、山水若し意あらんには天に向て之を泣き、地に俯して之を悲しむならん、獨り山水と其心を融化せしめて閑雅悠趣、眞に生野山水の美を其神心に體したるものは、之を佐藤英太郎氏と爲す。

氏の家は生野の舊家、明治二十二年に醫科大學の別科を卒業し、後ち同大學の助手となりて更らに研修を積み、尋いで生野鎭山醫に轉じ、後ち同地に自ら開業して今日に至れるものなり、性は飽迄溫厚にして且つ篤實、加ふるに清廉自ら持して土地の俗惡に染まず、曾て高尚なる趣味を有して、其樂しむ所や毫も現實的ならず、甚だ高遠雅趣にして獨り清境に悠々たるの慨あり、去れば滔々として俗惡に流れ現實主義に陷り、萬人皆風を趁うて俗を爲しつゝある生野の地に、氏の如き人物を見るは、洵に萬綠叢中の一點紅たらずんばあらず、而して其人格は頗る高くして且つ大、態度風采も亦悠揚として迫らず、但馬國中稀に見る所の人物と稱するも、決して過賞ならざるべし。

氏は斯の如き地位境遇に在りと雖も、毫も野心なく又敢て聞達を求めんとせざる所、是れ到底人の企て得べからざる所にして卽ち氏の人物の頗る大なるを證するものたらずんばあらず、而して一意唯だ自己の天職たる醫道の爲めに靈瘁するの外、又他を顧みず、隨つて同地に於ける氏の信用は益々揚がり、遠近來り診療を乞ふ者、常に門前群を爲すの有樣なり蓋し氏は世の所謂虛名家に非らずして、自己の天職に忠なるもの、而して自己の天職に忠なるものは、纔て是れ人生の本分を全ふする所以たるを知らば、氏の如きは、實に人生の本分に向て遺憾なく盡しつゝあるものと謂ふべき歟。

# 生野町長　長谷秀一君

（朝來郡生野町）

先代文五郎氏は英敏の資を以て五代友厚氏に識られ、擢んのられて其經營にかゝる鑛山業に從事し、各地の鑛業率ね氏で手を煩はさゝるは莫く、富士野銀山、薩摩鹿籠金山等は、主に氏に依て經營せられ、從つて家道又大に振ひたりしが、不幸中途にして殪れ、五十九年の生涯は、活動の歷史を以て終りぬ。

氏は其後を紹ぎ少にして俊髦を以て里閭の間に識られ、姬路中學に入り、後ち笈を負ふて東都に遊び、更らに土佐高知中學に轉じて益雪多年、二十九年に迨んで海國民の本分たる海軍の駸駸たるを期し、海軍機關學校に入つて、專心機關術の奥義を究むる所あり、三十二年業を畢ふるや、直ちに海軍機關少尉候補生に任じ、翌年機關少尉と爲り、八島、和泉の各艦に轉乘し、後ち病罷その任に勝へざるの故を以て退き、鄉里に在つて靜かに宿痾を醫しつゝありしが、日露戰役の起るに及んでは上村艦隊に屬して、數次奇勳を奏し、事中三十八年大尉に昇任し、戰能み功を論せらるゝに當つては、勳五等雙光旭日章を授けられ、現に豫備役たり、本年生野町長に擧げられ地方公共に盡瘁しつゝあるもの、如く、されば年少乃父の大器大材を享け、曩には家を忘れ身を忘れ、一偏殉國の氣慨に橫溢せる氏が、單に遺產に固着して、愛錢思想に充溢せる地方根性に感化され、多くの未來をして小康に枯死するが如きなからんことを祈つて置く。

# 但馬製糸所主　鎌田三郎兵衛君

（養父郡大屋村）

氏は土地の素封家として、遍ねく鄉黨に崇敬せられ、個人として又公人として等しく社會の信望を負ふて居る、慶應義塾の出身にして新智識に富み、有爲の材幹として前途に多大なる望みを囑されつゝある、殊に遺產を死守して遊惰安逸を貪る底の人物ではなく、公私の事業に盡瘁して毫も倦怠の色を示さず、飽迄も活社會の活動家である。

大屋銀行の經營を主宰すると共に、曾て但馬製絲會社の社長として、社運の發展に努力しつゝありしが、昨年專務取締役の不始末事件暴露して、爲めに事業の上に一頓挫を來たし竟に解散を宣するの止むなきに至り、延ひて氏の聲望を傷け其手腕を云爲する者あるに至れるは、誠に遺憾の極みなりしが、而かも同會社は縣下の模範製絲場として、但馬蠶業奬勵の目的を以て起りたる沿革を有し、延ひて但馬產業界の消長盛衰に關すること多く、單に營利を目的とせる事業會社と趣きを異にするものあるより、氏は自ら其責任を負ひ、百方苦慮の後ち徐ろに再擧を策し、之を個人事業に移して經營を持續するに至れるが如き、氏が如何に地方產業の發達に腐心するの厚きかを知るに足るべく、今や奮勵一番、滿幅の熱誠を以て經營しつゝあるが、想ふに年少の氏にありては恁る失敗は活きたる敎訓にして、今後前邁に慘み愼重なる經營を爲さんには、蓋し好成績を齎すに至るであらう。

氏は新進の實業家として同地方の雄鎭たると共に、公人としては曩に縣會議員に擧げられ、縣參事會員として縣治に獻替する處多く、議會に於ける一方の首領として畏敬せられ、議政壇上の優者として官民の嘱望最も厚かりき、由來但馬の地が閥閱に誇るの弊風あるに引かへ、氏は譲虛人に下り、些の財閥門閥たる尊大の風なく、性は磊落にして恬淡、悠揚として迫らざる巨人の風貌ありて、極めて平民的の好紳士である、曾て衆議院議員の候補に推されたるも、固辭して起たず自ら信ずる所を行ひ定まる所に安んじて、絶ねて功名場裡に馳騁し政界の亡者たるを希はざる所ろ、卽ち氏の眞價の存する所にして、同時に氏の人格を默示するものである、大器は晩成す、氏が功利を逐ふに焦慮せず、唯物主義の奴隷たらざる所に、將來の政治的及び實業上の地盤が、今日以上堅實に建設せらるゝの前提として見るべきである、年齒少壯文明的の敎育を受け、洋々たる其前途には、必ずや偉大なる發展があるであらう。

西村氏の先は大阪陣の殘黨にして、豐臣氏の滅亡と共に遁れて同地に歸農したものである、代々莊兵衛を襲名し、同地方の素封家として考祖の餘烈は孫々相紹ぎ、三代以前の莊兵衛及び先代莊兵衛氏によりて、家道頓に勃興し、以て氏に迨んだ譯である。

先代莊兵衛氏は豪壯にして夙に勤王の志厚く、維新の風雲に際會しては、四方勤王の志士と來往し、夫の生野義擧の發頭人、筑前の奇傑平野國臣の如きは、但馬農兵の組織、義擧の企て等に就き、屢々氏の門を叩き、援を請へること尠なからざりしのみならず、實に又惇三氏の邸宅が、當時志士の來往謀議したる密會所なりしと云ふ、されば今猶同家に殘存する記錄によりて、當時志士の面影を偲ぶべき材料多く、就中最も感慨に堪へざらしむるものは、國臣が繫獄中、其鬱勃を洩らさんとして、獄底紙筆の給するものなきより、苦心慘憺終に便紙を撚して字形を作り、飯粒を以て之を墨紙に貼附し日に一字月に十字其忠君愛國の熱血より迸り出だせる「神武必勝論」上下二冊を草したる如き、之を見るもの誰が感憤興起せざらんや、而かも悲しむべし彼れの先導せる生野義擧は一朝瓦解に逢ふて素志を達するに至らず、憂國耿々恨を呑んで遂に時代の犧牲となりて殪れぬ、然れども生野義擧が實に明治維新の革命を喚起したる原動力たりしを想はゞ彼亦冥すべきである、されば當時勤王の志士が四方に流寓して、或は鼎鑊の難に遇ひ、或は刑辟の苦に坐したる修羅の慘績は、今爰に縷說するまでもなく、史乘炳として千載に貽さる、其後維新の變亂鎭まるに及んで、山陰鎭撫使西園寺侯が、勤王の志士の俤を偲ぶべく、特に西村家に勳を命じて、懇ろに考祖の苦節を追賞したるが如き、以て家門の光榮として子孫に誇るに足るものである。

現主莊兵衛氏は不幸先代の早世に逢ひ、僅かに年十七歲にして家督を承け、其後東都に出でゝ日比谷中學校、竝に加納塾に學び、後ち家政上の止むなき事情より中途廢學して家門の人とはなれり、性豁落にして不覊、毫も小事に齷齪せざる輪廓の偉大な處がある、而して粗豪なる性格が延ひて其素行を累し、意外なる方面に豪傑を氣取り、放浪耽溺、敢て家道を顧みざるの風ありしが、今や大に覺る處ありと見ね、謹嚴自特家政を勵掌しつゝあるものゝ如し、蓋し氏の如きは前に述べたる如く、比類稀なる名門に生れ、光榮ある家門を繼承せるの人、從つて責任の重且つ大なることは論を俟たず、家族の制度を以て基礎とせる我國にあつては尚更ら之を尊重するの義務がある、されば一代の成金たる光村彌兵衛の嗣子利藻の



# 西村莊兵衛君

（養父郡八鹿村）



如き輕擧なる振舞を許さぬ、幸に未來多き氏は、今後專念自我の天分を守り、家庭は勿論、世に處する上に於ても人の模範となり、乃祖の盛德と家門の餘光とを損さゞらんことに忠ならんことを祈つて置く。

# 前代議士　西村淳三君

（養父郡八鹿村）

氏は但馬政界の雄鎭、聰慧敏達夙に政治家たらんとの志望を抱き、早稻田に學んで政治經濟の原理を研鑽し、得る所を提げて政治界に飛躍し、竟に輿望を負ふて縣會議員に擧げられ、この間氏が穩健にして着實なる議論又は計畫は、渾べて學修せし政治論の實踐にして、明敏なる觀察力に加へて、非凡の識力を有す、其後ちにして一頭地を拔くに至りしもの、敢て偶然ではない、而して地方縣治に竭したる功勞及び誠意は、優に地方有志の認識する所となり、後ち衆議院議員の改選に方り、多數に推されて陣頭に立ち、竟に月桂冠を得、其地方政治に試みられたる氏の政治的手腕は、天下最高の議政壇上に立つに及んで、ます〳〵圓熟の境に入り、侃愕の議と正大の見は、克く縣下の輿望に適ひて、着眼擧措その宜しきを制し、以て附託の大任に負く所なく、聲望愈よ加はりて多くを期待せられつゝありき、而かも氏の爲めに惜しむ處は、氏が初め政友會を標榜して政治界に立ち、後ち國民黨に節を變じ、政治家の本領たる主義節操を過ちたるにあり、然れ共氏が稜々たる氣骨は、縣下の國民黨が勢力の擴大するに及んで、立脚地の利害を打算して、節を變じたるお天氣的政治家ではない、想ふに近時政友會の橫暴甚しく、民論に副はざるものあり、初めより輿論の代表者を以て任じたる氏は、瞭然として黨籍を變ずるに至れるものならんか、されば縣下の國民黨が今尙氏を以て筒井順慶として杞憂を抱くが如きは氏を知らざるものゝこと耳、氏今や閑地に就きて悠々風月と親しむものあるも、時會し機到らば復たび風雲に乘じて活動を試みんとするは、氏を信ずる幾多の政友が期する處なり、氏性恬淡にして寡慾、清濁併呑的の雅量に富み、人に接するや極めて親切、學才あり識見あり、殊に政治家の武器たる雄辯を有し、人物は倘く迄も大にして、眞個政治家の資格を具へたりと云ふべく、今や但馬政界の秋風寂寞たるの時に際し、氏の如き人物の存在するは、同地方の爲めに意を強ふすべきである。

氏の先は藤原鎌足に出で、世々伊豫國香本、千秋の二庄を領し、降つて源平時代に抵りては平氏に屬し、八島合戰に於て纔かに身を以て遁れ、當時の出石郡今の香本村に敗竄の孤身を託したるは、文治四年の頃なりき、其後戰雲欲まり戎衣を捨てゝ農に歸し、鶴岡村に移住して、香本岩見守時重と稱し、世々地方の豪族として里人の崇敬を受く、時重應仁の亂に會し北畠顯房に從ひ、不幸屍を馬革に裹むや、其子新八郎重成復ひ香本村に住し、中國征伐に當ては豐臣秀吉に從ひ戰功によつて、柿屋及び伊藤織安より感狀を賜り、以て同家の中興の祖となす、是より十三世連綿として家名を繼紹され、門地ある舊閥として今日に迨んで居る、新八郎重成の子、秀吉の召す所となり姫路城に臣禮を取る身となりしも、其妻明智光秀に肉緣の繫るの故を以て、又復弓矢を捫きて歸農せり之れを治郎左衛門重行と稱す、其子重兼に至つて京極家の領分に屬し、大里正を勤め、後天領の里正と爲り、更らに大庄屋に用ゐらる。

# 河本濱次郎君

（城崎郡鎧岡村）

氏は明治維新廢藩置縣とゝもに豐岡縣の大鄕長と爲り、三大區長に擧げられ、後ち兵庫縣に合するに及んで副區長を拜し、又出石郡書記に擢用せられ、官を辭するや三十五年に至りては、衆望を負ふて縣會議員に選擧せらるゝに至つた。

鎌足の後裔に發祥したる氏の家門が舊くして且つ由緒正しき系統の下に、一族連綿として祖先の武名を汚す所なく、地方に於ける閥閱を以て容され、聲望、崇敬里人の仰ぐ所となり、子孫相傳へて武門の繁榮を誇るを得るもの、一に祖考の武勳、權威を表彰する所であつて、後の之れを稟くるものがたゞ其の誇りに衒耀して、徒らに家名と遺産を株守するに汲汲たるならば、必ずしも考祖の志を大成するに忠なるものに非ざるべし、由來但馬の地、門葉を重んじ、舊閥、名族の如き、今に迫んで隱然一勢力を樹立するの觀がある、氏たるもの此自然の勢力に對して、宜しく地方生民の爲めに竭す所ありて、指導啓發の任を完ふすべきものである。



# 五十五銀行頭取　平尾源太夫君

（出石郡神美村）

但馬は由來交通不便の地である、隨て舊習を襲ひ、舊慣を墨守すること、恐らく日本國中但馬の如く甚だしき處はなからう、隨て門閥家は依然として門閥家なり、舊家素封家は相變らず衆民を頤使して權威を肆にす、斯の如きは近代日本に於ける異例として其風俗の固陋なるに慨嘆を禁じ得ざると共に、其所謂門閥家と云ひ、又は土地の豪族と稱する者が、毫も時勢の推移を察せず、時代の變遷をも覺らずして、舊來の惰力に依り、徒らに自尊傲慢の態度を持して貧弱の衆民を壓伏しつゝあるが如きは、其陋劣や實に見るに忍びざるものがある、然かも彼等は之を以て自家天賦の權利なるが如くに心得、自ら怪しまざるに至つては、其愚や洵に憐むべきものである、而して此舊思想の打破は新人物の擡出と新敎育の普及とに俟たねばならぬ。

平尾源太夫氏も亦但馬豪族の一人である、其家は出石の在同地に於ける素封家にして世々豪農を以て其名遠近に藹きつつあるが、氏は他の門閥家の如く、獨り自ら喜ぶものではない、頗る同情心にも富み、近隣の者が急を訴へ來れば、之を憐み之を救ひ、德行を以て衆に臨んで居る、隨て地方の民衆が氏に對する態度は、他の門閥家のそれと異なり、威服に非らずして心服である、斯くて氏の德化が益々地方民に及すと共に、氏が門閥家として又土地の豪族としての地位は愈々尊嚴を加へつゝあるの觀があるのは、洵に但馬地方に於ける富豪中に殆んど類を見ざる所にして、其德行と其人物の圓滿溫厚とは、以て他の範とすべきである、而して氏の叔父にして平尾在修と云へる故人がある、（余輩其人を知らず又其事績を詳にせず爲めに爰に之を敍するを得ず）頗る德望の高かりし人物にして但馬地方に於ける稀代の人物であつた、世人は稱して兵庫縣の尊德翁なりといつた位であるから、其德化の廣く且つ大なりしことは言ふ迄もなく、氏は卽ち其甥として其薰化を受けたことも固より他人の比ではない、卽ち氏が他の資產家に倣はず、獨り同地方に異彩を放ちつゝある所以のものは、蓋し故在修翁の薰化に負ふ所あるからであらう。

氏の家は固より家柄と云ひ、其資產と云ひ、出石方面に卓越して其右に出づる者はなく、又氏は現下資本五拾萬圓の五十五銀行の頭取として其經營に軈掌しつゝあると共に兵庫縣農工銀行の取締役である、去れど余輩は其手腕を以て必ずしも偉なりとするものではないが、但馬地方に於ける異彩ある人物として又其德行家として之を世に紹介せんと欲するものである。

# 出石神社宮司

# 西山員直君

（出石郡出石町）

今の時代は金の世の中である、金是れ萬能の時代である、然れども金を以て求め得べからざるものは人の人格品性である、又然り人格品性は金を以て之を買ふ譯けには行かず、又金を以て之を左右することも出來ぬ、茲に於て人格の尊むべく敬すべき所以を知ることが出來る、去れど今や人格の士乏しく、品性家は殆んど地を拂ふて求むべからざる時代となつた、然るに今茲に但馬の邊境を探つて一人の品性家人格の士を求むることを得た、其人は卽ち出石神社の宮司西山員直氏である、氏は固より金は無い、否な金の世の中に在りながら其眼中には金などを置いて居らぬ、ヨリ一層尊き或る物を以て自己の生命を爲して居る、或物とは抑も何ぞや、卽ち是れ俗社會に超脫したる崇高なる人生觀である、之が爲めに其人格は益々大を成し、其品性は愈々清ふして且つ飽迄も高い、ア、人間として之程美はしきことは求めて他に得べからざる所である、富は人間を美化せしむると云ふが、要するに黃金の現實的の美に過ぎぬ、獨り品性美、人格美に至つては、蓋し美の極致であらう、黃金美も之れには到底及ばない、故に氏の存在に依て但馬の山水は一層の美趣を添へ、薫風清香絶ねず人を匂はしめつゝある。

氏は出石藩士、明治の初年に土地の郡長に擧げられ、後ち國幣出石神社の宮司となるに至つた、國漢學の造詣頗る深く敢て居宅を飾らず、身邊を裝はず、粗家陋屋の裡に安如として恰も俗世界より離脫したるが如く、悠々自適として居られる、博士加藤弘之翁や、仙石子爵などは氏が無二の親友として、此三人は實に出石藩中の三異彩である、ア、當今の世に此の如き人物の存在するは、洵に人意を強ふすべきである。





# 五十五銀行專務取締役

# 岡崎正規君

（出石郡出石町）

但馬と云へば直に出石町を聯想すると共に、古來出石は但馬の代表地にてありき、之れ單り出石藩が但馬の雄藩たり、又仙石騷動によりて著聞せられたる計りでなく、但馬の物産たる生絲の集散地として、商業の中樞地として重きを爲したるによる、然るに時運の變遷は政治的の勢力を失ひ、生絲は直接他國に輸出せられ、出石燒は產額僅に參萬圓を出でず、從つて實業上の勢力又昔日の觀なく、加ふるに播但鐵道の開通は、最早同地を顧みるものなきの有樣、寂寞荒凉眞に感慨に堪へざらしむるものがある、されば出石人士たるもの今にして地方の發展策を講せずんば、或は遠からざる未來に於て出石は其町の資格をも失ひ、一小村落に退衰し去るやも測り知るべからざる次第である。

此時に當り依然として尙雄を一州に稱へて重きを爲しつゝあるものは、卽ち五十五銀行である、同行は明治十一年國立銀行條例の發布と共に、出石藩士の金祿公債を基礎とし、其他郡部の有力者によりて組織せられたるもの、當時各地に簇生したる國立銀行が多くは破產、併呑せられたるに拘はらず獨り同行が健全なる發達を遂げたる所以のものは經營其宜しきを得たる結果であらう。

兵庫縣人物史　岡崎正規君

氏は同銀行の創立せらるゝや、支配人として業務を擔任し其後專務取締役に擧げられ、之が經營を主宰すること前後三十年、以て今日に迫べるもの、而して氏が同行を主宰するや眞摯熱心なる經營の結果は行運益々發達して、最初僅に五萬圓の資本金は、漸次增加して現に五十萬圓となり、但馬一圓に於ける最も信用ある金融機關たるに至りぬ、之れ固より各重役諸氏が指導の宜しきを得たるによるや勿論なりと雖、氏が實際上の手腕に負ふ處多く、殆ど生涯を通じて同行と終始せる功勞は之を沒することは出來ぬ、從つて氏が如何に業務に忠實にして且つ忍耐節制に富む人物なるかを想像するに足るべく、されば我國に於ける銀行界の成功者池田謙三、熊谷辰太郎氏を出したる出石町が、今や又地方銀行家の模範たる氏を有することは、倍々以て銀行界に光彩を放つ所以である。

# 兵庫縣蠶業會長
# 寶林銀行頭取
# 岡　毅君

（城崎郡豐岡町）

兵庫縣下出身の人物は概して情誼に乏しく、先輩にして地方の青年を指導せざる而已ならず、鄉倡を念ふものも又鮮くない、從つて後進者が敢て先輩を推戴せざる計りでなく、地方在住の人物も又縣下出身の成功者を歡迎せざるの結果は互に意志の疏通を缺き、地方勢力の振はざる所以である、殊に豐岡出身の士に至つては地方を顧みるもの甚だ少なく、甚しきに至りては敎育家を以て任じつゝある人にして祖先の展墓も閑却して居る人物がある、之等は文部省が祖先崇拜せよとの訓令に違ふものではないか、今地方人士の言を聞くに學問すれば所には居らぬ、親の墓も顧みないやうになるから、學者にはしないと言つて居ると云ふ風である、此を以て見るも地方先輩の感化程世に恐ろしきものはなく、余輩が本書編纂の趣旨も又玆にある、一體愛鄉心のないものは愛國心のないものである、敎育も此に至ると亦危險なりと云はねばならぬ然るに豐岡出身の人物にして中江種藏氏が鄉倡の發展に腐心し、又岡毅氏が職を辭するや、鄉里に歸住して地方の指導に任じつゝあるは、大に多とすべきである。

氏は素と豐岡藩士、我邦農桑界の大恩人にして、其貢獻する所尠からず、仍て征臺の役、大久保內務卿が全權大使として渡淸するや、李鴻章と折衝を遂げ歸朝するに莅み、彼我兩國は互に和親協同して、文物を交換すべく約せられた、其結果として翌八年に迨んで、政府は內務、大藏、開拓使より視察員を派遣するに決し、塚原但馬守を初め氏竝に山口辰次郎中原某の諸氏その選に當つて、その五月渡淸した、彼地に到りし一行は李鴻章の保護に依り、漢口、武昌、江蘇、浙江の各地を巡歷し、親しく農桑上の視察を遂げて、同十二月歸朝復命したのである、當時氏の一行が齎し歸りたる水密桃の數顆が、我邦果實界有數の產物として、今尙ほ坊間に販出さるるもの、實に氏等の功勞を多とせざる可からざるものがある。

今氏の官歷を見るに、明治七年文部省に入り、同年內務省勸業寮に入り、同十三年內務省農務課に轉じ、十四年農商務省勸農局に移り、十七年蠶茶課長となり、二十九年橫濱生絲檢查所の設置せらるゝに及び、擧んでられて之れが所長となり、三十四年老齡耳順にして、辭して故山に退耕することゝなつた、而して氏が暫らく世と遠ざかり、淸境に身を養はんとした素志も、竟にまた俗累に囚はれて、中江種藏氏等に依て起されたる寶林銀行が、適當なる柱梁の材なきに會し、氏を起たゝしめて頭取の席を與へ、以て事業の振展を圖ることとなりき、氏が多年に練達し來りたる事務的手腕は、その行務を視るに當て又遺憾なく發揮せられ、其堅實なる經營振りと絕大の信用とは、銀行事業の發展向上に、多大の貢獻を齎らし、今は地方經濟機關の雄として推さるゝに至りぬ、蓋し氏は單り農桑界の恩人たるのみならず、本邦農桑の改良發展に與つて、非常の勞苦を厭ぎたる人なることは、今更ら絮說の要も無い、而して夫の澤野惇、林遠里、船津傳次平諸氏の如きは、同じく氏と共に本邦農桑界の翹楚として識られ、共に我邦經濟史上の一頁を領有すべき人々である、毅氏性謹嚴にして方正、多年の官海游泳は氏の社交に老熟なるを示すのみならず、其事務的才幹の優秀なるを顯はし盡して餘りあるのである、氏現に縣蠶業會長として令名あり、老いて益々壯んに、夙夜斯業の改善發展に努め、その非凡なる精力主義を發揮して天下の壯佼を愧死せしめつゝあるが如き又壯んなりと云ふべきである。



# 神榮銀行主
# 瀧田清兵衛君

（城崎郡豐岡町）

氏は同地方の資產家として著聞し、佐川氏とゝもに同町の雙璧として稱へらる、先主淸兵衛氏は遠く旣に明治十一年において、同地方產業の發達に資せんが爲めに、神榮舍と稱する金融機關を創設し、後ち更らに神榮銀行と改稱し、その組織を擴大して資本金を十萬圓と爲し、一層業務の擴張を圖り堅實なる經營は行運益發達して、遂に同地方に於ける有力なる個人經營の銀行業者として推さるゝに至つた。

氏は先代淸兵衛氏の歿後幼少にして家督を承け、爲めに銀行業務竝に家政を攬理するに尙餘年あるの故を以て、佐伯品三氏を後見に囑し、三十六年親族片岡氏が專務取締役として銀行業務の經營劃策の任に衝り、品三氏又支配人たるに及んで業務頓に發展を劃し、今や其實力は覓かに同地方の株式銀行を壓するに至つた、恁くの如く親族一門擧つて誠心誠意、氏が幼仲を補けて家道の發展に鞅掌しつゝある所以のもの、一に先代餘澤の流芳にして氏たるもの大に之を涼とすべきである、聞說、先代淸兵衛氏は同地方の資產家と稱するものが僅の資產を擁して門閥を氣取り、地主金貸は直に旦那樣となり、尊大驕傲の弊風あるを慨し、自ら平民主義を以て金貸を營みたるの結果、地方の信望一時に加はり遂に今日の大を成せりと云ふ、然るに今や瀧田氏の態度を見るに、但馬金持のせりと云ふ、然るに今や瀧田氏の態度を見るに、但馬金持の

氣風を發揮し、頗る貴族的に流れつゝある處は、先代の遺志に悖る處なき歟、余輩嘗て我國富豪の巨擘、岩崎久彌、藤田平太郎、遡くは伊藤長次郎氏等に接す、彼等は夙に數十億の富を擁せる歐米の資產家に接し、僅に參千萬や五千萬の資產を以て、金持面らをする譯けには行かぬと、洒々落々平民的に世に處しつゝあるに反し、敢て氏と云はず但馬金持が世間知らずの尊大なる、人をして嫌惡たらしむるものがある、道は年少にして將來大に活動せんとする氏の爲めに、敢て苦言を呈する所以である。



# 豐岡町長　佐川銀行主　佐川恒太郎君

（豐岡町）

凡そ國運の隆盛と民生の幸福とは地方自治體の發達進歩に俟つ所甚大なるものがある、卽ち地方自治體は國家の基礎なると共に、又國民生存の根據となるものであるから、其經營は最も意を用うべき所である、而して之が發達を圖らんとするには、之を指導すべき首腦者に其人を得なければならぬ、然るに我國今日の狀態を見るに自治體の首腦者が一般に向下しつゝある傾があるのは國家の爲めに甚だ憂ふべき現象ではないか、斯の如き場合に當つて偶々豐岡町が、襄には德望を以て地方に嘗きたる原庄七氏が町長となり、今又同地の巨擘にして殊に新進の人物たる佐川恒太郎氏が町長たることは、豐岡町民の爲めに甚だ賀すべきことである。

氏は豐岡町の素封にして且つ同地に於ける資產家の巨擘と稱せられて居る、其家道は乃父儀右衞門翁によつて頓に發展し、仍て貸金を以て營業となしありしが、往年私立佐川銀行を創立し、眞摯以て經營を爲したる結果は行運日々に進み、今や同地に於ける神榮銀行と相並んで金融界の二大機關たるに至れる計りでなく、又一面には物產の發達に資益したること頗る大なるものがある、翁は齡既に古稀を過ぐること雖、今尙强健にして悠々老後を養ひつゝある、而して恒太郎氏は少壯より家道を補佐し、業務を擔任し家政を擬理する傍ら、豐岡銀行の重役として且つ同地の有力者として細大となく公共事業に斡旋し、仍て町會竝に郡會議員に擧げられ、今回原庄七氏の後を襲ふて町長たるに至りぬ、氏は性頗る着實にして毫も虛名を喜ばず、仍て同地方の士が徒らに政治社界に狂奔して財を散じ、身を滅じたるもの多きに拘はらず、氏は敢て其渦中に入らず、里人の推稱切なるものあるも常に固辭して受けず、只管地方の有力者を以て任じ實力の養成に力めつゝある、人に接するや飽迄も平民主義にして、但馬一流の門閥を誇り、財產を鼻に掛けて威張り散らすやうなことはない、想ふに洋々たる其前途には大に爲す所あるべく、又其手腕聲望によつて豐岡の町政は頓に發展するであらう。

# 前豐岡町長　原庄七君

氏は幼にして丹靑の技を嗜み、長じて倍々造詣する所深く、夙に一家の風を爲す、鹽川文隣、田能村直入等の門に遊び、高弟として識らるゝところもに、商業の風神を會得して、將に大家の群に伍せんとするに至つた、氏は風流に親むと共に、また營利の業に疎からず、乃祖の遺業たる呉服及び生絲賣買の家業に勵精し、勤儉力行、財を造りしもの亦た尠からず、二十五年には從來の家業に一轉向を來たし、生絲問屋を創始して、汎く丹後、京都地方へ販出し、信用ある老舖として著聞するに至つた、現今に迫んで家業全部を女婿芳藏氏に一任し、氏はその後見たるの傍ら、天品たる風流韻事に親しんで居る。

氏は一商估、一丹靑家として、世に識らるゝのみならず、又た公人として寄與する所多く、町村政發布以來議員に擧げられ、三十一年には町長の要職に就き、三十六年縣會議員に選ばれ、地方自治政又は縣治の上に漑ぎたる誠意は、夙に世人の認識する所である、氏はこの間、曩きに廢縣に際して豐岡縣立病院の那有たりしを、十五年頃豐岡町外六箇村有に移し、親から之れが經營の衝に當りて、劃策經營その宜しきに適ひ、以て今日の盛況を見るに至つた、また明治二十年豐岡銀行を創立して、三十九年以來頭取として專ら之が經營を主宰し、同行が地方產業界の有力なる金融機關として、重きを置かるゝに至りしもの、一に氏が獻身的貢獻の效す所たらずんばあらず、その他町立小學校、豐岡中學校の設立に盡力し地方風敎の振興に寄與せし功績の如き、同町の發展に負ふ所多大なるは、敢て贅するまでもない。

氏は又地方自治政の中心力として、農村の發達に竭盡するもの尠からず、今や頽齡既に古稀に達し、家業一切を繼嗣者に附託し、常に一管の毫を秉めて風流韻事に殘年を託しつゝあるが、其筆に成りたるもの逸品また尠しとせず、筆力遒勁意匠優婉にして一種の風韻を帶ぶ、品性人格偕に欽すべき地方の長老と謂つべきであらう。

# 美方村長 井上眞一郎君

（城崎郡美方村）

人は何れの業を爲すも皆天の命である、天然自分に授かりし仕事と心得るが第一である、自分が望み作つたと思ふは間違の基になる、親より讓り受けた業、自分が熱心に望み得た業、又境遇上止むを得ず從事した業、其他すべて人意に爲す種々の業あれども、根本に立ち歸つて考へて見たならば、皆夫々天から授つたものである、何となれば此宇宙の萬物皆天の命に作られたるものなるが故に、人間の仕事も亦皆天命ではない乎、然らば何事を爲すも皆天の命、即ち天職であると云ふ覺悟を持つことが出來る、されば己れの從事せる職業を天職と信じ、此業の外他に業はなきものと思ひ、一心に誠實を以て如何なる困難が來るも動かず、終始一貫した人は即ち人間の天職使命を全ふしたものと云ふべきである、されば非上眞一郎氏の如きは、即ち其一人であらう。

氏も又但馬式の舊家にして代々地方に尊信せられ、年少已に戸長を命ぜられ、町村制の實施と共に村長となり、引續き地方公共に執掌すること前後三十年、其間道路の新設、農業の改善、殖林の經營、蠶業の改良等を奬勵至らざる莫く、竝に村基本財産、學校基本財産の造成、風紀の改善等に努力したる功績の偉大なるに至りては、殊に縷說するを用ひず、又郡會議員、縣會議員等に選ばれたること一再に止まらず、實に全生涯を通じて、身を挺し貨を投じ、國家公共に致したる功勞は、國務大臣の功績に勝るとも劣る處なく、眞に人間の使命を全ふせる、余輩の最も尊敬すべき隱れたる人物である。





# 前縣會議員 神野源太郎君

氏の家は世々農と殖林を以て立ち、名望資產併せ有する一郡の耆宿として、輿衆の渦仰を鍾めて居る、明治二十九年八條村長に擧げられ、居ること一期有半、氏の行政手腕はこの間に於て遺憾なく發揮せられ、村政の改善宿弊の刷清等治績見るべきもの尠からず、後ち衆望を負ふて郡會議員に擧げられ、次いで郡參事會員となり、終に縣會議員に選ばれ、郡政縣政の爲めに滿腔の熱誠を濺ぎ、地方行政の向上を圖り、終始一貫渝るなき堅節は、氏を識ると識らざるとを問はず、齊しく其の高風を欽して已まず、氏は黨籍を政友會に置き、同會支部有力の一人として參劃具さに至り、黨の勢力に一段の強味を加へたるもの、蓋し氏の力に俟つもの多かりしならむ此順序よりして本年の改選に際しても、引續き候補たるならんと思ひの外、此を他の候補に讓りたるが如きは、機を察し時を稽ふる氏の性格として、政治運動の不生產的にして、往往產を滯じ名を傷くるもの多きに鑑み、祖先が勞苦の半面に貽したる得難き產を墜すは、決して氏の志ではない、氏が政治熱に沈溺して、敢て狂妄の云爲を屑しとせざる所ろ、乃ち氏の人格の偲ばるゝ所以にして、聽て氏の偉なる所以を表明するものである、氏は唯だ地方產業の發展、地方民生の幸福を希ふて、敢て他の野心を包藏せず、孜々として公職に殉じて居る、氏の如きは地方に於ける有數の人である。

# 豐岡病院長 船越三木男君

氏は但馬國出石藩士にして、東京に於て生る、壯年京都大學に遊び、醫科を修むること年あり、三十九年全科を卒ふるや、直ちに實地の研究に從事すべく、大學病院に入り研鑽一年有餘に及び、茲に醫學士の學位を贏ち得て歸鄉するや、四十二年豐岡病院の聘に應じ入つて副院長となりしは、是れ氏が實地臨床の首途であつた、秀才にして多くの前途を有し、而かも技倆傑に絕する氏を迎へたる院長齋藤氏は、氏が非凡の手腕を稱して已まず、氏は齋藤氏の値遇に感じ、精勵研鑽日に造詣の深きを示し、且つ患家に接する慇懃にして頗る懇到を極むるより、名國手として令聞を博するに至つた、齋藤

氏の幹する同病院が、年々非常の發展を告け來り、現に各科專門精通の醫師、助手、看護婦を有して、但馬一圓は固より遠く丹波、丹後地方より患者雲集して、門前つねに市を爲すもの、以て主宰者、補佐者の勵精懇到を極むる應診振りが、如何に疾患に惱める多數の士男士女を滿足せしめたりしかを想見することが出來る、されば昨年齋藤氏の歿するや、氏は同病院長として之を幹することゝはなれり。

而して同病院の聲望信用は、院長の要職に在る氏の技倆手

# 前代議士　佐藤文兵衛君

（養父郡糸井村）

腕に俟つもの多く、同時に氏が學校出の新知見は、病院の勢力向上に、如何ほどの色彩を添へつゝあるかは、更らに贅するまでもないことである、氏年壯氣鋭の身を以て、都市と沒交涉なる僻阪の地に、日夜倦怠をも示さずして天職に竭盡す由來醫は仁術なるとゝもに、救世主を以て目せらる、氏が俗塵を避けて鄉土同胞の爲めに、滿腔の誠意を傾倒する所ろ、眞に仁者の權化とも稱せらるゝであらう。



但馬人物を敍し來つて將に稿を終らんとするに當り、爰に逸すべからざる人物前代議士佐藤文兵衛氏を得たり、余輩彼の聲名を聞くや已に久し、而かも未だ會接の機なきを憾みたりしが、偶々氏が上京の途次を神戸に捉へて其風丰に接す、一見して容貌は魁偉、威風は堂々辛直なる好紳士たることを知るべく、親しく語を交ゆるに及んで溫情は言外に溢れ、道に德望隆々たる當年の俤を偲ばしむるものあり、眞に之れ但馬人物界の偉觀たらずんばあらず。

抑も氏は幼名を繁次郎と稱し、同地の儒者小森正藏、竝に某寺住職に就いて漢籍を修め、其二十二歳の頃家督を紹いで文兵衛を襲名せり、少壯區長、戸長等を勤め、明治十二年縣制の發布と共に縣會議員に擧げらる期滿つるに及んで、私に但馬蠶業の革新を圖らんことに志し、地方の子弟を選拔して岩代國掛田に派遣し、學術的養蠶製絲の方法を習得せしめ、自ら折返し製絲場を設け其修業者をして一般に傳習せしむる等大に奬勵に努むる處ありき、然るに明治十六年再び縣會議員に當選して常置委員となり、縣制の樞機に參畫するや、時の縣知事內海忠勝氏は、氏が手腕の凡常ならざるを見て將來を嘱望し、書記官牧野伸顯氏をして氏に屬官たらんことを慫慂せり、然れども氏は固より仕官の望みはなく、乃ち老親家に在すの故を以て再三辭退するや、知已親族等は氏が進路を拓く好機會にして殊に榮擧を鄕たんとするを惜しきことに思ひ、老親に此旨を告げて承諾せしむるに至れり、されば氏も今は辭するに由なく明治二十年六月縣土木課長を拜命せり、蓋し當時民間の拔擢者として突き出し判任官二等に敍せられたるは人の異數とする處なりき、然るに其後二十三年帝國議會が開設せられ、同年七月一日を以て衆議院議員選擧を執行せらるゝに當り、當時神聖なる選擧民は候補者を物色して、氏が最も適當なる代表者たることを認め、以て候補者たらんことを促したりしも、氏は自ら其器にあらずとなし固辭して受けざりしかば、選擧民は知事內海氏に交涉して其意を致し知事も亦之に同意を與へて慫慂する處あり、爰に於て乎其候補を諾し、二十三年六月官を辭して鄕里に歸れり、勿論自ら求めて運動する等のことは毫もなく、選擧當日風馬牛安閑と碁を圍みつゝ當選報告を受け月桂冠を戴くに至れりと云ふ、又以て氏が如何に輿望の高きものありしかを知るに足るべし其後三回の解散に遭遇し引續き當選すること四回に及びしが選擧運動の行はるゝに及んで蹶然として政界に袂を拂ひ、徐ろに閑日月を送ること二年、折柄同鄕の出身原六郎氏が其所有に係る炭鑛採掘を開始せんとするに當り、聘せられて豐前國田川郡中津原、大任兩炭鑛經營の衝に膺り、其創業施設に盡瘁し業務其緒に就くに及んで偶々病魔に侵され、止むなく之を辭して痾を鄕里に養ひ、其後同炭鑛後任者其人を得す業務の紊亂を來たすや、再び氏の力に俟たざるべからずと爲し原氏の招聘頻りなりしも遂に之に應せず、一切の名利を放擲して閑雲野鶴を友とし、老後を樂まんとせしが、折柄親族進藤長次君が殖林事業の大計畫を立つるに及び、今は懇請否みがたく其顧問として一切の經營を指導しつゝあるものゝ如く蓋し進藤氏の殖林事業たる第一期三十箇年計畫一千町歩と云へる頗る遠大の事業にして、到底功を眼前に急がんとする近眼者流の企て及ぶ處にあらず、されば進藤氏が氏の如き誠實にして名利の念に淡き好顧問を得たることは、小にしては一家の爲め、大にしては縣下殖林事業の爲めに此を賀せずんばあらず。

氏は性溫厚篤實、出所進退の公明にして適く處として可ならざるなき手腕は、以上の經歷に徵して之を窺ふことを得べく、想ふに當年の政黨者流多くは末路の肅條として振はざるものあるに反し、氏が依然として信望を持續しつゝあるもの以て其人物の凡常ならざる所以を證するに足らん歟。

# 丹波之人物

## 故小島省齋氏略傳

（氷上郡佐治村）

氏は名は愼、字は思之、幼字友吉、後四郎兵衛と稱し、晩に忠太と改め、省齋と號す、文化元年八月十一日を以て氷上郡佐治村に生る、幼にして穎悟、七八歳の時字を一寺に習ひ僧輩と嬉戯するや、常に卒先群兒の上に立つて訓戒或は演談を爲す、皆欽んで聽かざるはなかりき、後ち同村の醫師長谷部信齋に就いて句讀を受くるや、博覽強記未だ幾ならずして能く師の右に出で、師賛嘆措かざりしと云ふ。

氏早く父を喪ひ、母に事ふるに至孝なり、母堂某賢夫人にして意を用ひて之を敎養す、氏一日怒氣色を作すや、親しく鋭をとりて其顔を視せしむ、是より自ら戒め喜怒面に形はさゝりしと云ふ、長ずるに及んで京師に遊び、猪飼敬所の門に學ぶ、素より資品に乏しく、則ち一寺に僑居し、寫字を賃して餘暇書を讀む、勤勉倦まざること三歳一日の如し、學大に進む。

氏經義に精しく、兼て兵書を攻し歴數に通ず、初め敬所翁に就いて折衷學を修め、大凡秦漢以下の諸説、博覽考證斯れ勤む、後ち專ら程朱を主とし格知誠正の學に從ふ。

天保年中柏原藩主織田信古公、氏の至孝を賞して俸二口を賜ひ新年參賀を命ず、弘化二年信貞公召して殿中に書を講せしむ、四年信敬公封を紹ぎ賢にして學を好む、嘉永二年又新館を新築して學制を興し、其明年公始めて氏の講義を聽いて之を悦び、俸三口を增し以て藩儒と爲し、居を柏原に徙さんことを命ず、氏母老ひたるの故を以て之を辭し爾來月一回柏原に至りて書を講ず、氏一日經筵に出で敢て講せず、曰く臣封内の賤民言ふに足らざる也、然るに今や聖經を講じて守公座して下にあり、聖人の道を敬する所以に非ざる也、乃ち席

を易へて而して後ちに講せりと云ふ、公嘗て巡視して佐治村に至る、氏閭頭に出でゝ迎ふ、公之を望見するや遽に馬を下り遂に徒歩して其家に至り禮を厚うして還る、此時に當り藩債積んで巨萬を爲し、上下爲めに窘迫す、公勵精治を求め將に積弊を改革せんとす、氏を寢室に延いて諮詢する處あり、氏も亦力を竭し、四年十一月書を上つて時事を說く、公之を容れ竟に氏を拔擢して而して大に爲す處あらんとす、六年六月公江邸に在り親ら書を裁して氏を召す、氏將に發せんとするや、公病に罹るを聞いて果さず、七月遂に薨ず、公嘗て江邸に在るや、近臣に謂て曰く佐治に小島愼なるものあり、老成碩儒、識見甚だ高しと、氏以爲く君臣の遭遇古より難矣、今や賢明有爲の君に逢ふ、而して則ち斯くの如し、痛悼措く能はず終に病を醸して起たざること二歲。

安政元年二月藩主信民公立つ、文久元年公老臣某をして氏をして柏原に居を移さんことを乞ふ、尙聽かず乃ち公躬ら臨んで親しく之を解諭せんとす、氏乃ち意を決して藩に赴く、此時に當り幕府失政、外夷猖獗、內憂外患天下惙々たり、而して藩債舊の如し、氏再び書を上つて時事を極陳す、三年八月祿百石を賜ひ用人上席に列して國政に參與す、元治元年公卒す、慶應元年信敬公立つや、氏を以て顧問に備ふ、されば當時首鼠兩端各藩去就に迷へるに際し、獨り柏原藩が叅に方向を定めて中國に於ける大義名分の首唱者たりしもの一に氏の方寸に出づるによる、其後藩制を定め藩債を償却し紀綱振張して、亦前日の比にあらざるに至りしもの、全く氏の力に負ふ處大なりと云ふ、公又氏を以て師傅に禮し執政の上に班

氏名は友風、字は士雲、玉堂、又環山と號し、通稱敎之助と稱す、氷上郡牧山小畑の人、明治十四年沒す年七十四、四世の祖玄鄕名は重厚、字三意、桂谷と號す、後遯窩と稱する人、幼より學の志篤きも家貧しくして其志を就すを得ざりき時に近村若林村に若林文平霞谷と號する人あり、此人中江藤樹の學を喜び、東都に遊び知名の師に就きて大に修むる所あり、仙臺侯之を聘せしも辭して就かず、歸りて鄕黨の士に授く、之れより退畊子と稱す、此人書に巧なり（仙臺通寶の文字を書きたりと傳ふ）玄鄕の志に感じて之を敎へ、後資を與へて京師に遊ばしめ、傍ら醫を學ばしむ、學就り歸りて醫を業とし、傍ら書生を敎へ靜齋堂と號す、彦藩龍公美と好し、公美の靜齋堂の記あり、其子桑園家學を襲ぎ四方に歷遊す尤も詩に巧みなりしと云ふ、其子文剛雨鼎と號し、又雪窠と號する人篤學の士にして廣く四方に遊び有道の士に就きて研學し父祖の學を大成す、此より家聲大に揚り、近畿知名の士と往來絕ねざりき、殊に管茶山と交り篤し（當時雨森外數氏來遊して牧山八勝の作詩あり）孤芳園詩稿、紀の崎紀行等の遺書あり、環山は其長子なり、弱冠より京師に遊び、猪飼嚴垣の門に入りて學を修む、業就りて鄕に歸り父祖の業を襲ぎて醫を業とし、傍ら讀書を授く、遠近來遊するもの常に數十人後學半館（私塾）を興し、專ら敎養に努む、粟賀池田侯氏を



# 故植木環山氏略歷

聘す、氏官遊を好まず事に託して之を辭し、二子退藏をして代りて仕へしむ、氏人と爲り溫雅人に接する城壁を設けず、苟くも來り學ぶものあれば諄々誨へて倦まず、比隣家に愚鈍なる者あり、氏每夕之を伴ひ歸りて之を敎ゆ、家人等其敎ゆるの效なきを笑ふ、氏曰く否天下我家の葛石に瞅くものなし慣れざればなり、之も亦慣れしむるに在りとて、誨へて倦まざりきと云ふ、亦以て人を誨ふるの一斑を窺ふに足る、氏詩を嗜み其稿十數冊あり、嘗て湘煙女史此地に歷遊せし時、此稿を見て大に賛賞し、之を成島柳北氏に批評せしめ梓に上さんことを誓ひ、齋して東京に歸りしが、不幸にして燒失の災に罹りしと云ふ、今纔に遺稿中に殘れるもの數十首あり其中に就き數首を錄す。

梅

谷口春回早、風寒花綻遲、朝陽熨氷雪、潭碧鑑瓊委、奇格月中見、眞香馬上知、何人橫玉笛、淸亮數聲悲。

溪口之橋屋後籬、梅開何物不新奇、夕陽影裏憐春淺、流水聲中待月遲、林下香魂凝化夢、風前雪魄散成基、三更淸澈山樓笠、恰及幽人酒醒時。

菊

不爲君子佩、況當勢家門、風露潔淸氣、自然及疲根。

竹

檐外數竿竹、山窓夏有陰、風來時奏韻、是我沒絃琴。

氏在世中門人等相謀り文墨碑を建つ、氏卽ち左の詠を刻せしむ。

廿五伍寒山荊棘叢、參差翠葉飛蓑々、獨將頑石同此操、穆々終全君子風。

氏又和歌を好み隆正に就きて斯道を學ぶ、豐岡縣の頃福知山支廳典事三浦某此地に來遊し、氏を延ひて和歌をもとむ、氏辭すれども之を強ふ、氏よりて筆を把りて

斧の音の絕ねし谷間はきりこめて、ゆふへ小暗くましらなくなり

の一首を詠じて與へしと云ふ。

田家冬月

引捨てし山田のなるこ風さへて冬は月のみもる庵かな

落たる桐の葉にきり〳〵すのうた

庭のおもにおつる一葉を名にしおふおのか秋とやきりぎりすなく

書は始め天眞に學び後義之を習ふ筆蹟脫俗はしく掛物扁額等需に應じて揮毫せしもの多し。（門人丸岡寛三郎氏寄稿）

## 發明家

# 故阪東直三郎氏略傳

（多紀郡篠山町）

凡そ物の發明には必ず大なる苦心と艱難の伴ふものあり、而して之を成就せんとせば須らく堅忍不拔の精神と且つ高遠なる思想とを以てせざるべからず、況んや實利實益を伴ふ大なる發明に於てをや、是れ利を眼前に爭ひ、公益よりも私利私慾に走り、加ふるに克己堅忍の精神に乏しき我國人に未だ大なる發明家の輩出せざる所以にして世人の共に痛嘆禁せざる所たらずんばあらざるなり、卽ち此寂寞寥々たる我發明界に於て、艱難苦闘幾星霜、百敗千挫に打克ちて遂に阪東式木綿調帶の發明を爲し、我工業界に向て多大の貢獻を爲したる故阪東直三郎氏の功績は、以て其生國丹波の地を飾るに足るべき人物に非らずや。

氏は篠山藩士、嘉永壬子年二月を以て生る、幼にして蘭式藩兵所に入り、文武の學を修むること多年、後ち阪東家の嗣子となり、或は京都に出で又は東京に上り、種々の藩役を勤め明治四年の廢藩と共に篠山町に歸住す、間もなく神戸に出でて天下の商機を探り、尋ねて大藏省御用掛となりて稅關に奉職し、後ち鄕里に敎鞭を執り、又染色業に留意し、諸種の洋藥を求めて研究を積み、資を投ずること多かりしと雖も終に良果を得ず、又或時は有志と計つて自由舍なるものを創立し努めて靑年の敎養に任ずると共に、盛んに自由民權を唱導して廣く全國の志士と氣脈を通じ、或は各所に政談演說を開きて民智の啓發に力め、或は民業の發達を圖り、又店舖を神戸に設けて自ら貿易を營み、時には輸入品の防遏を企てゝ自ら種々の事業を起し、困憊苦境に陷つて具さに艱難を嘗めり、後ち宗敎問題に由て上京し、反對者の迫害を意とせず、困厄と戰ひ、其熱烈至誠は遂に當路者を動すに至り、盛名都下に振へり、而して氏が木綿調帶に一身を投じ、遂に阪東式調帶を大成するに至れる決心を固めたりしは、實に此時に在るものゝ如し。

今阪東氏の調帶發明と且つ之を完成せしめたる來歷とを繹ぬるに、足利の機業家須藤定平なるものあり、歐米を視察し來りて一工夫を凝らし、明治二十二年其機臺に特許を得て日本木綿調帶會社の設立を爲したりと雖も、當時未だ創始研究の時代に屬して其製品には缺點多く、會社の維持存續の難きに方り、偶々阪東氏は之を見て、若し其缺點を補ふに於ては斯業の將來最も有望のものあるを察し、且つ國家を利すること鮮少ならざるものあるを思ひ、一片の俠氣押へんとするも禁じ難く、自ら家資を擲ち、織機の精通者又は織方に新工夫を有する者等を集め、須藤を保護誘掖して大に劣むる所あり屢々挫折困厄に遇ひ、其目的を達せざりしと雖も、更に屈せず、明治二十四年に至り、獨力其事業を機承して之が經營を重ねり、然るに再び失敗して最早獨力の經營に困難なる事情あり、此に於て組合組織と爲したりしと雖も、種々事情の勃起するありて容易に成功の域に達せず、仍て一層奮勵勇氣を皷舞して四方に運動し、明治三十年有力者の後援を得て東京深川區に木綿調帶合資會社を設立せり、然るに其製品は尙不完全を免がれず延伸甚だしく且つ耳切れ又は切斷の憂ひありしを以て、苦心慘憺の末第一着に織機の改善に其全力を注ぎ專ら織方に工夫を凝らし、種々實驗の結果大に自得する所あり、全く舊式の機臺を廢し、一切の業務を改革して其改良品をば各工場の試用に供し、心竊かに完全を期したりしに、意外にも又々失敗に歸して失望の淵に沈みしを、不撓不屈の勇を皷して猛然決意更らに一層の困苦に堪へ、其目的を達せんが爲め自ら會社を退き、單獨經營の一工場を本所區に設けて專ら改良研究に心を潛め、百方考案研究の末遂に明治三十二年に至りて完全なる調帶を作製し、以て專賣特許を得たりしと雖も、尙之に滿足せず、之を一層の良品と爲し、明治三十四年に至り更らに專賣特許の改訂登錄を得て其素志を貫徹するに至れり、顧ふに氏が阪東式木綿調帶の發明に志して以來二十有餘年、幾多の辛酸刻苦を嘗め、其織方に工夫を施した

ること七回、塗料の完成に數年を費し、試驗費の積算實に拾壹萬餘圓に達し、事業を起して蹉跌すること前後十數回の多きに遭遇したりしにも拘らず、堅忍不屈遂に克く其目的を達成したるは、縱令其間朝野貴紳の聲援助力を得たるものありと雖も、全く氏が忍耐克己奮勵努力の致す所たらずんばあらず、而して氏の甥に水澤五十馬氏と稱するものあり、當時敎育家として敎鞭を執りつゝありしが、阪東氏の發明事業をして其終りを完からしめんと欲し、學校を退きて自ら奔走劃策し、遂に明治三十九年瀧川辨三、川西清兵衛等諸氏の贊成出資を得て阪東式木綿調帶合資會社を兵庫の地に設立し、氏は其支配人となりて盛んに經營を爲しつゝあり、而して其製品は今や社會一般の信認を博し、陸海軍各工廠の指名品となり倘各地の大工場等は何れも之を使用せざるは莫く、好評嘖々たるに至れり。



斯くて至誠一途國益の爲に盡瘁したる阪東氏は、明治四十二年二月十七日吳海軍工廠に於ける世界無比の調帶試驗に臨み、誤て一命を殞し、其事業の犧牲となりて果てたるは、戰國の將士が君國の爲め戰場の露と消えしが如く、其英名は阪東式調帶と共に永く後世に赫々たる光りを放たん、而して斯る發明家を出したる丹波の地は又以て天下に矜るに足らん。

前篠山町長

# 故森本莊三郎君

（多紀郡篠山町）

氏は文久三年六月生る、家は地方の名門にして、先代某吳服商を營み家道頗に物與せりと云ふ、氏幼にして聰慧學を好み、同地の耆宿法貴發氏に就いて學び造詣淺からず、性溫順にして篤實其清廉なる人格は先師の薰陶に負ふ處大なりと云ふ、夙に志を公共に致し、同地方が薄利なる農業の能く經濟を支持するに足るべき副業なきを慨し、明治十九年蠶業取締規則の發布せらるゝや、卒先組合を創織し、自ら組長となりて大に斯業の發達を奬勵し、其後擴產社を創設して桑園の開拓に勗め、或は養蠶傳習所を設け、敎師を聘して郡內の子女をして養蠶技術を傳習せしめ、二十二年に更らに進んで製絲場を設立したるが如き、蓋し此時に於て多紀郡の蠶業は頗に一大發展を劃し、今や產額の大と品質の優良なる縣下有數の部に屬するに至れるもの、氏の力に負ふ處多く、一面製紙事業の有望なるを看取し、三十三年共同製紙場を設け、自ら範を垂れて一般に奬勵したるの結果は、大に斯業の勃興を促したるが如き、地方產業の發展に資益したる功勞頗る大なるものあり、氏は又地方金融の機關として有志者と共に、百三十七、南丹銀行を創立して取締役に擧げられ、笹山電燈會社の重役となり、三十三年三月には縣會議員に選まれ爾來數次其選を重ね、二十七年七月衆議院議員補缺選擧に當選し、三十六年再選せられ、縣下自由黨の錚々として中央政界に重きを爲し、傍ら地方敎育の發達に意を濺ぎ、鳳鳴義塾の今日ある氏の力に負ふ處多く、されば盜潛主青山子爵は義塾の擴張に就いて氏の勞を多とし、紋羽二重地竝に銀盃を贈り、或は篠山聯隊の設置に就いては奔走至らざる莫く、曩きには篠山町政の紊亂するや、氏の力に俟たざるべからずとなし、推されて町長となり、町政の刷新改革を斷行したる而已ならず、學校基本財產の造成を圖り、校舍の新築は縣下の模範と稱せらる、其他同地方の經濟を維持するに與つて力ある釀造技術者竝に出稼勞役者の風紀の改善と技術の向上を圖らんが爲めに釀造業者組合を設けて之れが統一に努め、又交通機關の設備等、身を挺して地方公共に盡瘁したる功勞は永く沒却すべからざるものあり、不幸病魔の胃す處となり療養怠りなかりしが、藥石效なく本年夏溘焉として白玉樓中の人と化せり、されば同町民は哀悼措かず、氏が生前の功勞を頌して町葬を行ひ、會するもの數千人の多きに及ぶ、死して餘榮ありと謂つべし。

氏人と爲り高雅淸廉國士の風あり、書畫骨董に趣味を有し而かも技術よりも人格に重きを置き、例へば維新の元勳南洲甲東、松菊、春畝を初め其他國士烈士の揮毫を蒐集し、以て精神を鍊磨しつゝありたるが如く、心事公明にして小事に拘せず諄々として說く處人をして欽慕に堪へざるしむるものありしが、今や則ち亡し悲哉。

兵庫縣人物史　波部本次郎君

多紀郡農會長
百三十七銀行頭取

# 波部本次郎君

（多紀郡日置村）

氏の先は淀山の城主波々伯部少貳藏人房光に出づ、考祖六兵衛光義は篠山の城主青山山城守に仕へ、姓を改めて波部と稱し、現代の氏に至り實に二十一代、家系連綿として今日に迫べり、先代六兵衛氏は大里正を勤め、氏も亦た相並んで里正の職に擧げらる、以て如何に鄉閭に尊信せられつゝありしかを知るに足るべく、維新後廢藩置縣とゝもに、豐岡縣を置かるゝに當り、擧げられて大鄉長となり、其後二十一大區長を命せられ、地租改正委員を兼ね、十二年縣制の發布を見るや、輿望を荷ふて縣會議員に擧げられ、又同年國立銀行條例の制定せらるゝに方り、同志と共に百三十七銀行を設立し、頭取の要職に就けり、其後同行の組織を株式に改むるに及んで、又復た衆に推されて頭取となり、創業經營、以て三十年間の歲月を閱し、行運の隆昌日に益々昂り、地方財界の重鎭として推さるゝに至つた、縣勸業會幹事、郡勸業會長、農會長、農工銀行の發起人として監査役となり、三十三年森林會議員に擧げられたる等、地方公共の事、一として氏の手腕を勞せざるは莫く、また以て其德望の如何に大なるかを窺ひ得べきと共に、功勞永く沒すべからざるものがある。

氏は少壯勤王の志に厚く、彼の平野國臣等の志士が、生野に事を擧げんとして、志士の一人本多素行が虛無僧に裝ひ、遍く山陰地方を內偵し、篠山藩の行動を覘はんとするや、地方大里正の照票なきに窘しみ、氏に事情を披瀝して懇ふる所あるに會し、氏は自己の管領及び他の管領をも說きて路票を與へしめ、難なく志士の使命を果さしめたりと云ふ、また維新草創の際西園寺侯が、鎭撫使として山陰道を巡察し、丹波



龜岡より篠山に入らんとするに莅み、當時佐幕派の篠山藩が如何なる行動を執らんも測りがたく、警戒ヲサ〳〵怠りなく此時に當り氏は日夜奔盡して鎭壓に力め幸に事なきを得たり爰に於てか當時侯は氏が勤王の志に厚きを賞して、途次氏の邸に臨みその功勞を諒とせられたるが如きは、家門の光榮として子孫に誇るべきものであらう。

されば氏が勤王の志に厚きは移して以て地方の開發策となつて表はれ、居常人に語るらく、多紀郡の地、由來山陰山陽の背嶺に位し、山岳重疊、交通隨つて不便を極むるより、工業開けず商業振はず、地方の經濟を支持すべきものは唯夫れ農あるのみと、氏はこの見地より、地方農村の發展を圖るべく、農事の改良、牧畜又は養蠶の改善に努力奬勵至らざる莫く、更らに郡農會長として指導頗る懇到を極め、提撕機宜に適し、同地方產業の發達に貢獻する處頗る大なるものがある宜なり三十二年十月藍綬章、四十年四月紅白綬有功章を授けられ、以て氏が多年公共の爲めに將た農業振興の爲めに、盡瘁したる功績を賞せられたり、若し夫れ地方產業史を編するの日あらば、氏の如きは實に特筆して大書せらるべき偉人、恩人たるを失はず。

氏資性寬厚にして篤實、氣品高朗、人に接して些の圭角なく、春風堂に滿つるの觀がある、地方の門閥家といへば、迂愚の標本の如く冷罵を受けしものが、偶々實行家たり併せて經綸家たる氏の如きは、門閥家のレコードを破りたるものにして、地方稀に覩る大器大材である、今や齡已に六十有九、尙ほ鑛鑠として壯者を凌ぐの概あり、同地方の長老として德望一鄉に洽き名聲赫々として全縣に輝いて居る。

長男文太郎氏もまた嚴父の溫醇玉の如きに肖て、氣品の高雅なるに加へて、謹厚人に下るの美質は、人の稱して以て措

## 郡會議長　小林常太郎君

（多紀郡古市村）

多紀郡の素封家として波部本次郎氏を識るものは、直ちに小林氏が同じく素封家として、而して德望家たることを聯想せざるものはない、氏は家農を以て業とし、代々里正の職を擧じて令名あり、少壯戶長に擧げられ、町村制實施に伴ふて村長に推され、身を挺して村政に力を致し、只管農村の發達に貢獻し、後ち衆望を負ふて縣會議員に選ばれ、その穩健篤實の議論は、地方政治界の中心力として推重せらるゝに至りき、多年郡會議長の職に在りて重きを爲し、指導宜しきを得節制機に適ひ、同地方の自治力をして、倍々鞏固の地盤を樹てしむるに至りしもの、一に氏の力に俟つもの多かりしは、人の認めて以て多とする所である。

氏は曾に公人として公職に殉ずるを以て足れりとなさず、かざる所ろ、次權六郎氏、四十年京大法律科を卒へ、曩に大阪地方裁判所に判事試補たりしも、今は判事に陞任して富山地方裁判所に在り、以て大に將來を囑望せらる。

地方の實力を增進するは之を實業の力に俟たさるべからずとなし、曾て古市銀行を創立し、引續き頭取として其經營を司どり、以て地方金融の緩急を調節し、低利資金を融通して大小事業の運行に資益し、一面地方農民に對して低廉なる消費物を供給せんが爲めに、食鹽、石油、肥料の販賣を目的とする合資會社を設立して、公共的の經營を爲し、殊に多紀郡の地は多くは農村部落にして播種收穫期を除ける農閑にありては、遊惰安逸に流るゝもの多きを慨し、農家副業奬勵の目的を以て、織物工場を設け、農民の子弟を驅つて機業を傳習し彼等に職業を與へて勞働の神聖を知らしめ、勤儉力行の美風を養成し、以て積極的地方の發展に盡瘁しつゝあるが如きは如何に氏が公共の志に厚きものあるかを窺ふに足るべく、さ

れば今や各地到る處に農村荒廢の聲を聞かざるなきの時に當り、氏の如き人物が地方に存在することは尚に意を強ふする所以である、氏は又同地方稀に見る進取的の人物にして、曾て多可郡に於て銅山を經營し大に資產を增殖したと云ふことである、今や多紀郡の資產家中に一頭地を抽き、而かも勤儉素朴毫も矜驕の態度はなく、一倫夫の態度を以て世に處しつゝある處ば欽ずべき人物である。

# 柏原町長
# 柏原銀行頭取
# 小谷保太郎君

（氷上郡柏原町）

氷上郡の土豪田艇吉氏と共に、柏原の名門として夙に里人に膽仰せられつゝあるものは小谷保太郎氏である、氏の先は赤松圓心の後裔神足久右衛門政重に出で、政重は織田信則、信勝に仕へ、信勝逝去後慶安三年柏原町に歸農したものである、後姓を小谷と改め、宗本家は小谷九郎兵衛と稱し、氏は小谷佐太郎を以て祖となし、代々相繼いで大里正を勤め、醬油釀造を以て業とし、里人の敬仰淺からず、當主保太郎氏は少壯にして家督を繼ぎ、地方有爲の材幹を以て稱せられ、早くも已に一頭地を抽くに至つた。

田艇吉、土田紋治氏は同鄉の人たると共に親族の關係である、爰に於てか氏は兩氏を說き、地方經濟界の振興を圖らんが爲めに柏原銀行の創立を企て、創立後土田氏を頭取に推し氏は之が支配人として行務を幹け、土田氏の歿後其後を紹ぎて頭取に擧げられ、用意の周到にして堅實なる經營は、行運益々發達して今や同地唯一の金融機關と稱せらる。

氏は又町民の輿望否みがたく、柏原町長の職を諾し、町政の刷新改革を斷行し、自治體の發達進步に貢獻する處尠なからず、其他種々の名譽職を擔ひ、處理指導時宜に適し、公人としての天職を完ふし、田氏大阪轉住の後は、地方のこと大小となく、一に氏の指導劃策に俟つものゝ如く、多數町民の欽仰措かざる處である。

氏は性溫良にして洒脫の質、居常書畫骨董に趣味を有し鑑





識亦高く、實際に伴はざる虛名を厭ふこと蛇蝎の如く濁塵と相容れざるの風がある、されば名利の爲めに憧憬せず、自ら村夫子を以て任じ、華奢に流れず吝なるにもあらず、圓滿なる紳封の旦那樣たるに恥ぢぬ。

氏の夫人は田艇吉氏の令妹にして、道に嚴格なる家庭に馴養せられ、女大學的の良婦人たりしが、不幸にして一昨年歿しぬ、二女あり何れも才媛を以て稱せらる、長女富貴子は艇吉氏の次男哲氏を迎へて嗣となし（哲氏は田艇吉氏の項に紹介せり）次女小秀子は曩に京都高等女學校に學び、拔擢せられて皇后陛下臺臨の際、御前講義を披露するの光榮を得たりと云ふ。

# 縣會議長
# 中川幸太郎君

（氷上郡谷川村）

多紀氷上郡は縣下の一小部分に過ぎざれ共、此處を根據として縣會に憑り雄を稱した人物が比較的に多い、曩には飯田法貴、田艇吉あり、今又中川幸太郎氏によりて更らに光彩を放つて居る。

由來氷上郡は政友會の根據地にして、舊く自由黨時代より勢力は扶植され、圀郡殆んど同派の繩張りに屬して居つた、卽ち中央政界に名を爲せる田艇吉氏の如きも、同郡を立場として志を成したものである、然るに單り中川氏は之に抗して進步派の黨旗を飜へして、善戰善謀の士を以て、地方の有識者に欽仰せらるゝに至つた、而かも氏が門地、財產の屈强なる政戰の利器は、その策戰上の利便及び地盤を牢ふする上に於て、有力なる堅牢利兵たりしに相違なしとするも、又以て氏が政治上手腕の凡ならざるを知ることが出來る。

氏は三十一年縣會議員に當選し、爾來數次選を重ね、現に議員中錚々の人物を以て目せられ、前期の役員選定に方りては、副議長は黨派勢力分配として、從來市部議員中に擧ぐる慣行を破り、殊更に氏の爲めに之れを郡部に奪ひたるが如き又本年の改選に當りては遂に推されて議長となりぬ、以て氏が政治上に於ける成功の分量と、勢力の牢固たるを窺ふことが出來る、氏はまた自黨に勢力を有する而已ならず、敵黨にも重視せらるゝの風がある、曾て有馬三田間の縣道問題、又は柏原の郡廳舍改築問題が、政友會の黨略問題として、極力自黨の勢力を樹てんとするの時、氏は進步派の對抗政策を願みず、却つて敵方なる政友會の政策に同じ、幹部連の牽制をして何等の效なきに了らしめたるが如き、氏が公平なる見地正大なる主持は、地方の興廢に關する公案を以て、偏頗なる政黨政派の好餌に供せしめず、飽まで公人としての守節に忠なるものとして、氏が襟度の大なるを稱するに足るべく、蓋し政治家の態度は公明ならざる可からず、氏が政黨繫累を離

れて以て重要なる地方問題をして一政派の黨略に用うべきに非ずとなし、之が犧牲を免れしめたる如きは、滔々たる政客が唯だ自黨あり自己あるを知つて、絕えて天下あるを知らざるに比して、洵にその節制と雅量に推服するに足るであらう。

## 篠山町長　服部雄紀君

（多紀郡篠山町）

政治家の目的は狹き意味に云へば立法府の議員なれ共、廣き意味にて云ふときは、國を善くすることは總て政治家の任務である。然るに我國人動もすれば謬見誤想に驅られ、縣會議員、代議士たるにあらざれば、政治家として國家を經綸する能はざるが如くに思推し、甚しきに至りては、抱負なく才能なく、虚榮の爲めに政治家に列せんとするものが甚だ多い然れ共國家の根底は自治體にある、されば自治體にして健全に發達すれば國家は期せずして興隆すべく、自治體の制裁盛んなれば自から社會を改善することが出來る、例へば土佐の義民村は某人の德望によりて自治制裁が行はれ、幕末に至る迄一人の罪人を出さず、偶々明治初年一人の罪人現はれ罰金刑を課せられき、而して裁判官より罰金を納め謝罪して歸村せんことを申渡すや、此罪人は村の名譽を傷けんことを慮れ歸宅することを拒んだと云ふことである、此を以て見るも、自治體の制裁力が、社會の改善に及ぼす力の如何に大なるかを知るべきである、されば經世濟民の事業と云ふは必ずしも代議士となり、或は大臣たらずとするも、一町村の首腦者たりとも誠に自治制の長所を發揮することに努めたらんには、直に以て世の模範となり、滔々たる洪水大潮の如き頽風汚俗を山中の一部落によりて堤防し、其感化に依りて、日本帝國の元氣を維持することが出來る、果して然らんには此人の功は國務大臣にも讓らずと云ふべきである、然るに近時政治家の風潮を見るに徒らに空理空論に流れ、退いて實行を圖らんとするものなく、甚しきは自己の一身一家をも顧みず、自治體の改善發達抔に腐心するものがない、此時に當り故森本莊三郎、竝に氏の如き才幹ある人物が、篠山町長として自治政の爲めに盡瘁しつゝあるは、大にしては國家の爲め小にしては地方の爲めに大に意を強ふするに足るべきである。

氏は篠山藩士鴻儒法貴發氏に師事して、大いに得る所あり而して最も法貴氏に私淑する所多かりし一人である、法貴氏は尋常一樣の學究先生に非ずして、實に非凡の識見を有し、慨世愛國の高士として、敬虔の中心とせられた人である、曾て進んで縣會議員となり、縣政の爲めに竭す所あらんとせしも、學德併せ高き彼は、滔々たる俗界に容れず、正大の議論公明の心事は、偕に諮るの徒なく、彼は徒らに鷄群の一鶴として、幾多凡庸の輩に敬遠せられたりき、二十五年第一期國會開かるゝに方りては、推されて代議士に擧げられたるも、不幸病魔の襲ふ所となり、竟に議會に列するに至らずして歿しぬ。

服部氏は卽ち第二の法貴氏とも稱すべく、其性格において理想において、其薫陶に負ふ處尠からず、氏は恩師法貴氏の斃るゝや、師の平生の志に酬ゆべく、政界に奔勞すること多年、竟に一方の勢力を贏ち得て、地方政界の中心力とし重視せらるゝに至つた、而かも氏の性格は餘りに透明にして、所謂清濁併せ呑むの推量に乏しく、單に批評家を以て任じたりしが、寧ろ實行家たらんことを期し、退いて地方の自治政に干與し、之が改善進歩に力を盡ぐは政治家の本領ならめと往年篠山町政の刷新を絕叫して、森本莊三郎氏を町長に推し自ら助役となりて刷新改革を斷行し、森本氏の信望と氏の手腕が相俟つて、町政の上に一新生面を開くに至つた、森本氏の歿後町長に擧げられ身を挺して盡瘁し、多紀郡の地が單に米產地たるの外他に何等の產物なく、今後の經濟を支持する上に於て、大に腐心しあるが如きは、抱藏の淺からざるを察するに足るべく、態度あり見識あり、以て同地方の代表的人物たるに恥ぢぬ。

## 私立鳳鳴義塾々長　園田定太郎君

（多紀郡篠山町）

鳳鳴義塾は篠山町に在り、舊藩主青山子爵が藩の子弟を敎養するの目的を以て、明治十八年元の藩校振德堂を擴張して之を鳳鳴義塾と名づけたるもの、丹波に於ける唯一の學堂たり。前塾長を一瀬氏と稱し義塾の發展に功勞尠からざりしも、明治四十一年遂に死亡し、當時岡山師範學校長たりし園田定太郎氏は、卽ち其後を繼いで現任塾長となり、銳意子弟の薫養に努力しつゝあり。

氏の生は味間村明治二十二年高等師範學校を卒業して沖繩

師範の敎諭に任ぜられ在職四年、二十六年愛知師範に轉任し三十一年石川師範に移り、其翌三十二年には福岡師範學校長に任ぜられ、三十九年更らに岡山師範學校長となりて在職中會々一瀬前塾長の死亡に際し、廣く後任者を物色して適任を得ず、衆望期せずして園田定太郎氏に集り、強いて氏を立たしめて鳳鳴義塾の新塾長たらしめ、自由に其手腕を揮はしむるに至れり、而して氏が塾長の任に就くや、從來武育に偏重せる敎育の方針を改め、時運の趨勢に應じて社會の八方に志す子弟の便益を圖り、一般の中學敎育に準じて敎育を施すに至れり。

抑も氏は世間普通の敎育家と異り、頗る熱誠に富み、隨て子弟を薫化するの力又尋常ならざるものあり、而して敎育家を以て自己の神聖なる天職と爲し、鞠躬盡瘁以て幾多の子弟を薫陶しつゝある傍ら、其四人の弟へは悉く高等敎育を施し次弟辨次郎氏は現に工兵中尉となり、次ぎは謙三郎と云ひ東京高等商業學校を卒業して住友銀行にあり、愛之助氏は高等師範を卒へて目下東京高等女子師範の敎諭となり、末弟榮五郎氏は昨年法科大學を卒業して現に廣島遞信管理局に奉職す氏は之を以て實地敎育を試みたるなりと言ひつゝあるが、以て其兄弟友愛の情滾かなるものあるを知るべく、而して氏が又自ら質素を守り、其收入の一半を割いて多數の弟を敎育し以て悉く社會有爲の人物たらしめたるが如き、他人の到底企て得べからざる所たらずんばあらず、以て其人となりの一般を窺ふべきに非らずや、嚴父は藤右衛門氏にして巽齋と號す其幼少の頃五十丁の里程を遠しとせず、日々篠山藩校に通學勤勉二十三箇年、遂に漢學者として其聲名を謳はるゝに至り現に丹波の碩儒を以て人之を許しつゝあり、斯くて一家五男悉く其意氣を享けて社會に顯揚す、又偶然なりとせんや、而して世人の多くは氏が一家一門の譽れを羨みつゝありと雖も余輩は鳳鳴義塾が園田氏の如き眞の敎育家を塾頭に得たるを以て之を羨み且つ丹波地方の爲めに賀せずんばあらざるなり

## 百三十銀行專務取締役　樋口達兵衛君

（多紀郡篠山町）

西洋の諺にも「榮譽は高貴の條件に附隨するものにあらず各其力を職務に專らにすれば榮譽は其中にあり」と言つてあるが兎角我々は此敎訓を忘れ、榮譽の爲めに心の平和を破り動もすれば虛名に憧がれ、實際を輕ずるの嫌れがある、併し實際の價値以上の名を得んとするは不自然の行爲で、實の伴はざる名は卽ち虛名である、而かも名を求むるに急なる人は己れを廣告するに苦しみ、如何なる方法を以てせば自己の名を世間に知らしむることを得るかと、日も亦足らぬ心地して其名を得る爲めに奔蕩する有樣は傍から見ても笑止千萬である、今や此弊風最も甚しく、例へば國民の選良を以て任ずる立法府の議員が役員の爭奪に主義主張を拋ち、實業家は會社重役の肩書多からんことを誇り、甚しきは功を百年に俟つてふ學者先生が學位を貪らんとする世の中である、而已ならず近時成功談と云ふこと世に行はれ、政治家なり、金持なり知名の人の經歷談話が新聞雜誌に載せらるゝこと多きが故に、青年の心は多くは浮足となり、自己を忘れて虛名に馳せ、遂には家を破り身を滅すに至るものもあるやうである、殊に兵庫縣は一般に此流弊が甚しく、縣會議員、代議士抔の敗殘者は幾百人なるを知らず、然るに多紀郡の人士が比較的健全にして、未だ失脚者の多くを見ず、又青年者流にありても、自己の安全を慮りて、喰損ひのなき軍人となるか、或は實業界に入りても忠實に勤めて居る有樣は、余輩が同地方の爲めに悅ぶ處にして、就中樋口達兵衛氏の如きは最も實際を尊ぶ健實なる人物である。

氏は幼少の交鳳鳴義塾に學び、帝國大學に入るの目的を以て東京に遊學して居つた、然るに單に大學に入つて規則的の學業を修めんよりは、寧ろ人格ある人士に就いて實際の學門するに若かずとなし、橫濱商業學校長某の人格を欽して、當時學士號を名譽の表章となせるもの多きに反し、其校格の低きにも拘はらず、奮つて同校に入學し、卒業後貿易に志さんとせしが偶々家政の碍ぐる處となり、歸鄕して家督を紹いだ



明治二十八年に共同貯蓄銀行を篠山に創立して之が經營を司つて居つたが、一地方に幾多小銀行の介在することは金融機關の使命を全ふする所以にあらざるを覺り、進んで百三十七銀行に合併し、其後專務取締役として今日に迫んで居る次第であるが、兎角聲よりも實際に重きを置く氏が堅實なる經營振りは、信用頗に加はり、同行をして今日の發展を來たさしめたる而已ならず、一面同地方產業の發展に多大なる資益を與へたと云ふことである、氏は又頗る貨殖の途に長じ、其相續以後に於て家產の增殖を圖りたること夥多しく、其實力は今や篠山町にあつて優に一頭地を抽いて居る、而かも自ら稻晦して之を表はさず、氏の知己親族すら其實力の大なること窺ひ知らぬと云ふことである、以て氏が如何に實際を尊ぶ堅實なる人物であるかゞ解ると共に、浮華に流るゝ當世に於ては珍しい人物なるかを察するに足るであらう、されば現在に於ける氏が行動は多少消極に流れつゝあるの嫌ひはあるが、併し抱負あり識見ある氏は何時迄も消極に推移するものではなく、他日必ずや地方公共の爲めに多大なる寄與を齎らすであらう。

# 篠山銀行頭取　齋藤幸之助君

（多紀郡篠山町）

篠山人士の氣風として翼を戢め爪を匿くしてお世辭的の人物多し、然るに洒々落々書生的の態度を以て世に處しつゝあるものは、獨り齋藤幸之助氏ならん歟。

氏は篠山町の舊家にして代々油の製造を以て業とし、里人の瞻仰淺からず、曾て神戸商業學校を卒へ、實務錬習の爲めに一時銀行業務に從ひたりしが、覇氣滿々たる氏は箇書推理平凡なる生活に嫌きたらず、更らに東京に出でゝ早稻田大學に入り、高尚なる政治學を專攻し、三十二年業を卒へ、希望を高所に標致して大に爲すあらんとせしが、偶々先考の喪に逢ひ、止むなく家庭の人となり、其後篠山銀行の頭取に擧げられ、百三十七銀行の重役となり、再び地方銀行經營者たるを餘義なくせられき、而かも覇氣抑へがたく、本年縣會議員の改選に當り、無所屬として國民派の神南國造氏と聞ひ、遂に失敗に歸したるは氏を知るものゝ意外とする處なり、然り其人格を比較せんか神南氏と同一の談にあらざれども、由來政黨の力は恰も宗教思想の團結に於けるが如く、自黨の爲めには候補者其人を辨別するの遑あらず、殊に篠山町が政友派の根據たるより、氏の中立は他日政友派に屬するものと思推し、國民派が最も應援に努めたるに引かへ、氏の人格は卑劣醜汚の運動を試み一縣會議員を贏ち得んが爲めに、自己の所信を沒却し能はざりしによるなるべし、然かも縣會議員の失敗によつて氏の人格を上下すべきものにあらず、されば年齒少壯、新敎育を受けて新智識に富み、口あり、筆あり、氏の將來は大に嘱望するに足るべし。

# 武庫、川邊、有馬之人物

## 舊尼ヶ崎藩　子爵　櫻井忠胤君

（武庫郡岡田山）

櫻井家の先を繹ぬれば、源經基七代、大炊助新田義重の裔松平左京亮親忠の二男、德川出雲守長親の後なり、其子大膳正信定三州櫻井の城主となり、姓を櫻井の松平と稱す、それより清定、定次、忠正、忠吉、家廣を經て、左馬頭忠朝に至る、忠朝は德川氏に仕へて屢々城を移し封を加へられ、慶長六年遠州濱松五萬石の城主となり、十四年江戸に於て暗殺せられ、其子幼少なるの故を以て所領を沒收せらる、後ち更らに其嫡子大膳太夫忠重に封邑を賜ひ、八千石より累次加封して、寛永十二年遠州掛川四萬石の城主となる、それより忠倶忠繼、忠喬、忠名、忠告、忠寶、忠誨、忠榮を經て尼ヶ崎四萬石の城主として、先代從四位子爵忠興氏に至る、維新後姓を櫻井と改稱し、當主忠胤子は其三男たり。

子は明治十四年七月十九日を以て生る、小字を善之助と稱し同二十八年家督を襲ぎ今の名に改む、曾て學習院に學び中等學科を卒へ、博物學に趣味を有し、現に武庫郡岡田山の別邸に歸住し、諸種の植物を採集して標本を作り、學界の爲めに貢獻する處多し矣。

## 伊丹長者　小西新右衛門君

明治維新は我國に於ける政治上の一大改革でありしと共に又經濟產業上に於ける大なる革新を致し、新舊の狀態今や全然一變して殆んど舊態を留めざるに至りぬ、隨て新富豪の盛に勃興を見たると共に、舊富豪の多くは沒落して其影を留めざるに至りしもの甚だ多く、往年の金權移つて新富豪の手中に歸すに至つた、然かも新富豪は要するに新富豪である、金の勢力はあるが、社會民衆の輿望はない、此に至ると舊富豪には無形の勢力がある、卽ち歷代潛勢の偉力には金も智識も

到底及ばない、況んや金權もあり、且つ潜勢力をも有する舊富豪に至ると其勢力や實に慓嘆すべきものである。

伊丹の小西といへば昔しは三井、鴻池などゝ打並んで我國に於ける長者と謳はれ、殆んど諸國大名を凌駕する勢ひであつた、何といつても兵庫縣には同家の右に出づる者はなかつた、否な兵庫縣のみではない、關西に於ては鴻池と相併稱して宛然二大王の存立したる有樣であつた、而して明治の改革に依て他の幾多の富豪は殆んど餘影を留めざる迄に落魄したるにも拘らず、小西、鴻池は依然として其大勢力を存續し、新富豪の上に立ちて社會の尊敬を受けつゝあるは、蓋し累代祖先の餘德にも因るであらうが、要するに其家礎の盤若として時代の變遷も之を動搖することを能はざりしに依るものであらう。

抑も小西家は遠く慶長年間に起り、爾來十三代二百三十年の古き歷史を有する家柄である、而して其富も亦一朝一夕に成つたものではない、之を聞く其始め川邊郡鴻池村に山中某なるものあり、大阪に移つて酒屋を業とす、卽ち之れ今の鴻池家の祖先である、然るに其二代目山中氏は偶然の事情より始めて清酒の製法を發明し、之を當時の酒造地たる伊丹地方に傳へて其れを醸造せしめ、自分は其販賣を司ると共に伊丹は其醸造本場となつた、從來の濁酒のみを飮んでゐた者が俄かに清酒が出來たので其需用が益々盛んになり、而して小西家は其醸造を以て家運大に發展するに至つたと云ふことである、固より之れ二百年前の話しであるが、小西家は既に其當時より酒の醸造家であつた、而して今日迄酒造業を以て一貫し、現今坊間に好評嘖々として上戶黨の愛好措かざる銘酒「白雪」は卽ち同家の醸造に係るものであることは誰れ知らぬ者はない、斯くて其家と其富とは實に古き歷史を有するものであるが、又其勢力と云ふものは素晴らしいものであつた、抑も伊丹の地は昔し德川幕府の時代に在つては近衞家の直轄領で他の藩領とは異なり、別に直接の執政者と云ふものが居らぬ故に小西家と尙同地の大塚家とが代々惣宿老と稱して宮家の代理となり、其領內の民を取締る執政者であつた、而して其權限は司法、行政一切のことを委任せられ、隨て權力の强大にして格式も亦甚だ高く、惣宿老といへば小なる國主大名の如きは道を避けて通ると云ふ有樣であつた、去れど小西家の代々は濫りに權に驕り又は富力を振り廻すやうなことなく、鄕人を愛することは恰も一家人の如く、代々德を以て往み、殊に先代新右衛門氏の如きは、頗る仁慈の思想に富み、時代の變遷に依て職を失ひ、窮民續出せしかば、氏は進んで諸種の產業を奬勵指導し、又小西授產場を設けて細民の爲めに職業を授け、病者あれば醫を迎へて之に治療を施し、又は不具者貧困者に對しては日々三食を與へ、爲めに當時同家の食堂には日々寄食するもの日に三百人を下らざりしと云ふ、以て如何に博愛仁慈の士であつたかを窺ひ知るべきである、而して氏は日本銀行監事の職に在つて其財界に於ける勢力も頗る大なるものであつたが、遂に三十九年に死亡して現主人新右衛門氏の時代となつた。

當主新右衛門氏は三十六年に法科大學を出で、後ち職を大藏省理財局に奉ずること一箇年、辭して鄕家に歸り、臺父の死後は一切の經營に任じつゝあるが、年も若く、未だ世態人情には通じて居らぬから、隨て世間の評判も到底先代の如くには行かぬ、固より氏の先代は稀世の慈善家であつたが、氏は新文明の敎育こそ受けて居るが、迚も臺父の遣り方は出來ぬであらう、而して近頃は往年臺父が地方青年者の武術敎練の目的を以て建設した道場修武館に師を聘して地方の青年者に擊劍柔術などを奬勵しつゝ自ら竹刀を把つて練習を爲しつつある、昨年歐米を漫遊して歸つたから新智識を得て來たであらうが、何れ氏が社會に活動するは今後にあると共に、氏も亦大に發奮する所なくてはならぬ、二弟あり一は壯次郎と云ひ、次ぎを愼藏と稱し共に東京帝國大學の法科に在學中である、去れば他日一家一門の更らに榮ね行くことも期して見るべきである。

# 稀有の隱德家

## 大江貞夫氏
## 大江芳松氏
## 大江市松氏

大江氏の先代は清兵衛氏で、其の配偶は加古郡氷丘村の內大野村の素封家荒木卓三郎氏の姉春子である、夫婦の間に遺された一人娘の歌子は才色兼備して貞淑の譽が高く、大江家の戶主として二十四歲の昨年迄祖母の手で養育され、昨年當主貞夫氏を河內から迎へ戶主の名實を讓られた、故清兵衛氏の令弟芳松、市松の兩氏は分家ではあるが、事實一體となつて本家を守り立てられる事十年一日の如しである、大江家を三角形で見るなれば貞夫氏が頂點で芳松氏と市松氏とが左右兩點を占めて居る、故に大江家を觀察するにはこの三氏を三位一體として論じなければならぬ。

### ▲酒造家としての大江家

酒造は大江家の家業ではあるが、餘り盛な方では莫い、其の造石高は四十三年度が二千六百四十四石に過ぎぬ、酒銘も著しく知られて居ない、この點に於ては遙かに兩嘉納、小網、泉仙諸氏に及ばぬが、大江家は酒造を以て樹立しやうとはせ

ぬらしい、併し比較的危險多き斯業の上に釀造販賣共に、曾て失敗のあつた事を聞かぬは珍とすべきである、蓋し遣方が地味なからである、確實なからである、危險多き營業も遣方によりては危險もなくなる手本と謂ふべきである。

## ▲銀行家としての大江家

大江家は株式會社御影貯蓄銀行といふを經營して居る、明治二十八年の設立で、資本金が五萬圓積立金が參萬四千圓預金が四十四年上半期の決算に四拾五萬四千圓を計上して居る株式組織とはいふものゝ、株式は一家の占有で實は合名組織と同じである、この銀行は世間並の銀行の樣に預金を貸付けて利鞘を覗ふのではなくて、自分の資金を貸付けて利子を取ると、自分の資金を公債株券に放資して、これを銀行の名義で所有することが主眼である、故に預金の吸收を焦らぬ、貸出の多少を恐れぬ、至極超然たるものであつて、而も內容は近眼者流の觀る所よりは、遙かに充實した、堅固な、奥床しい資庫である、信用の隆々として厚き事は論ずる迄も莫い。

## ▲資産家としての大江家

大江家が有數の資産家なる事は誰にも異論はあるまい、但し其の程度如何は世評區々である、處が人もし明治四十四年度御影町稅戶別割等級議定表を一覽せば蓋し思半に過ぐるであらう、卽ち特等が二名で、大江貞夫、嘉納治郎右衛門と列記されてある、其の二等が三名で、大江芳松、大江市松、安福武之助と列記されてある、此の等級が實明なる町會議員の公正なる議定に成つたものであつて見れば、本家貞夫氏がその富本嘉納氏と同等である事、兩分家がその富各安福氏と同等である事を思はざるを得ぬ、委しい數字を此に發表する事を憚かるが、大江家の富を打て一丸となさば富豪の淵藪たる武庫郡に於て西宮町の野田三藏氏の外能く比肩するもの無しといふに憚からぬ、況や大江家は可成的その資産を小さく見せその門戶を狹く構へて居るに於てをやである、又況や資産の增進の步合が他の富豪よりも甚だ多きに於てをやである。

## ▲教育家としての大江家

大江家を教育家といふては語弊があるが、教育に貢獻する事は夙の思ふ所に非ずといふべきである、御影町の幼稚園、小學校、師範の附屬小學校には幾多の玩具や、用品や、圖書が寄附されてある、又幾多の現金が時々に屢々寄附される、が受ける方に於ては寄贈者の心事を諒として一切之を公表せぬ又武庫郡內の十箇の小學校に每年壹千圓づゝ十箇年間圖書購入費を寄贈されてあるさうなが、此も右の理由で突止める事は出來ぬ、今茲に特筆せんと欲するは、夫の報德實業學校の經營一條である、故清兵衛氏は高等小學を卒業して後中學校商業學校に入る事の出來ぬ子弟を養成する爲め夙に簡易實用的の學校を經營するに大志が有つて、年々積立てられた資金が終に或る豫定の高に達したとやらで、本年師範學校北手の形勝の地を卜して新式の校舍を建築せられた、定めて大江商業學校と命名される事と思ひの外報德實業學校と命名し、櫻花を交叉した中に實の一字を配して徽章とせられた、嗚呼こ



れ眞に花も實もある遣方ではないか、而して校長は福井市立商業學校長として令名嘖々たりし羽生安久氏を聘し一切を擧げて之に任せられた、羽生氏は東京高等商業を卒業の後實業界に馳驅した事志と違ひ斷念して身を敎育に投じ今や育英を以て生命とする好漢である、其の大江氏の知己に酬ふべく夙夜に盡瘁して成績を擧げ來るは同窓の期待する所である、建築費設備費は四萬內外で足つた樣なが、維持資金として貳拾萬圓を用意してあるとの事、授業料を免除するは生徒を輕蔑するに當るとて若干の料金を收めしめるが退校の際何とか名をつけて全額を返却するといふ、行屆いたものではないか。

## ▲隱德家としての大江家

何某の隱居と門標を揭げる當代に、外れたる隱德家は幾箇も有る、否な顯はれむことを望む隱德家さへ少くない、吾が大江家の如きは萬綠叢中の一點紅である、日々の新聞に見る憐れな者に金壹圓づゝを惠まれる事も知る人は稀である、四十四年の夏常順寺で催された佐々木月樵師や曉烏敏師等の法話が大江家の佛事に代ゆる法養であつた事に氣付ける人は稀である、四十三年の大阪の大火にその名を公表せぬ約束で參萬圓を寄附したのを知る人はいと少い、町內の細民に每日半錢か一錢の掛込をさせて死去の場合に白米一俵、棺桶一箇、現金五圓を贈らるゝを喜ぶものはあるも此は慈善でも何でもない、掛金を返却するに外ならぬとの難有い口上を聞かば感激せぬものはあるまい、大江家は精々秘密にして居られるけれ共天に口無し人をしていはしむで端なくも吾等の耳にも入つた譯であるが、却て其の德を傷くる恐あるを以て今は多くを記さぬ。

されば大江家の家道を見聞するに質朴、謙遜、儉約、勤勉の結晶である、之に加ふるに限無き隱德を以てせられる、芳松市松兩氏の如きは堅く粗衣粗食を守り其住宅も簡朴を極はめて居る而して業務に出精せられる事はまた格別である、本家の貞夫氏も高等敎育を受けたる身を以て朝夕家の內外を掃除せられるといふ而して又內長幼の序を正して、恩儕用の者に普く、外謙讓を一貫して苟くも他の反感を買はぬ桃李不言下自爲蹊の諺に違はずして今や家名日に揚りつゝあるは偶然でない、蓋し積善の家餘慶ありとは大江家の謂ひであらう。

# 酒造家　嘉納治郎右衛門君

（武庫郡御影町）

酒は由來攝州の名產、伊丹の地は今や昔しの盛名なしと雖も、尙灘酒の勢力は天下を風靡し、我國に於ける酒造地として未だ此處の右に出づるものなし、殊に菊正宗の名は、人口に膾炙して津々浦々に至る迄で之を愛好せざるなく、實に天

下の一名物たるを失はず、而して其醸造家を嘉納治郎右衛門氏と爲す、去れば菊正宗といへば嘉納治郎右衛門を聯想し、而して灘の嘉納と云へば直ちに菊正宗を聯想せずんばあらず　嘉納家は七八代連續の舊家にして西攝の一大王國たり、其酒造業創始したるは萬延年間に屬し、今は實に灘酒造界の雄鎭たり、當主治郎右衛門氏は嘉永六年の生れ、幼名を百藏と云ひ、明治十五年家督を相續し、襲名して治郎右衛門と改む其當時に於ては家運未だ盛んならず、其醸造石數の如きも一箇年漸く三千石内外に過ぎざりしを、今は一萬五千石の多きに達し、家運亦た隆々として我酒造界を壓せんとするの概あるは、洵に異數の發展なりと言はずんばあるべからず、蓋し氏は事に當つて誠實誠意、正直を以て營業の大本と爲し、又自家處世の要道として固く之を守り、曾て背反せること無し是れ實に其信用を增大にし、其事業を發展せしめ、其家運をして益々興起隆昌ならしめたる所以に外ならず、而して明治四十年以來、形式上其事業を合名組織に改め、其基礎をして鞏固ならしむると共に、益々之を擴張發展せしめつゝあり、

## 德行家　辰馬悦叟翁

（西宮町）

勤儉力行は百德の基なりとは古聖人の云へる所であるが、由來人の最も行ふに難しとする所である、故に若し世に勤儉力行を以て終始を一貫した人ありとすれば、幷は頗る克己心の強き堅忍不拔の人物と謂はねばならぬ、今縣下在鄉の人物斯くて菊正宗の名聲は愈々高く、彌々盛、以て萬代不朽ならん。又明治二十八年御影銀行を創立し、爾來引續き之が頭取として經營常に機宜を制し、行務日に揚り、信用甚だ大、灘金融界の大動脈たるの觀あるが如き、實に氏が信用勢力の偉大なるものあると共に又其經營の堅實なるとに因らずんばあらず。

氏人と爲り溫雅悠揚として品性甚だ高く、風采態度の準墨にして自然に具はる權威を有し、人をして心服歸仰せしむるに足る、頗る書畫骨董を愛重し其所藏の富贍なる世已に定評あり、又公共慈善の志に敦く、毫も官僚に縁固なく、保護もなく、倚頼心もなき氏が、濟生會義金の募集に際して卒先應募したるが如きは其一例にして、其他人の哀を乞ふものあれば理非を別たずして之を救濟し、榮譽をねがはず、聞達を求めず、以て其神性の幽遠高雅なるものあるを知るに足るべくされば圓滿なる資産家として縣下稀に見る人格の士たり、今や數十萬金を投じて邸宅の新築中に在り、蓋し此處に悠々閑如として老後の生を送らんとするにあらん。

兵庫縣人物史　辰馬吉左衛門君

## 酒造家　辰馬吉左衛門君

（西宮町）

中より之を覗むれば、辰馬悦叟氏の如きは實に其隨一なるものである。

氏は天保八年の生れ、其生家は淺尾と云へる舊家であるが長じて辰馬吉左衛門家の養子となり、後ち分家して自ら一家を成し、魚崎の舊家たる雀部の倉を買ひ受けて酒造業を營みたるに其水質は頗る優良にして天下一品と稱せられ、初めて鱗印を東京に送るや大に歡迎する所となり、續いて白鷹印を製して天下の愛好に投じ、其業務の盛運と共に家運も亦隆々として發展するに至りぬ、夙に勤儉を以て其身を持し、努力奮勵遂に今日の大を成した人である、往年一度感ずる所あつて酒と煙草を斷禁して以來今日に至る迄既に四十年の間、曾て之を口にせず、其間煙草代として毎日五錢宛を積立てたる金は莫大の額に達し、其一部を以て某寺に祖先の位碑を造り祭祀の料を獻じ、又之を以て夙川の邊りに田地二町を買入れ其收穫米の全部は年々陰かに町役場に託して自己の名義を表はさず、貧民に施米を爲しつゝあるが、其恩惠に浴するもの毎年二百人に達すと云ふことである。

噫、勤儉力行の士は乏しと雖も、之を天下に覓むれば敢て少くはあるまい、然れども自ら節し自ら勤め、其積めるを以て之を衆に施し、貧を救ふと云ふが如き德行家は余輩寡聞にして氏の外に未だ之れあるを知らぬ、ア、其心情の博愛にして崇高なる實に尊ぶべく敬すべきではないか、隨て其德望の高きことも未だ曾て其例を見ざる所である、其長男は本家辰馬家の養子となれる卽ち辰馬吉左衛門氏で、次男は生家淺尾家を紹ぎ、自らは令娘に婿を迎へて相續せしめ、現主人の悦藏氏と云ふのが卽ち之れである、而して今は隱居して別邸に悠々として居られるが、今尚健全で未だ眼鏡の如きを用ゐず本家の吉左衛門氏を奬勵して遂に其今日あるを致せるが如き實に氏の力と謂はねばならぬ、洵に非凡高風の老翁である。

現今酒造界に雄名を馳する者少なからずと雖も、其雄中の雄なる者に至つては先づ辰馬吉左衛門氏を推さねばならぬ、實に氏は我國に於ける酒造界の大王である、其家は西ノ宮に在つて十三代連綿たる酒家である、代々の主若吉左衛門と稱し、三代以前の吉左衛門氏に至り家運俄かに勃興して其大を成すに至りぬ、然るに先代吉左衛門氏性豪奢を好み、爲めに家道衰退せるを氏の曾祖母に當る清子未亡人が世にも稀なる女傑の方で遂に其頽勢を再び恢復し、辰馬家の家礎をして安泰ならしめた人である。

氏は辰馬悦藏氏の長男にして幼名を篤一と云ひ、明治十六年十六歳の時に本家辰馬家の嗣子となり、三十一年家督を紹ぎ、昨年に至りて之を合資組織と爲し一箇年の醸造高が二萬五千石、外に尚二萬石の商ひがあると云ふ、其商標の如きも白鹿以下三十種ありて、其營業の盛且つ大なること實に天下無敵である、又別に汽船部あり、三萬噸の船舶を有し、臺灣、朝鮮、滿洲、加奈太、米國方面への輸出入を掌り、殊に臺灣は領臺後直ちに奮進擴張せる航路として社外船中に在つて頗る優勢を保つて居る。氏は頗る謹厚質直の士で、實父悦藏氏の指導を受けて夙ら醸造を司り、爾期の醸造期中に於ては夥下駄三足を用費すると云ふ程に自ら働いて居るが如き西攝醸造界の異彩である、而して氏は家道に忠實奮勵することを以て養子たる者の義務と爲し、又天職として益々勵精するの外、或は世の名譽

故辰馬清子翁

職とか、其他に關係することを嫌ひ、唯だ自己が船主たるの關係より神戸海上保險の取締役と且つ西宮銀行の頭取たるに過ぎぬ、然れども後進者の教育には頗る力を盡し、若し有爲の青年ありと見れば自ら學資を給して勉强もさせ、現に今氏の給與に依て獨逸へ留學して居る者もある、斯の如きは實に今日の富豪中に甚だ珍らしき人物と謂はねばならぬ、而して氏は又頗る孝行である、一度實父の鴻恩に想到すれば涕を流して之を謝すると云ふが如き、而して又毎朝夙に起きて必ず祖先の禮拜を行ひ、曾て之を缺いた事がないと云ふことである、斯の如き謹嚴至孝且つ素朴卒直なる人物は實に富豪界の模範的人物と稱するも過稱ではあるまいシカも其思想は決して保守的の風なく、飽迄も積極進取的にして現に業務の一大擴張を圖り、又多年酒造法の改良に腐心し、近く醸造試驗所を設立せんとして目下其計畫中であるが、蓋し其年產額の漠大なる酒造界に、此種の試驗場を設立するのは斯業界刻下の急務にして、其神益する所鮮少ならざるものあるであらう。

氏は已に斯の如き人物であるから、其下に雇はれて居る人物も又何れも謹厚卒直の士許りである、支配人の三宅氏は元西宮に於ける教育家で、吉左衛門氏の師事した人物であつた其關係より入つて支配人となり、酒造部を擔任して居るが、頗る素朴謹嚴の人物である、汽船部は四井喜一郎氏が主任となり、其周到なる經營は益々同部の發展を見るに至つた、而して同家の爲めに又逸すべからざる一人物は辰榮之助氏である、氏は元と篠山の生れ、幼少同家の丁稚となり、多年の勤勞に由て後ち五千圓を貰つて別に一家を成したりしも、先代吉左衛門氏の豪奢なる遣り方が、遂に家道をして衰微せしむるに至るや、祖母清子の請ひにより同家の家政を掌る事となり、曩に貰ひし五千圓は當時既に貳萬五千圓に殖して居つたが、其全部を擧げて之を本家の資に提供し、其後夙夜努力して遂に同家をして一千萬圓の富を成さしめたる男である、然るに先代吉左衛門氏が其臨終に際して氏を召して其庶子某嬢（今の辰馬六郎の妻）を現主吉左衛門氏に配せしめん事を遺言して死んだ、所が後ち松平子爵より夫人を迎ふるや、榮之助氏は乃ち遺言を固執して之を肯んぜず、遂に財產分割論を唱へて訴訟となり、大阪兵庫の知事や興正寺の住職等が頻りに

仲裁を試みしも頑として應せず、然るに友人の濱野茂氏が懇懇として說く所あるや、無條件にて之に應諾し、某嬢には濱野の仲裁にて分產するに至つた、而して其自ら死するに當つては、自分の子には決して壹萬圓以上の金を與ふる勿れと云ふことを遺言して死んだ、そこで濱野が再び立會して九千五百圓を其子に與へたと云ふことである、ア、彼れ目に一丁字もなき男であつたが、氣骨はあり、識見もあり、加ふるに正直謹厚を以て其身を持し、其一生を同家の爲めに捧げ、奮闘努力した無名の人傑であつた、蓋し同家の德が此人物を感化して斯くあらしめたものであらう、要するに主從皆打揃ふた當世珍らしき人物許りであるのは彌益同家をして大ならしむる所以である。

# 大塚讓之助君

（伊丹町）

舊記に據れば大塚家の先は、今を距ること七百三十年、高倉帝の治承年間に起りて、世々伊丹町に住し、卽ち我邦釀造界の業祖として識られ、今に家系連綿、小西家と相駢んで同地方の名門である。

抑も我邦に於ける清酒醸造の濫觴は、今を距ること實に二百三十年以前に於て、川邊郡鴻池村の山中某なる人が、往古時代より醸出し來れる濁酒を偶然精製して清酒を醸造するに至れるもの、當時僅かに一鄕一村の需給を目的とするに止まり、汎く世の需用家に向つて滿足を與ふる能はず、然るに大塚氏の祖先は頗る之れを遺憾となし、山中某の施せる醸成法に對し、種々の研究改善を加へ、竟に劣烈無比の清酒を醸して、時の幕府より清酒一手醸造の特權を與へられ、遍ねく世の嗜好を滿たすに至り、大いに聲價を發揚すると共に、利する所も又尠からざりしと云ふ、故に苟くも斯地に醸造を業とせん者は、必らず一たび大塚家の承認を受くるを例とし、爾來春秋幾變遷、時運は轉換して先人老いて後嗣代るも、草分けの大塚家を中心として、百餘軒の醸造家を出だし、商勢日に倍々旺盛を極めて、伊丹の清酒とし云へば、天下何人も之れを辯せざる者なきに至りき、現に鴛尾氏の商標とする「しら泉」其他灘地方に用ゐらるゝ商標は、概ね大塚氏の用ゐたるものなりと云ふ。

## 醬油醸造業

# 大塚茂十郎君

（尼ヶ崎町）

大塚家は醸界の宗家として尊重せられたるのみならず、累代相繼いで近衛家直轄の總宿老を勤め、小西家と相並んで無限の聲望を博したりしは、今尚ほ里人の記憶に新たなる處にして、當代の壯觀を偲ばしむるに足るべく、先代與右衛門氏は夙に風流を嗜しみ、賴山陽、篠崎小竹等の文豪と交り深く其碑文が賴山陽によつて選ばれたるは、また以て同家の誇りとする處なり。

翁は美嚢郡渡瀬村の石田家に生れ、文久三年十五歳を以て大塚家の養子となり其後を繼いだ人である、少壯總宿老に擧げられ、維新の際華族に列せんとの内命ありしも之を辭し、後町長たりしが感ずる處あつて一切の公職を擲ち、又醸造業は灘地方の發展に伴ひ時世を看取して之を廢し、今や頽令古稀を過ぐること四、性温潤にして名門の人たるに恥ぢぬ。





氏の家また大塚譲之助氏と其先を一にし、代々伊丹町に住して酒醤油の醸造を業として居つた、爰に大塚家の最も誇りとするに足るべきものは、同家の祖先が汁醤油醸造の嚆矢として、我邦醸造界の一大革命者たることである、抑も之が來歴を繹ぬるに、同家の祖先が酒醤油の兼營を廢して、寛延二年の頃醤油を以て專業となし、尼ヶ崎町が舟楫の便に富み四方の販賣に便なるものあるより、同地に分工場を設けて大に業務の發展を圖りたりしも、當時は現に美濃地方に製造する溜り醤油に過ぎざりしが、偶々醸造場に一の清泉あり、滾々として汲めども盡きず、里人は稱して之を靈泉となして居つた、然るに大塚氏或時感ずる處あり、昔し山中某氏の清酒醸造法に基き、此靈泉を用ゐて醸造せられたる溜り醤油を壓搾して液體となし、試みに之を使用せしに、品質の高尚にして佳良なること前の溜り醤油と同一の談ではない、爰に於て地頭近衛家に獻上するや感賞斜ならず、其功を賞して「京印」の商標を賜はりたりと云ふ、此れ卽ち本邦に於ける汁醤油製造の濫觴である。

其後徳川幕府の江戸に開かるゝに及んで、將軍家を初め各藩諸侯が競ふて愛用する處となり、其名は天下に喧傳せらるると共に京印は醤油の代名詞として謳はるゝに至つた、されば勢ひ競爭者を出し、現今醤油の生産地として著聞せる野田桃子醤油の如きは、當時此に對抗して生れ、其他各地の溜り醤油が一變して汁醤油と進化したるもの、要するに大塚氏の發明に基きたるもの蓋し同家の如きは我國醸造界の革命者として其功勞は大に之を吹稱するに足るべきものであらう。

現主人茂十郎氏に迨んで業務は益々隆盛を來たし、以上の沿革を有する京印は今尚遠近に嚴き、東京を初め北海道、九州地方より歡迎せられ、現に一萬石以上の醸造石數を出し、品質の佳良と香、味の優秀を以て、内外博覽會に名譽有功章名譽金、銀牌を授けられ、東宮御所の用命を蒙り、關西の醸造界に重視せられつゝある所以のもの決して偶然ではない。

同家は單に醸造家として著聞せる而已ではなく、其先は近衛家の領内に於ける、大塚譲之助、小西新右衛門氏と共に重きを爲し、特に總宿領を命せられたるも、家憲と稱して固辭して受けず、又先代茂十郎氏は殊に謙遜硬直の人にして、其一女（現主人の令姉）が曾て三井養之助氏の室として懇望せられ、喜んで應ずること思ひの外、富豪三井家と資産の隔絶を云爲して遂に之に應せざりき、ア、今や各地の金權者流が往々貧乏華族の令嬢を迎へて、以て閨達を求むるの際に較べたならば、其心事の高朗にして奥床しい所が窺はれるであらう、當主茂十郎氏また先考の衣鉢を承けて、溫厚篤實の性、富貴に驕らず、門閥を衒らはず、榮譽を求めんとするの風は毛頭なく、孜々として祖業の發展に怠らざるが如きは、同地方稀に見る人格の士である。

# 酒造家　辰馬半右衛門君



（武庫郡鳴尾村）

阪神電車に乘つて鳴尾西の宮方面を一過すれば其沿道には辰馬と云ふ酒造家の廣告が田圃中に立竝んで人目を遮りつゝあるに心付かぬ者はなからう、而して何れも本家辰馬などゝ云ふ異なつた看板を掲げ、局外者からは何が何やら薩張り了解が出來ぬも無理はない、實に此地方に辰馬と云ふ酒造家は幾らあるか殆んど數へ切れぬ程である、そこで半右衛門と云ふのは例の辰丸事件で有名なる辰馬家で、ボイコット騒動に依て其名は天下に廣まつた。祖先は小豆島より移住したのであるが、先代の烈叟翁と云ふのが頗る英邁の人物、其手腕に依て家道は頓に發展し、辰馬半右衛門と云へば、關西方面にては殆んど其名を知らぬ者がないと云ふやうな有名の人物であつた。而して又其酒造業に於ても灘に於ける五指中の一、其東自慢の商標も亦有名なものである。

當主の半右衛門氏は年も若いが、其人物器量は到底先代には及ばぬ、萬事が華奢好きにして其店舗の如きは一見御役所の如く、庶務課、船舶課、酒造課、土地課などゝ云ふ標札を掲げ、番頭は袴穿きですまして居る、之を伊藤長次郎氏が千萬圓の資產を有し、其事業の廣況なるに拘らず、一人の顧問をも置かず、單に店と掲げた薄暗い事務所に、船津吉太郎氏が木綿衣服で麥茶を啜りつゝ差配して居るに比ぶれば雲泥の相違である、斯くの如く華美豪奢を裝ふ當主の半右衛門氏は其行ひや邊幅のハイカラ的なるのみならず、其心も既にハイカラ的にして虚名に憧憬し、總て實着を缺いて居るのは惜しむべきことである、今は阪神電鐵の取締役及び京都貿易銀行の頭取となつて居るが、曩に日露の戰後、株式に手出しをして大失敗を演じて以來、家道俄かに衰へ、又以前の盛名がない、そこで今は失敗の整理中であるが、聞く所に依れば現在の借金は百餘萬圓で、それに資產が百五拾萬圓、差引尚五拾萬圓の正味財產があると云ふが、由來負債の整理なるものは資產を作るよりも一層困難なるものにして、金を作る丈けの手腕家でなければ整理は出來ぬ、果して同家の整理が如何に成行くかは之を後日に徹すべき問題として、さて彼の辰丸事件なども實は損害賠償の百萬圓も取る積りで居つたのが、タッタ九萬圓、此位は既に運動費に入つたであらう、又別に株式組織として七隻の汽船を所有してゐたが、四十一年以來の缺損が積つて貳拾七萬圓の負債となり、遂に貳拾九萬圓を以て辰馬吉左衛門氏に賣渡した、若し之を今日迄で持ち耐ねて居れば、其缺損をば優に恢復する事を得たのであらう、抑も興廢盛衰は人事の常といゝながら、名門の辰馬家が若しも以上の事實なりとすれば、實に惜しむべき事である、而して今同家には鳴尾方面に於て五十萬坪の地所を有して居る、故に一坪二圓の値昂りがすれば其利益を以て負債を償却するに足ると樂觀して居るが、此邊の芋畑でシカも五十萬坪が揃つて二圓平均の値昂り相場を見るのは一寸遠遠の感なきに非らずである、去れば此名家をして長く存續せしめ、且つ其家運を恢復せんとするには、先づ半右衛門氏が萬事に質素なる家風と爲し、堅實を旨として自ら其所信に依て一家整理の目的を貫徹し、而して徐ろに發展の計劃に出づるを以て良策とすべきである。

抑も灘方面の酒屋は何れも保守的である、科學の進歩に依て各種の工業が、殆んど其面目を一新したに拘らず、醸造法は依然として天保時代の舊習を襲ひ毫も進歩の跡がない、而して其酒造家なるものを見るに、徒らに尊大振つて自ら旦那然と構へ、路傍の廣告に本家爭ひを爲して居る抔は滑稽至極で、一體酒なるものは本家と分家によつて品質に優劣があるものではなく、又或は華族の令嬢を迎へて恐悦がつて居るが如き、殆んど新進の氣を失し、醸造法の改良進歩などに心を寄する者がない、隨て酒造地の本場と呼ばれながら未だ醸造試驗所も設けてないと云ふ有樣、却て今は福岡や、廣島などに於ける醸造法が遙かに進歩して、共進會や博覽會などで常に優等の成績を獲得して居ると云ふ狀態である、されば今日の有樣を以て進まんには灘酒として古來國中に擅にし來れる其名聲は驀て他に奪はることがあるかも知れぬ、余輩は之を我兵庫縣下の爲めに慨き、且つ灘地方の當業者の爲めに甚だ之を惜しむものである、殊に辰馬半右衛門氏の如きは頗る貴族的で、其本業なる酒造の改良等には何等腐心する所なく、却て新規の事などに手出しをして失敗を重ねて居るのは惜しみても尚餘りあることである、加ふるに尊大且つ華奢なるが如き、縱令新進氣鋭の人物なりとするも、斯くては前途の大成は困難である、されば自ら大に戒しむる所なくてはならぬ敢て一言を加へて反省を促さんとする所以のものは、是れ獨り氏一個の爲めのみに非らずして、實に又灘醸造界の發展を希ふ衷心に外ならぬ。

# 酒造家　山邑太左衛門君

（武庫郡魚住村）

銘酒正宗の名天下に高し、而して其名の高きにつれて方今正宗の銘を打つもの幾十百種、一々枚擧に遑あらず、就中菊正宗、櫻正宗等の名最も著はる、蓋し是れ正宗の兩大關なればなり。菊正宗は嘉納治郎衛門氏の醸造に係り、而して櫻正宗は實に山邑太左衛門氏の製出する所なり、共に上戸黨の愛好措かざる所、其名嘖々として天下に藹く亦所以なきに非ら

すと云ふべし。

山邑太左衛門氏は灘魚崎の名家、世々酒造を以て業と爲し斯業界の一雄鎭たるを失はず、資産もあり、信用もあり、殊に其櫻正宗の需用は都鄙遠近に洽き、今や一箇年の醸造高殆んど二萬石に達せんとす、當主太左衛門氏は今年三十九歳の壯者、頗る穩健の人物にして又勤勉力行の士なり、其分家に同姓太三郎氏あり、大阪高商の出身にして頗る敏腕の稱あり蓋し山邑家に於ける重鎭たるのみならず、又同地方に於ける逸材として其前途に對する嘱望淺からず。

灘の酒造家は概して保守的なり、敢て固陋に非らずとするも、進歩的、積極的の氣象に乏し、是れ灘酒の尙大に發展すべくして、動もすれば他に壓せられんとする所以たらずんばあらず、唯だ需用の自然的增加に依て、其造石高の又自然的に增加しつゝあるの外何等見るべき施設なきは洵に惜しむべき極みならずや、然るに山邑家が此保守的習俗を打破して獨り其營業の進歩的積極的なるは、啻に同家の爲めに之を歓ぶべきのみならず、引ひて灘一帶の舊夢を破り、以て進歩開發の先驅者として其貢獻する所の少なからざるものあるべきを思はずんばあらず、斯くて新進の氣滿々として漲りつゝある山邑家は櫻正宗の名聲と共に、其家運も亦今や急進的に發展しつゝあるものゝ如し、以て當主太左衛門氏分家太三郎氏の人物も亦之より歸納想見するに難からざるべし、然り兩氏は卽ち積極的の活動家なり、奮闘力行を以て唯一の娯樂とするの外毫も風流韻事を念とせず、唯だ好む所のものは角力にして、現に昨年力士大木戸の爲めに五百金を投じて「まわし」を贈り、且つ其披露に千金を祝ひたるが如き、其爲す所や、豪快勇壯、飽迄も丈夫の行動たるを失はず、實に醸造界の異彩と謂ふべし。



## 酒造家　花木甚右衛門君

（武庫郡新在家）

福娘と云へば方今五大銘酒中の一、菊や櫻の花よりも何となく人好きのする商標名に顧客を呼ぶ引力あるものゝ如く、酒の味ひも亦柔かくして香しき風趣捨て難き所ありと云ふ、殊に關東關西の方面に於ける新進の勢力は侮るべからざるものがある、造石高は約一萬石、樽賣よりも壜詰として販賣する方が遙かに多く、盛んに廣告もすれば、宴會政略も執る、頗る派手にして進取的の造り方で益々其販路は擴張する一方である、隨つて顧客の殖ゆる事も又甚だ著しきものである、而して其身代は果して幾何あるかは人の疑問中に在るものゝ如きも、派手の風ありし先代の死亡後は却て堅實になつたと云ふことである、其別莊の如きは頗る廣大なるものにして、松樹の植込みなどを見れば宛然一大松林を眺むるの觀がある兎に角造園費に拾萬圓以上を要したと云ふ評判、此處で時折りの花を賞して盛んに御馳走をする、御馳走の後とには必ず福娘が付て行くと云ふ風に、總ての機會を捉へて販路の擴張に利用する其遣り方の巧妙機敏なることは、他に到底及ぶものはなからう、最も同家には負債も隨分多いとのことであるが、併し今日の勢ひを以て進まんには、近き將來に於て大に其富を增すことであらう。

## 酒造家　若井源左衛門君

（武庫郡四瀧村）

氏は明石郡魚住村の名門卜部八兵衛氏の實弟にして、明治二年五月を以て生れ、幼にして若井家の養嗣子と爲り、小字を與八と稱し、後ち先代の名を繼ぎ源左衛門と改めた、若井家は代々酒造と海運を以て業とし、灘近郷に於ての巨豪にてありき、然るに今を距ること四十年以前に於て、一朝祝融に罹り、家財の全部及び所有の帆船を燒失し、家道頓に失墜して亦た昔日の面影を失ふに至つた、而かも先代源左衛門氏は非凡の精力家にして、孜々として災後の恢復に努力し、所謂一難を經る毎に勇氣は將に一倍し來る底の慨を以て、家道の再興に怠らざりしが、天は至誠を捨てず、幸ひにも小寺泰次郎氏に才能及び手腕を認識せられ、その計畫せる事業に對しては、資を惜まずして後援を與へたるより、氏は小寺氏の意



主人の甚右衛門氏は大阪高商の出身、學問もあれば商略にも富んで居る、昨年死んだ先代は頗る急進的の積極主義者で且つ又却々の敏腕家であつたが、當主の花木氏は同じく進歩的文明的の商略家ではあるが、併し穩健にして秩序的の所がある、されば氏は創始的の方面よりも進歩的の守成家として大に成功すべき人物であると共に、同家の將來は氏に依て穩健なる裡に發展すべきを疑はず、而して其年は漸く四十に垂んなんとして、前途尙春秋に富んで居る丈け、氏の大活動は盖し今後にあるであらう。

## 酒造家　若井源左衛門君

（武庫郡四瀧村）

氣に感ずると共に、倍再興に奮闘努力したる甲斐ありて、竟に宿志を達して家道を恢復するに至つたと云ふことである。

當主源左衛門氏が同家に入るや、恰も養父母が一家再興に他を顧るの遑なき時代なりしかば、之を傍觀座視するに忍びず、自ら奮つて家業に勵精し、其後家督を承くるや、奮闘劃策怠りなく、醸造事業の發展に力めたるの結果は、今や其醸造にかゝる銘酒「牡丹正宗、繪象の鐘旭」は滿天下の愛用を博して、聲價日に倍々昂り、遂に今日の大を爲すに至つたと云ふことである、氏は又本年縣會議員の改選に際して當選したが自家の事業殖利に熱心なる如く、また縣政に忠にして獻替する所多かるべきは、信じて疑はざる所である。

# 酒造家　泉仙介君

（武庫郡御影町）

抑も氏は有馬郡道場村に生れ、家は世々酒造を業とし、子孫相繼ぎ系統連綿として有馬郡に於ける名門である。

祖父仙介俗稱嘉右衛門氏は、夙に聰慧の聞えあり、而して最も進取的の氣象に富み、縱横劃策、唯夫れ後れざらんことに腐心し、牢乎たる家業の基礎は、實に氏に依て築かれたるものである、氏は初め道場村に盛んに醸造し來りたるも、到底僻邊の地にあつては、其志を伸る能はざるを看取し、こゝに家督は長男仙介氏に讓り、地を西宮に相し、二男仙次郎氏を伴ふて此處に移住し、直ちに酒造業に着手し、更らに練熟の技倆を發揮して、「橘印」なる酒銘は、今日の「泉正宗」の如く、四方酒客の愛求を喚起するに至り、而して西宮に成功したる氏は、三たび居を換へて東明村に移り、同じく醸造に從事し、比年ならずして又復た信用を四方に博し、斯業者間の重きを爲すに至つた成功者である。

現主仙介氏は、祖父嘉右衛門氏の歿後、明治初年の頃嚴父仙介氏と共に、東明村に移りて祖父の家業を繼紹し以て今日に迄んで居る、家醸「泉正宗」の聲價こゝもに、家道倍々揚がり、顧客の信用愈よ加はり、販路區域は全國に及び、朝鮮、臺灣等の新領地に愛用せらるゝものまた多くして、元と二三千石の造品高に過ざりしも、今は一躍八千石を算するに至る、又以て家業の盛を窺ふことが出來る、又泉會なるものを組織し、各地の問屋仲買等を會員に網羅し、會員中に委員を選定して、一般の會務を委ね、信用保留の一策として販路の擴張を圖りつゝあるが如きは、頗る時宜に適したる進歩的の經營法として其手腕を察するに足るべく、人と爲り勤儉素朴常に店頭にあつて店務に執掌しつゝあるが如きは、尊大を以て誇りとする灘醸造界の異彩である。





# 貿易商　白洲文平君

（武庫郡蘆屋）

## ▲先代白洲退藏翁

維新當時に於ける各藩の去就には、隨分苦衷の跡が見ゑて居るが、三田藩も亦其一である、抑も當時の三田藩は純勤王派ではなく、其主張は天子を父とし幕府を母とし、其間に親疎の考へを有して居なかつた、故に幕府を窘迫するは母を疎外するも同樣で情に於て忍びぬ所である、けれども子の分としては不止得泣いて父に從ふより外はないと云ふのが、藩の輿論であつた、されば同藩が朝廷から神崎の警衛を命せらるるや、此の命に從へば母に對して弓を彎く事となる、子として母に弓を彎くに忍びないが、之を避けては朝廷へ申譯けが立たぬ、そこで藩の重臣が苦心の結果、スナイドル幾千挺と、保持小判千兩を朝廷へ獻納した、所が當時朝廷の財庫は千兩以下と云ふやうな窮乏の場合であつたから、非常に其擧を賞せられた、恁くして朝廷の勸心を求めて置いて、神崎を免がれんが爲め重なる人々は病氣と稱して但馬の溫泉へ避けたと云ふ風で、藩の名分を保つ爲めには却々工夫をしたものである。

三田は夙に洋式の錬兵法を採用し、又耶蘇教を唱導した處である、當時彈正臺の役人に河野敏鎌や渡邊升氏の樣な最も思想の古い人があつて、三田藩に對して非常に迫害した、爲めに重臣が召出されて糾問せられ形勢甚だ迫りて一藩爲めに城を枕に打死と決心した位であつたが、其後大村益次郎氏が京都の風ノ森原で洋式練兵を創めた際、三田藩は最も抽んでゝ居つて、朝廷より厚く賞せられ、且又練兵の教師は重に三田藩から徵せられた有樣で、曩のお咎めも自然赦さるゝに至つたやうな次第である、如斯夙に耶蘇教を容れた爲めに比較的思想の新しい人が生れ、五里霧中の維新當時に在つて克く藩政の改革を全ふして他の模範と仰がれた、此西洋思想の注入に力めた人は川本公民、先君隆義公、白洲退藏、武藤正久前田敬藏、小寺泰次郎氏等で、何れも進歩主義積極主義の人であつた、就中隆義公と相俟つて一切を統轄指導した人は白洲退藏氏である。

氏は聖堂の出身で藩の儕輩であつたが、極めて智惠の分量に富み、頗る思想の豐かなる雄辯家にてありき、されば破格を以て拔擢せられ大參事として藩政を統轄するや、如何なる反抗者も氏の前には說服されると云ふ風で、又圓轉滑脫人物の偉大なる稀に見る棟梁の器であつた、之れ卽ち能く其藩政

の改革を斷行した所以であらう、而して又其進歩主義の處は福澤先生に親炙し、川本清次郎、川本泰年、木村勉氏等により西洋思想を受けたるによるものである、維新の際氏が大參事となるに及び種々の極端なる改革を以て藩債を償却し、藩の歸向を定め、廢藩の後政府へ召し出されたるも福澤先生の說を守りて之に應せず、藩主を擁して神戸に來り、志摩三商會を設けて商業を營み、開港となるや將來を看取し小寺氏と謀つて地所の買占めを爲す等、蓋し九鬼家の今日ある全く氏の功勞によると云ふ、其後正金銀行の頭取に擧げられたが、銀行局長の加藤氏と衝突して、之を辭して大藏省に入り、岐阜縣の書記官に轉じ、後又正金の取締役となり、明治二十五年九月六十三歲を以て歿しぬ、想ふに氏が若し最初より中央政界に立つたならば必ずや第一流の地位を占め得たであらう又小寺氏の如く獨立したならば鉅萬の富を爲したであらうが飽く迄九鬼家の爲めに盡瘁して、遂に其手腕を發揮するに至らざりしは氏の爲めに惜しむと共に、其清廉なる人格を窺ふことが出來る。

## ▲當主文平君

縣下の人物は何れも度胸の少さい、豆粒のやうな小才子計りで、將に將たる頭梁の材が居らぬとは、吾人が常に遺憾として絕叫して居る處であるが、偶々白洲文平氏の如きは、縣下稀に見る氣骨の稜々とした人物である、殊に近來は一度洋行でもして來ると、直に西洋化して杓子定規の少さな人間となり、純日本式の大和魂はなくなつて了ふやうである、而かも文平氏は西洋に多年留學して居つたにも拘はらず、純日本式の豪傑肌を存して居る處は、之れ蓋し父退藏翁の衣鉢を受けたものであらう。

抑も氏は退藏翁の長男で幼少福澤先生の門に學び、後ち米國に留學して留ること三年、更らに獨逸の某大學に在ること三年、其間專ら經濟の學を修めて歸朝した、そこで福澤先生は彼れを慶應義塾の講師に聘し、父退藏翁との關係上厚意を以て彼れの爲めに謀らんと、或る人を以て此旨を傳へしめた彼は其厚意を感謝して之に應ずるならんと想ひの外「福澤氏が余を聘せんとなれば、宜しく自ら來つて請ふべきである、余は道を以てするにあらざれば、之に應ずるものにあらず」と一言の下に刎ね付けたので、流石の福澤先生も一言なかつたと云ふことである、其後何う感じたか中上川氏の紹介を以て三井銀行へ這入つた、處が中上川氏も持て餘した、けれども厚誼上放り出す譯にも行かぬ、そこで武藤山治氏に頼んで鐘紡へ廻した、夫れより鐘紡の兵庫分工場へ轉じたが、遠は武藤山治君既に彼が氣風を知つて、何日經つても何一つ用事も吩咐けぬ、若し他人ならば隨分窮屈であらうが、彼は平氣で毎日椅子に凭れたきり何を仕ようとも言はぬ、用事がないのを幸ひに、鐘紡の自用車で、神戸の商館へ計り行つて太平樂を並べて居ると、商館の主人が鐘紡に奉行するより寧ろ獨立して商買をやつては如何と慫慂したので、夫れから綿取引の法を研究し、最早大丈夫やれると自覺するや、鐘紡へ行つて最う今日限り退社すると申渡し、夫れより神戸に於て商店を設け綿取引を開始した、其後は百倒百起、一時悲境に陷つて



差押を喰つたことも唯だの五度や七度ではなかつたが、何を言つても世界的の智識もあれば次第に經驗も積み、遂には今日の大を爲すに至つた譯けである。

以上は彼が經歷の一端を示したる迄にして素より一言一行人の模範とする譯けには行かぬが、又以て其人と爲りの一斑を窺ひ得べきと共に、狷介不屈の奇行的人物であることが解るであらう。

# 大阪鐵工所總支配人
# 甲賀卯吉君

（武庫郡田中村）

氏は志州塔志郡甲賀村の土豪、豐公朝鮮征伐の驍將甲賀左馬允を祖となし、左馬允は九鬼嘉隆の女を娶りて其臣下となり、後ち九鬼氏が三田に移封するに及んで隨從したものである、代々九鬼家に重用せられ、當主卯吉氏は幼少の頃藩校に文武の學を兼修し、次いで英人デビス氏に就いて泰西の學を修め、廢藩の後ち英邁なる先代隆義公は、夙に實業に志し、居を神戸に移して志摩三商會を設け、其後德島縣に於て鹽田を經營し、鏑山を採掘し、或は北海道貿易を營むに當り、支配人として業務を擔任し、其後家令として家政萬端を掌りつつありしが、感ずる處あつて之を辭し、明治十七年ハンダー氏の經營に係る大阪鐵工所に入り、初め倉番より進んで總支配人となり勤續二十八年に及んで居る、其間氏は終始一貫同所の發達に腐心して倦まず、されば所主範多氏の信任益々厚く、屢に歐米に派遣せられて造船事業の視察を遂げ、奇拔なる觀察眼は齎す處のもの甚だ多く、締朝後明敏なる範多氏と相俟つて氏が非凡なる手腕は遺憾なく發揮せられ、劃策經營機宜に適し、今や同所が長崎造船所、竝に川崎造船所と共に我國の三大造船所として謳はるゝに至りしもの、氏の手腕に負ふ處大なるものがある。

氏は性堅忍不拔にして謹嚴なる態度は、古武士的の氣風を存し、其運爲行藏は飽く迄嚴格にして一步を假さざる半面に於ては、道に世の辛酸艱苦を經盡せる苦勞人、溢るゝ許りの溫

情を有し、人に接して諄々と説く處は事理明白にして、心服歸仰せしむるに足るものがある、氣品崇高優雅にして趣味に富み、曾て居を武庫郡田中村にトし、昔し豐公が勝地を愛して此處に註り、利休を侍せしめ茶を沽したりしと云ふ歷史的の舊家を購ひ、當時豐公親栽の松は雄を傳へて前庭に蟠り、邸後數千坪の果樹園を設らへ、內地は勿論遠く歐米より蒐集せる種々の花卉植物を栽培し、四時花を眺めて自然を樂しみ果實を收めて交友に頒ち、一面種類、栽培、土壤、肥料等の試驗を行ひ、溫室、冷藏庫を設けて、以て博物學上の參考に供し、或は範を示して農家の副業を奬勵しつゝあるが如き、近時阪神地方の出來星紳士が、田園生活と稱して芦屋敏馬に西洋風の別墅を築き、甚しきは醜業婦を密へ、自然の景趣を俗化せしめつゝあるものとは、大に其趣を異にして居る、余輩一日氏を其邸に訪ひ、導かれて果樹園を觀覽し、爰に於て氏の園藝談を聞く。

曰く日本人の缺點は博物學上の智識に乏しいことである、常に路傍の草木を眺めて其種類を知らず、甚しきに至りては其物を食らふて其名を知らざる者が多い、されば余が過日有馬の溫泉に遊び、數種の植物を採集して其名を問へば、日夜に之を眺めて居る土着人に說明するものがない、殊に植物の害蟲を驅除すると云ふ念慮薄く、何人でも自己の身體又は幼兒の體軀に蚤や虱が匍匐せば直に之を驅除するに拘はらず、庭園の植物が蟲害を受けて苦しんで居つても、之に同情して驅除してやる人は鮮ない、云々、蓋し氏は宗教上に敦厚なる信仰を有して居る人である、されば此一言は偶々氏の德が草木に及べる崇高なる信念の表現せるものにして、余輩をして一層氏に對する敬虔の念を深からしめた所以である。

氏は更らに話頭を轉じて曰く、現今の青年に缺くる處は、人を信ずる雅量に乏しく忍耐力のないことである、併し人を信じて始めて人に信せられ、又忍耐の力によりて彼岸に達することを得るのである、余の如きは初め鐵工所に入るや、所主のハンダー氏は西洋の人で來朝以來日尙淺く、從つて性格を異にして居る、然れ共余は所主の爲めに一身を犧牲にするの覺悟を以て、如何なる困難にも忍耐して今日に迨んだが、果して余が信ずるが如く、氏も又信認を與へられ、以て現任を辱かしめて居る次第である、云々。

要するに氏が今日ある固より天稟の英才なるが上に、手腕識見の凡ならざるによるや勿論であるが、一は自信力に強く又以て堅忍不拔、至誠忍耐の致す處であらう、蓋し氏の如きは模範的の人物として大に吹稱するに足るべきである。

# 須磨病院長　鶴崎平太郎君

（武庫郡須磨村）

氏は長崎縣舊諫早藩士鶴崎辰次氏の長男にして幼少の頃、藩の侍醫たりし叔父の小代東堂方に養はれて居つた、夙に醫學に志し、又叔父東堂氏が漢籍に造詣する所深かりしを以て傍ら就て漢學を修め、其堅忍克己、不羈獨立の神主たるに至れるが如き、實に當時漢學に依て修養し得たるものであらう長ずるに及んで實弟粂一氏と共に、長崎醫學校に入り、獨逸人の某に就いて醫學を修む、今日政界に名聲ある大岡育造氏の如きは卽ち當時同窓の一人である、然るに明治八年臺灣征伐のあつた年に廢校となり、氏も又他へ轉ずるの餘儀なき破目に陷つたが、實父辰次氏は再三失敗の後ちにて思ふやうに學資も出來ざる場合であつた。

抑も氏の實父は藩の物產方であつたが、廢藩と同時に、元と藩の料米地として米質の佳良を以て稱せられたる多良村と云ふ所の產米を三箇年間の買占めを爲し、一擧巨利を博する積りの所が、事志と違ひ反對に大失敗を招き、續いて又養豚の流行に際して之を試み、一頭に二三百圓宛も出して買ひ入れ試養した結果が復又た失敗に歸し、士族の商賣は見込なしと斷念した時には、既に家產の大部分を雲散霧消した後ちで恰も氏等兄弟が長崎醫學校の廢校に由て新方針を定めんとする場合であつた、そこで一日父の辰次氏は氏等兄弟を膝下に召して云へるやう、父は不肖にして產を破り殘す所幾何もなく、今此殘れる僅かの資產を以て汝等二人を敎育せんと思ふから、極力勉強して他日の成功を期せよと懇々として諭す所あつた、此に於て氏等は更らに東京へ遊學する事となつたが當時長崎邊から東京へ遊學する者は一人もなく、知人や近隣の者などが之を笑ふやうな時代であつた、以て父たる人の奇拔であつたことが窺はれるであらう、所が兄弟打揃ふて東都へ遊學することは失敗後の財政之を許さず、餘儀なく弟の粂一氏は當分之を見合はして先づ氏一人丈け東都に上り、大學東校に入つて專心勉強を始めたが、斯る事情であつたから、氏か在校中は學資の爲めに殘りの財產は擧げて之を與じたと云ふやうな有樣、故に氏も亦在學中は早く卒業して父母に安心を與へん事のみを考へて居つた、而して其大學へ入つた當時、氏は頗る博物學上の智識に秀でゝゐたので、大學に於ては大に望みを囑し、氏をして藥物學者たらしめんとし、若し之に應諾せば卒業の後ちには官費を以て洋行迄でせしめんとして慫慂したが、元來不羈獨立の思想に富める氏は、他日の束縛を嫌ひ、實父も亦同感なりしかば、斷然として之に應せざりしと云ふ、以て氏が少にして氣概のありし事を推想すべきである。

斯くて氏は大學を出たのが明治十六年、直ちに神戶病院の敎諭に聘せられ、後ち姬路病院長となつた、然るに不幸にし

て眼病に罹り、殆んど失明するなきやも保し難き有様となつて終に病院を辭し同地に於て治療を加へて居つたが、其療病中窮かに以爲らく、世に肺病を病んで天壽を全ふせざる者甚だ多いが、苟しくも刀圭界に身を投じた以上は、此病を治して人類の爲めに貢獻するこそ任務ならめと、大に決心する所あり、されば其身が尚病苦中なるをも顧みず、先づ病院建設の地を相せんとして人に導かれて須磨に來り、恰も手探りの有様にて其地を選擇したる次第であつた、其れより病院の建設に就て大に有志間に誘說し、遂に株式組織の病院を建設したのが抑も我國に於ける肺病專門病院の嚆矢である、然るに當時は未だ來患者の數が極めて少なく、缺損又缺損で經營頗る困難を極めたが、シカも氏は發頭者であるから、責任を重んじ殆んど寢食をも忘れて努力奮勵する所あつたが、夫れでも尚立行かず、缺損々々で株主からは色々と不平が持ち上つて來る、そこで已むなく某有力者より資金を借り入れ之を氏一個の經營に改めた譯けである、其間の苦心慘憺の狀は殆んど局外者の想像も及ばぬ所であつたが、氏の手腕力量が漸次世間から認識せらるゝと共に、遂に今日の發展を見るに至つた次第である、之を以て見るも氏が刀圭家として尋常一樣の人物に非らざるを知ると同時に、又克己堅忍にして不羈獨立の偉丈夫であることを覗ひ得べく、洵に我國の刀圭界に在つて稀に見る人物である。

而して氏は又頗る風格の高き人物にして、其人格品性は人の大に敬重する所である、殊に當時他の同業者が何れも避け嫌つて居つた肺病々院を卒先して開設したる如きは、今日利己主義一片に奔つて居る者などの夢想にだも思ひ到らざる所眞に其天職に忠なるものに非らずんば到底企て得べからざる所である、而して須磨一の谷邊は元と狐狸の巢窟で漂盜の横行して居つた所であるが、今日の如くに開發したのは全く病院建設に起因するを想へば、氏は又實に須磨開發の鼻祖と謂はねばならぬ、今は久しく有栖川宮殿下の御召醫となりて御病床に拜診するの榮擧をも擔つて居る、副院長の鶴崎範次氏と云ふは叔父小代東堂氏の實子にして、氏の養嗣子となり、夙に大學を出でゝ後ち姬路の病院長を勤めて居られたが、辭して獨逸へ留學し、在學五年、歸朝後副院長として其新進の手腕を發揮して居られる。

令弟粂一氏は性謹厚の士其後敎育界に身を投じて明治二十八年より神戸第一中學校長となり頗る令名がある、其神身を捧げて敎育の爲めに盡し、熱誠以て子弟の薰陶に當つて居るが、其人格を欽して入學希望者は募集に超ゆること年々十數倍、縣下中學の校長中に在つて鏘々たるの士である、斯くて兄弟二人打揃ふて今日の成功を見るに至れるは以て實父の志が報へられたものであらう。

## 醫師　上原惟善君

（西宮町）

氏は岡山縣勝田郡勝田村に生れ、醫を志して京都醫學校に入り明治十五年の卒業である、卒業後內務省衛生課醫師となり、又集治監醫たりしが、同十六年更らに陸軍々醫學校に入り卒業後軍醫として各地に歷任し、日清戰役には第四師團に從ひ、日露戰役には第七師團に從ひ共に征途に上りて戰時衛生、戰時傷病者の救護に貢獻したること甚だ多く、其功により功四級金瑞勳章を授けられたるが如きは、實に非戰鬪員の軍醫にありては異數として人の賞讚措かざる處である、累進して二等軍醫正となり、四十二年豫備役に編入せらるゝや地を西の宮に卜して業を開き以て今日に迨んで居る、氏は道に多年軍醫の職に在りて毫も一家の利害に交涉なく神聖なる職務に執掌し、又日清、日露の戰役に參加して斷乎たる處置の許に其手を勞したる患者は幾千人の多きに達し、深遠なる學識と相俟つて經驗を受けたること、到底利害を重きに置く民間の刀圭家が得べからざる處にして、今や民間に在りて開業しつゝありと雖、多年の恩給は能く一家の生計を支ふるに足り、云はゞ道樂的の醫家として、固より之によりて名利を望むが如き卑劣なる念慮もなく、常に洒々落々として人類の救濟に努めつゝあり、性磊落にして卒直なる武士的の思想は地方杏林の一異彩として重きを爲せる所以である。

# 川邊郡醫師會長、中馬與丸君

（尼ヶ崎町）

尼崎町に於ける中馬與丸といへば、其名聲は西攝の地に藹き亘つて居る、氏の同窓者や其友人などの言を聞くと、彼は偉い人物であると云ふ、其近隣に就て聞けば彼は頗る德望家であると云ふ、又一度氏の診療を受けた者の言ふ所に依ると彼は普通醫者と異なる所があると云ふ、既に之れ丈けでも氏が尋常の人物でない事が分る、それに近頃は自ら首唱して獨尊會なるものを設け、尼關禪師を聘して禪の修練を始めたと云ふことである、愈々出でゝ愈々奇なる彼は果して如何なる人物であるか、其經歷を問へば尼崎の西勝寺に生れ、元藩の御典醫たりし中馬家の養子となりて明治三十一年に醫科大學を卒業したる醫學士、更らに河本博士に就きて眼科を專攻し姬路病院に聘せられて副院長となり、後ち一年志願兵となりて二等軍醫となり、期卒へて鄉家尼ヶ崎町に歸つて中馬醫院長として名聲日に高く、去る日露の役には第十師團に召集せられて遠く滿洲の野に出征し、軍隊衛生や戰時傷病者に盡す所少なからず、一等軍醫に進み、功五級金瑞勳章を授けられたる如き、實に斯界の異例とする所である、而して今は又中馬醫院長として曾に尼崎町に於ける信望の厚きのみならず、或は大阪神戶方面よりも患者の來りて診療を乞ふ者多く、關西に於ける刀圭界の大家と仰がれ、隨て其收入の如きも神戶の山本治郎平氏と共に兵庫縣下に於ける首位を占めて居ると云ふことである。

去れど彼は醫を以て天職とする丈けで、其眼中には金錢もなければ收入もない、藥代などは拂ふ者は取り、拂はぬ者へは追究もせない、殆んど患者の自由に委して居る、況んや貧困者などは始めより藥代などを取るものと思つて居らぬ、然かも親切に叮嚀に人に依て加減するやうな事はない、又頗る義俠に富み、先年其友山岡千太郎氏が重病に罹り、生死存亡の急に瀕するや、自家の患者幾百人をば之を同業者に委し、翛然起つて友の急に趣き、自ら施藥もすれば看護もし、一切萬事人手に委せずして一箇月の間日夜山岡の宅に詰め切つて加護療病至らざる莫く、遂に其友をして九死の中に一生を救ひ上げたるは、今尚美談として知人の間に喧傳せられて居るが如き、今日の刀圭界に求めて他に得べからざる所である。

氏は性來頭腦の頗る明敏なる質であつた、其曾て大學に在るや、他の學生は皆ノートと類引きして講師の講述は耳より受けて之を直ちに手に傳へ、其手は機械的に之をノートに記すのみで、其講義を腦に收めんとするものはない、然るに氏は獨り之に反して在學中を通じてノートに誌したのは合して僅かに三十枚に過ぎなかつたさうで、氏の同窓者は驚嘆否な畏敬して居る所である、卽ち氏が講堂にあるや、ノートも持たず、鉛筆も手にせず、唯だ默然として講師の講義を謹聽するのみ、それで他の學生が一字も漏さずと一々ノートへ控へる所を、氏は直ちに一々之を其頭腦に收めて、復習するでもなければ試驗が到來して狼狽するでもなく、而かも其成績は常に滿點を得て終始首席を占めて居つたと云ふことである、是れ氏が天稟の然らしむる所にして、人の企て得べからざる所である、而して氏は又頗る精神家である、今日俗物の累々たる刀圭界に在りて、敢て富貴を希ふにもあらず、名聲を求めんとするにもあらず、唯だ自己の天職を全ふして高く俗界を超脫し、慰安を精神的に求めて悠々閑如たるが如き、其品性人格の崇高なる稱に見る所の人物である、最も氏が既に精神的の慰安生活を爲しつゝあるか否やは未だ疑問であるが、今や禪を修めて悟道の境に入らんと力めて居る、其精神たるや既に物質的の生活を以て滿足するが如き世間普通の俗物に非らずして、其思想たるや遙かに高く且つ清き悠遠の境に達して居る、隨て今夏縣會議員の選擧あるや、縣下の有志は氏をして川邊郡の候補者として起たしめんとしたが、斯る事をば耳にも入れず、俗界に入つて俗名を得るが如きことは敢てせなかつた、卽ち是れ氏が人物の偉大なる所である、されど世の後進子弟の如きは大に之を愛撫して其指導に怠らず、昨年東都在住の津久井、下岡等の諸氏と謀つて東都遊學者の爲めに東京へ一大寄宿舍を建設し、以て後進子弟をして據つて以て身を託し、誤ちなからしめんとして努めつゝあるが如き其行ふ所や常に人と異なりて現在よりも將來を思ひ、現實よりも理想的に精神的に傾き、而して其自ら世に處するや洒々落々恬淡にして世態俗事を心頭に介せざるものゝやうであるア、斯る人物は當今稀に見る所にして、其名喧々として世に傳へらるゝ又偶然に非らずである。

# 燐寸製造業　小森純一君

（尼ヶ崎町）

氏は尼ヶ崎の舊藩士にして、藩の洋式銃隊教範として、我軍制の基礎に與つて功勞尠からず、維新廢藩と共に大阪商業會議所の印刷業に從事すること年あり、明治十三年兵庫に千秋社なる燐寸製造事業を開始するや、氏は之れに入りて專ら調劑を擔當しつゝありしが、翌十四年尼ヶ崎に於て、士族の授産を目的とする燐寸工場の設立を企て、藩主に請ふて二千圓の元資を借受け、親から之れが經營の衝に當り、備さに苦酸を嘗めたりしも、困難なる新事業は遂に失敗に歸し、已むなく事業を拋たざる可からざる苦境に陷り、一旦之れを閉鎖して藩主貸下の元資は年賦償還として、更らに獨立經營に移し、斃れて後止むの決心を固め、奮闘を持續して、卓勵の意氣奪ふ可からざる概ありしが、偶々北淸地方より黃燐燐寸の注文に接し、當時他に同業者あるに拘はらず、氏の事業が、他に比して一日の長あるより、特に註文を受けたるもの、されば一淸商の値遇に對しても、飽まで之れを完成して個人の信用、大にしては國家の聲威を保つべき任務あるを自覺し、是に於て平畢生の努力を應して、製造に從ひしも、當時燐界の智識未だ幼稚にして、化學の進歩今日の如くならず、爲めに調劑法に就いて困難を感じ、種々の苦心研究を重ねたるの結果、遂に淸國瑞典の既製品に就きて、藥素を分析し幾多の試驗を經て遂に之を應用し、漸く完全なる製品を見るに至りて北淸に搬出するや、大いに好評を博して到る處の市場に歡迎され、小森式黃燐燐寸の聲價頓に認識せらるゝに至れりと云ふ、其後氏が熱誠なる經營振は、倍々優良なる品產を見るに至り、今や淸國市場の燐界を壓して、小森燐寸の聲名は淸國市場に喧傳せられつゝある、蓋し氏が今日の成功は曾に氏一己を利するに止まらず、實に地方產業界の振發に貢獻したるもの多く、一面地方細民に副業を與へて彼等の生活を助けたる適切なる國家事業として、社會に寄與したる功績は我が產業史上に特筆大書すべきものである。

氏は本邦黃燐界の鼻祖として、我國產の興隆に與つて力あるのみならず、一面また公共の志に厚く、曾て尼ヶ崎町長に



擧げられ、又は縣會議員に推され、その他の公職に殉じて、地方人士の印象を深からしめしもの尠しとせず、今や一切の業務を擧げて嗣子貞一氏に讓り、唯だその監督指導に任じて徐ろに閑日月を樂しみつゝあるものゝ如く、貞一氏また能く乃父の志を紹ぎて、孜々として怠らず、虛名を趁はず聞達を求めず、一意家業の發展に努力し、同地新進の實業家として嘱望せらる。

川邊郡伊丹町は往時本邦に於ける淸酒醸造の本場として、其名を天下に喧稱せらるゝと共に、實に殷振繁榮の街衢でありき、然るに時勢の變遷と共に、醸造の本場は灘西宮地方に奪はれ、今や寂寞荒涼として單に小西家が毅然として舊時の形態を止めて居るに過ぎぬ、されば同地方民は業を失ひ產を敗り、常に四方に離散するものが多い有樣である、此時に當り、地方細民の經濟を支持すべく、生活の途を與へて呉れた恩人がある、而して其恩人とは、卽ち由多加織の元祖寺西豐太郎氏である。

抑も寺西豐太郎氏は石川縣の產、曾て鄉里石川縣にあるや性頗る利用厚生の念に富み、廢物を利用して種々の發明に腐心し、初めて我國の米糠を利用して緞通の製造を試みたるは遠く明治十三年頃のことなりき、それより原料竝に染色の方法、又は織機、或は製造の技術方法等に付き、研究に研究を重ね、試驗に試驗を加へ、遂に七年の日子と莫大なる費用を

# 由多加織本元　寺西留吉君

（伊丹町）

投じて發明したるものが、卽ち由多加織の緞通にして、其成功を見るに至りしは明治十九年のことである、其間氏が財蓋き力窮し、親族知已は之を思ひ止まるべく勸告するもあれば氏も又一時は匙を投げんかと思ひしこともありしが、折角の苦心を中折せんにはと、更らに努力百倍を加へ熱心研究したる苦心は、到底局外者の想ひ及ばぬ處であつた、而も多年研究の結果は頗る良品を見るに至れば最早資蓋きて製造に着手することも困難となつた、漸く僅に資を得て製造を開始したりしも、固より之れ輸出向きの製品なるが故に、地の利を得ざるべからずと大阪に來り、恰も伊丹町が衰頽の極に達しつゝありしを以て、同地酒造の空工場を借り受け、更らに同地に開業するに至つた、ア、天道是か非か、開業間もなく未だ其曙光を見るに至らずして氏は不幸病魔の襲ふ處となり、同年六月不歸の客とはなれり。

而かも幸にして氏に二弟あり、曰く幾松、曰く留吉氏であ

る、爰に於て兩弟心を協はせて氏の遺志を紹ぎ、堅忍奮闘、寢食を忘れて經營の結果は、今や機數四百臺、職工六百名を算し、一箇年の產額貳拾萬圓以上に達し、氏が獨占事業として盛に歐米へ輸出せられ利益も亦甚だ大なるものがあると云ふ、されば故人が苦心奮闘の賜は、獨り今日の富を致したるのみならず、廢物を利用して地方細民に職業を與へ、國家的生產を助長して、其聲名遠く歐米に喧傳せられつゝあると共に、我國產業界の恩人として其功永く沒すべからざるものである。

## 道場銀行頭取
# 山脇延吉君

（有馬郡道場村）

有馬郡に於て新進の人物として最も將來を嘱望せられつゝあるものは山脇延吉氏である。

氏は有馬郡の素封家として識られ、乃父篤藏氏は年纔かに十五にして家道を繼ぎ、其後肥料商として大いに活動する所あり、終始一貫刻苦精勵身老境に在むも孜々として業を廢せず、遂に今日の大を成し、聲望隆々として家運日に倍々旺んなるを見るに至つた。當主延吉氏は帝國大學土木科に在學中偶々先代の喪に會して、家政を省するの已むを得ざるより、中途學を廢し大學を退いたのであるが、老親尚ほ健在なりせば、氏は假に大學を卒へて、社會有用の材として貢獻すべかりしもの、一朝家事の繫累に得げられて其志を遂ぐるを得ざりしは氏の爲めに措しむ處である、三十三年一年志願兵の義務を了へ、豫備少尉に補せられ、家政を執掌する傍ら地方公共の事業に盡瘁しつゝある折柄、三十七八年の日露戰役となり、身を軍籍に列する氏は、直ちに召されて征途に就き、各地に轉戰して殊に功を顯はし、四十年縣會議員の改選に際して有志の推す所となり、候補者に擧げられたるも固辭して受けず、偶々病蓐に在るや、端なく當選狀に接し、最早や辭退の詮なきを見て其職に就いたと云ふことである、世には貴重の時間及び金錢を廢してまで、何々議員の當選を爭ふものさへあるに、氏は何等の運動奔走をも爲す所なく、而かも衆望の歸する處遂に模範的の選擧を見るに至れるが如きは、氏が信望の大なるを窺ひ得べきと共に、實に政界の一美談であらう、而して氏が議場に在るや公私を問はず一小題に就ては、幾んど風馬牛の觀ありしも、一たび大問題に逢着せば、奮前直往、一步も讓る所なく侃諤の議を闘はして、自己の主張、信條を傾倒して已まざるの慨ありき、されば議員中の鏘々として畏敬せられ、本年の改選に際して又復た候補者に擧げられたるも遂に固辭して起たず、以志の大なるを察すべく、蓋し學識あり、識見あり、品行また端嚴、年齒少壯前途洋々たる氏が將來の活動は大に嘱望するに足るであらう。



## ▲故山脇嘉吉君

故山脇嘉吉君

## 三田町長
# 北村萬次郎君

（有馬郡三田町）

氏は延吉氏の宗家にして、山脇家發祥の端を開きたる、舊き家柄である、竹て一年志願兵として軍籍に在り、日露戰役に徵されて、滿洲の山野に轉戰し、夫の三塊石山の苦戰に從ひ、不幸敵彈に中り、名譽の戰死を遂ぐるに至つた、當時名譽聯隊血染の軍旗として戰敵味方を戰慄せしめたる聯隊旗は勇將安村少將の濺ぎたる鮮血とゝもに、氏が忠君愛國の熱血を以て染めたるもの、我國空前の大戰史上、長く餘韻を留めて、後世子孫仰いで以て軍神とし崇敬する所である、ア、悲しき武勇の軍人、光榮ある勇士を出したる延吉氏の一門は、啻に一族一家の誇りたる計りではなく、實に我兵庫縣下の誇りとして、以て天下の視聽を新たにするものがある、茲に謹んで敬意を表し、名譽ある國家の勇士を憑吊す所以である。

由來有馬郡には未だ社會に顯はれざる、隱れたる奥床しい人物が多い、卽ち牧師としての覺前、村上、杉田氏の如き、教育家としての細木喜兵衛氏の如き、孰れも一方に雄を稱するの人たるに拘はらず、未だ多く世に認められゝに至らざる所以のものは、進んで利を捨ひ名を衒はざる篤行の士たるによるべく、今又三田町長北村萬次郎氏の如きも卽ち其一人である。

兵庫縣人物史　北村萬次郎君

り、延いて三十七八年戰役の功に依りては、勳七等に敍せらるゝに至つた、氏が毫も一身一家を顧みず地方公共の事業に滿腔の熱血を濺ぎたる赤誠は町民の齊しく敬仰する所にして蓋し國家の根底たる自治體と小學教育に何れも良材を有する三田町は以て縣下の清彩として之を世に誇るに足るべきであらう。

## 有馬農林學校長　細木喜兵衛君

（三田町）

凡そ人格といふものは、位地、學識、財產に依りて、作られ得べきものではない、されば人格なるものは修養にもよるであらうが、併し多くは天禀である、故に人の品性は、位地學識、又は財產、或は事業の大小等には何等の交涉を有して居らぬ、學問の權化ともいふべき博士先生にも、偶ま沒常識の人あれば、財產家、紳士の連中にも、また稀難の中心となつて品性を云爲さるゝものが多い、細木喜兵衛氏は僅かに一地方一學校長として、普通より云へば餘り世間の注視を惹くべき人ではない、而かも地方の紳士又は幾多の青年より、殆んど大學教授以上の大人物として崇められ、神の如く敬はるる所以のものは、實に其の人格の高潔なるに因るものである。

氏は舊く明治十一年において、縣の師範學校を卒へ、同校卒業生の鼻祖を以て識られて居る、出でゝ後直ちに鄉里の育英に從事し、同十九年より農林學校長として、鄉土の子弟を敎養し、二十有餘年栴風沐雨、一日として業を廢することなく、以て今日に至つたのである、而して今は氏の敎養に依つて、社會各方面の事業に從事し、有用の材として用ひられて居るものが甚だ多い、氏は更らに名利を趁ふの念なく、また

## 有馬郡醫師會長　深見恭平君

（三田町）

同家は九鬼家の藩醫として頗る令名あり、世々相繼いで醫を業とし、歷々名國手を出して、家門の隆盛は世を代ふるも渝ることなく、以て現代恭平氏に及んで居る。

氏は少々醫に志し、名古屋醫學校に學び、明治二十七年の卒業である、其後祖業を繼いで三田町に開業した、而して其學識と人格とは、夙に刀圭界の嘆賞する處にして、推されて地方醫師會長に舉げられ、明治三十年以來今日に至るまで、氏の指導と啓發に俟つもの多く、氏また自己の天職を自覺するに敦く、大いに斯界に貢獻するありと云ふ、殊に醫藥に親しむ能はざる無告の窮民を容れて、欣んで投藥診案を餅せざる如き、また以て氏の高風を欽するに足るべく、風采態度は長者の風あり、氣品高尚また優雅、抹茶、謠曲、園碁乃至花道に堪能なるが如き今尙御典醫風を存して奥床しい處がある而かも新進の學理を蓄へ、敏達なる妙手を藏するに至りては現代の刀圭家として錚々たるものである。

## 醫師　和田精才君

（三田町）

氏の家世々醫を業とし、地方に於ける刀圭家の閥閱を以て遙近に識られて居る、氏は三十五年岡山醫學校の全科を卒へて三田町に門戸を張り、地方新進の名手として、忠家の欽慕を博し播州の小國君と、もに、岡山出身の雙璧として名聲嘖

兵庫縣人物史　和田精才君

嘖たるものがある、由來岡山醫學校が名古屋醫學校と共に、天下醫學界の粹として謳はれ、氏また斯校の出身たる丈けに深遠なる學理を究め、實際の應用に練達し、而かも些の算大の風なく、治を乞ふものあれば、飽まで平民的にして懇切を極むるより、病軀を擁する老幼常に門前市を爲すと云ふ。

氏は醫家の本分として最も衛生強健の要を說いて倦まず、併の死を歎び醫の病を待つの弊あるに拘はらず、務つて人生の健康を說き幸福を說き、無病息災は攝生に在りと爲し、二十九年地方の青年を糾合し、自から卒先して體育の要を稱道し、自費を投じて柔術の道場を開き、師赤埴某氏を聘して、盛んに武道を鼓吹するとゝもに、地方青年柔懦の風を矯めんと努めつゝあるが、今や會員百名を算するに至れりと云ふ、刀圭家として患者を待つの傍ら、健全なる思想を養はしむべく、健全の國民を造らんとする氏の志節は、實に稱揚に値するものがある。

# 淡路之人物

## 喜田精一翁

淡路は山水明媚にして兵庫縣下否な日本の公園と稱せらる然れ共云はゞ盆栽的公園にして、雄大なる資質は之を見ることが出來ぬ、從つて詩歌文章音樂的の風雅雄なる人物に富むこと一面に於ては、名利を見ること雲煙過眼、達觀的の大人物は殆どないやうである、然るに偶々喜田精一翁の如きは、其輪廓の大なる點に於て淡路人物界の異彩であらう、余輩一日翁を洲本常盤町の邸に訪ひ、導かれて一室に通れば南は紀淡海峽、北は先山三國山を一眸に望んで洲本公園を俯瞰し、風光景趣云はん方なし、床には唐畫の山水と、高島三浦兩將軍の揮毫になる扁額を掲げ、御國造りの大刀を置き、青貝の書棚には三國史、史記、孫子、吳子、法華經、壁巖錄、禪門法語集等の佛書類や、琵琶記のやうな支那小說も竝べてある、机の上には自凝自詠又は百花百穀と題する日記も置いてある、其書物の種類と室内の裝飾より察すれば東洋流の豪傑で不平家の樣にも窺はれる、稍あつて語つて曰くいやもう隔世の感がある、彼の床にある大刀は余が少年の時鹿兒島で兵兒と喧嘩をやる時に用ひたもので、兵兒は他國の者と見るや、直に喧嘩を仕掛けて來る、妙な處で遁ぐれば追ひかけて斬つてかかるから、向つて行くと先方から避ける、大分毎日喧嘩をやつたが、或る日宿の親父が貴方の樣に喧嘩計りやつて居つては仕方がない、夫れは一見風俗が他國の者に見ゆるからである、衣服も刀も御國風に仕立てゝ仕舞へと云ふから、其時にあの通り刀を拵へたのである、余が鹿兒島へ行つた次第と云ふは、余が家は三原郡市村で代々醫師である、そこで醫師修業と云ふ譯で幼にして長崎に至り長崎病院の蘭人マンスベルド氏に就いて蘭學を學んだが、同窓の芳川顯正が面白くない

（洲本町）

から鹿兒島に行かうと云ふので、二人書置きをなし脫走して鹿兒島に至り、佛語を修めて見たが又面白くないので明治二年に歸鄉した、同三年に德島の語學校へ入學したが、亂暴をやり續けたので忽ち放校になつた、仕方がないから又家に歸つて居ると、明治六年に芳川が洋行して歸り、今の印刷局長當時の紙幣寮長と云ふものになつて、是非共出て來いと云ふから東京に行つて芳川の內に食客となつて居つた、處が芳川は文官になれと頻りに進めたけれども、文官は厭やだと云へば注告を用ひないと云つて大に怒つたが翌七年に共同團に入り、卒業の上更らに士官學校に入り砲兵科を修めて軍人となつた、其後所々へ轉勤したが或時要塞の方へ廻された、余はどうも夫れが不平でならぬ、何となれば東西の戰史を繙けば偶々旅順を攻撃した樣に他の方面から陸兵を以て攻めることもあるが、併し概して要塞の戰爭と云へば軍艦でやる日本の各要塞なぞは必ずそれである、而して要塞と云ふものは參拾萬圓も要すれば出來るが、軍艦は何百萬圓と云ふ金が要る、其何百萬圓と云ふ金をかけたもので、要塞と引き替への戰爭をする樣な損なことは決してやるものでない、されば我輩は要塞の樣な隱居場は厭であるから更任を迫まつたけれども、更へて吳れぬ辭職を仕ても聞き入れて吳れない、夫れから自暴自棄になつて、ツンと上官苛めをやつた、故井上光さん抔は隨分窘迫めたもので、不平で堪まらぬから一日も早く罷めたいと思つて病氣と云つても何と云つても聞いて吳れない、折柄滿期退役となつたと云ふ仕末である、其後日清戰爭に出征して平和克復後洲本に歸住し閑散な處より淡路の漁民は皆



て近海漁獵而已に齷齪して遠洋漁獵をやるものがない、一番之を奬勵しようと思つて九州にて漁船を造り、同地の漁夫を師匠に傭ひ淡路の漁夫を連れて行つたが、遠洋へ出て行くと淡路の漁夫は船暈して役には立たぬ、五度試みて五度共失敗間もなく日露戰爭に召集せられて止むなく中止したが、最早資本も盡きる年も老い、今は悉うして隱居して居る始末である、余の同窓同僚にて將官以下のものは一人もない、余の如きも穩和しくして居れば今頃は中將位になつて居るかも知れぬが、性來人に阿り、意に反する仕事は一日も嫌いであるから、出世は出來ずとも意の如くやるが何よりの愉快である、當年六十三歲元來支那小說が嗜きで、禪學もやつて見た、又近年歌を稽古して居るが、此間も娘と妻が朝家を出たなりき り歸つて來ない、夕方に歸つて來て娘がお祖父さん何處行て居たか當てゝ御覽と云ふから、此歌を作つた。

こき袖のうつり香きけは告けすとも
　梅見て來しと思ふつらなり

翁は今尙壯健壯者を凌ぐの概があり、寒中跣足の儘旅行するを常とし、家に在るや常に家內の糧食米は翁自ら臼いて白米となし、日用の薪も取りに行けば、水も汲むと云ふ風である、其性格より察すれば少年時代否な當年の意氣を想見するに足ると共に、人と爲りの一斑が解るであらう。

# 淡路銀行頭取　中村重次郎君

（洲本町）

淡路一圓に於ける實業界の代表的人物として資產信用兼備へ同地方の重鎭として仰がれつゝあるものは中村重次郎氏である、家は代々船舶を有して航運の業を營み、先代某氏頗る英邁にして家道頓に勃興せりと云ふ、氏は其後を紹ぎて鬱鬱買買を業とし、明治二十九年有志と共に洲本銀行を創立して重役に擧げられ之が經營を司りつゝありしが、此より先き銀行條例の發布と共に各地方到る處に小銀行が創立せられ、資本僅少にして信用に乏しく、地方經濟界を攪亂するもの尠なからず、而して淡路も亦其數に漏れず、幾多小銀行が分立して爲めに經濟界の發達を阻害するもの多きに鑑み、印部俊平氏と共に小銀行の合併を唱導し、極力斡旋したるの結果は遂に明治三十八年に至り、淡路、興業の二銀行を合併し、淡路貯蓄銀行を買收して、資本金を七拾貳萬五千圓となし、各樞要の地には支店を配置し洲本本店に於て之を統轄することゝなしたるが如きは、恰も之れ銀行整理を絕叫せる識者の理想を實現せるものにして、殊に縣下の如き小銀行濫設の地方にありては、最も機宜に適したる施設として、大に吹稱するに足るべく、其衝に至りしもの要するに各銀行の經營者が主張を一にしたる結果によると雖、又氏竝に印部俊平氏の聲望と手腕の與つて力あるや勿論である、其後氏が頭取に擧げらるゝに及んで、穩健にして堅實なる經營振りは、行運益々發達して地方銀行として重きを爲すに至つた譯けである、氏は又單に淡路銀行界の雄鎭たる計りでなく、曩に倉庫會社、製米會社製竹會社、曳船會社等を創立して各重役に擧げられ、洲本商工會の眠れるを興して會長に推され、同會の牛耳を乘つて一般を指導しつゝあるが如き、以て淡路實業界の中心力として氏の力に負ふ處大なるものがある、賦性溫厚にして毫も商人的ならず、人に接して驕る侮る等のことは少しもなく、虛名を厭ふこと蛇蝎の如く、華奢に流れず吝なるにもあらず、圓滿なる資產家として淡路實業界の代表的人物たるに恥ぢぬ。

# 淡路銀行取締役
# 秦猪平君

（三原郡市村）

三原郡に於ける資産家として最も圓滿なる人物を覓むれば秦猪平氏であらう、氏は同地方に於ける稀に見るの名門、其先は遠く惇仁帝に奉仕して秦姓を賜はり、代々此地に住して忠右衛門、又は猪之助を襲名し、四代以前より猪平と改む、家酒造を業とし傍ら里正の職を奉じて恩威竝び行はれ、里人の崇敬甚だ深く以て氏に迨んだ次第である。

氏は明治二十五年家督を繼ぎ、村長、郡會議員等を初め地方各種の名譽職に擧げられ、同三十年淡路共立銀行を創立して頭取となり之が經營を主宰しつゝありしが、銀行合併問題の起るに及んでは進んで之に同意を與へ、淡路銀行に合併して現に同行の重役である。

氏曾て謂らく淡路の地が海濱漁業を除くの外は、工業興らず商業振はず、單に農家の經濟を支持するものは米産あるのみ、而かも既に開墾の餘裕なく、人口の激增と經費の膨脹は勢ひ供給の不足となり、將來を觀望すれば甚だ寒心に堪へざるものがある、若かず農家の副業として牧畜を奬勵せんにはと、夙に蓄産の改良を唱導し、自ら資を投じて種牝牛を購入し、之を郡農會に寄附して種類の改善を圖る等、奬勵指導に努めたること多年、斯界の爲めに貢獻する處頗る多く、日本農會は其功勞を頌したりと云ふ、其後更らに産馬改良を圖らんが爲めに國有種馬の貸下けを受け、自ら監理の下に之を奬勵しつゝあるが如き、氏が地方殖産の爲めに盡瘁したる功勞は永く沒却することは出來ぬ。

氏は性溫順、氣品高尚にして文雅に親しみ、常に聖經賢傳を雜抽して精神的の修養に怠らず、右に經世の策を講じて左に風月を樂しむと云ふ奥床しい處がある、而して會心の人に接すれば談論風發、其趣味の廣汎多樣なるを窺はしむ、眞に氏の如きは山水明媚なる淡路の代表的人物たるに恥ぢぬ。

氏の一族猪之助氏は氏と其性格を異にし、覇氣滿々今や縣會議員として虚名を趁ふに日も亦足らざるものゝ如く、性隱忍尊大驕傲、往々累を氏に及ぼすと云ふに至りては、氏の爲めに同情の至りに堪へぬ。

# 淡路銀行取締役
# 前代議士
# 野上嘉平君

（三原郡加集村）

氏は家代々農を以て業とし、地方の名門にして閥閲亦た舊く、加集盛衛氏の後裔にして、子孫相繼いで德島領の大里正を勤め、幕政時代に在つては、士分以上の勢權を擁し、聲望一鄕を壓して威を遠近に揮ひたるの觀ありき、今にして當時の勢望を偲ぶべき紀念とも見るべきものは其宏大なる邸第である、地域一萬餘坪、繞らすに石壁を以てし、蓊鬱なる松林は巍然たる高樓を蓋ひ、宛かも是れ一大城廓の如く、四時松籟颯々として當代の權勢を譚つて居る。

氏は殖産興業を以て、國利民福を增進するの基礎となし、夙夜その發達に盡瘁して怠らず、夙に農事の改善を唱へ、曾て郡農會長として産米の改良を勵行し、或は農業技術の改良に於ける、又は農政の發達を指導したる等穩健なる經營の下に、諸多の利益を增進したること甚だ多く其功勞沒すべからざるものがある、而して世の門地高く資財裕かなるものにありては、飽食暖衣、學問人格の見るべきなく、單に祖先の遺田に座食して僅の資産を鼻に掛け、時運の趨向に乘ずるの明なき、高等遊民の多きに反し、氏は遁に新時代の新人物たるに背かず學才兼有する地方の指導者として、鄕閭に崇信せられつゝある、而かも近時氏が稍吝嗇に流れ同情に乏しきを云爲するものあれ共、這は先代が放慢にして殿樣式の家政に比較せるものにして、秩序整然たる今日に在りては、其家名を維持する上に於て、寧ろ細心なる氏の家政は機宜に適したるものあらんか、性謹厚にして虚名を趁はず聞達を求めず、素封の相續人として適當の人である、若し夫れ博物學の大家加集久太郎、竝に加集寅次郎氏の如き人物を出したるは、氏が一門の誇りであらう。

# 加集新九郎君

（三原郡加集村）

氏は家世々農を以て業とし、少壯衆望を荷ふて縣會議員に擧げられ、縣政の爲めに竭したるもの尠からず、三十五年衆議院議員に當選し、議員中の最年少者として識られ、其後前後三回の改選に臨むも毎に多數を以て選擧せらる、以て氏が名望の如何に地方人士に厚きかを窺ふに足るべく、而して獨り永く名譽の他位を占むるは、後賢を蔑むるの道に非ずと爲し、地盤の優勝にして鄕人の嘱望厚きものあるに拘はらず、自ら讓退して佐野春吾氏を推し、極力之れを援けて當選せしめたるが如きは、浮華輕佻、唯夫れ功利を趁ふに急なる現代人士と大に趣を異にし、洵に推重に値する篤行の士である、宜なり氏が地方又は中央における聲望隆隆として衰へず、今は同地方進歩派の中堅として牛耳を執り、敵黨をして欽仰畏敬せしめ、黨勢の一大擴張を劃したりと云ふに至りては偉なりと云ふべし。

氏は政治家として一家を爲すのみならず、實業家としても亦た一方の雄鎭たり、夫の印部俊平、中村重次郎氏等と、もに、地方小銀行駢峙の不利を唱へ、議熟し竟に之れを合併して、經濟界の改革を斷行し、現に重役として經營を主宰しつゝあるが如き、氏が政治壇上に有する勢力を以てして、併せて地方經濟界に盡策盡瘁したる功勞多く政治界に逸す可からざる策士たると共に、地方經濟界の恩人として、拭ふ可からざる記錄を貽せり、性溫厚にして質朴、人を待つに厚く、手腕あり、識見あり、奇傑なる觀察眼を有し、偶ま時事問題を提ふれば、諄々として說き去り說き來り議論的確、條理井然として一絲を紊さず、人をして漫ろ推服せしむるものがある。

野上庄作翁

嚴父庄作翁また篤行の士にして、幕政時代に在つては庄屋をつとめ、奉公の志厚くして里人の敬仰最も深く、翁は現に八十又五の高齡にして、今尙鑛鑠、斗酒尙ほ辭せざる勇氣あるを以て見れば、其少壯時代より奮鬪主義精力主義の人たるを想察するに足るべく、夙に基督教を信仰し、在神戸の牧師ボウス氏とは、最も親交ありと云ふに至ては、その修養の深ふして氣品の崇高なるを知ることが出來る、此翁にして此人あり、野上家の清福は彌が上に光輝を放つであらう。

# 畜産家　阪東國八君

（洲本町）

氏は三原郡北阿萬村の名門加藤家に生れ、幼にして學に志し夙に洲本師範學校に入り、中途退學して京師に至り私かに漢籍を修め、後翛然東京に遊び、當時有栖川宮家侍講たりし奥井寒泉氏の門に學んだ、而かも學資に乏しく竟に飯倉小學校に教鞭を執り、僅かに衣食の道を得るに至りて傍ら勉勵怠りなかりしが、幸にも家兄美玉次氏が其苦學の狀を詳かにし遂に幾分の學資を支給せられ、專心修學の結果は一層の進境を見るに至つたと云ふことである、其後偶々展墓の爲めに歸國するや、當時同村阪東文吉氏の繼嗣問題が起り、請はれて同家の養嗣となつた、蓋し阪東家の懇請と、又在京中學資を給せられたる家兄の慫慂否みがたく、一は阪東家が地方に於ける屈指の資產家たるより、覇氣滿々何事をか爲さんとして脾肉の嘆に堪ざる氏は、宜しく養家を利用して一事業を成さんにはと、遂に之に應じた譯けである、然るに恰も當時板垣伯が野に下り自由黨を組織して民權の擴張を皷號するや、燕朝悲歌の士は翛然として之に應じ、政黨思想の發生と共に財を擲ち身を忘れ狂奔するもの甚だ多く、されば野心鬱勃たる氏は少壯血氣前後を顧みるの遑もなく、之が渦中に投じて慷慨激越の議論に耽り、東奔西馳徒らに大言壯語を事としたるの結果は、僅に三年たらずして養家の資產は擧げて蕩盡するに至つた、爰に初めて政治運動の不生產的なるを覺りしも覺醒既に晩く最早何事も施すことは出來ぬ、夫より辛ふじて久次米銀行洲本支店副支配人となり實業界の人とはなりぬ、之れ抑も氏が洲本居住の初めにして、當時北阿萬より洲本に赴くに方り僅に妻君の衣を典して旅費に充てたと云ふことである。

## ▲牧畜家としての氏

氏は幼より動物に趣味を有し、殊に牛馬を愛するの性癖があつた、之れ抑も畜產業を營むに至りたる動機にして、又今

日の成功を贏ち得たる所以である、當時淡路の畜産は黒牛と稱する同地固有の種類にして、未だ一頭の乳牛を飼養するものだにあらざりき、されば氏は牛乳が人類必須の營養物にして世の進歩すると共に需用の起るべきことを看取し、初めて牧畜家たらんことに志し、同時に銀行業務を擲ち、洋種、雜種の牧牛を買入れ、夫妻共に一枚の厩衣を纏ふて牛小屋に起臥するに至りしは抑も明治十五年の交なりき、其後眞摯熱心劃策經營に怠りなきこと前後三十年、今や洲本町、竝に神戸市葺合、福良、由良の四箇所に牧場を有し、倘養するもの一千頭の多きに達し、阪東牛乳の名は遠近に喧傳せられ一大成功を誤はるゝに至つた譯である。

氏は單に一家の經營に止まらず、一面地方畜産の改善發達を唱導し、淡路產牛組合を設け、或は品評會の開催を主唱し其他種々の方法を以て指導奬勵至らざる莫く、現今淡路牛と稱して京、阪、神其他の市場に歡迎せられ、殊に當時淡路全島に於て僅に八千五百頭に過ぎざりしもの、一躍一萬五千頭以上に增殖し、固有の黒牛は其影を止めず、ホルスタイン、エアシャ等の良種に改まり、單に縣下の模範牧場たる而已ならず、全國に其名を爲すに至りしもの、要するに氏が卒先改良範を一般に垂れ指導奬勵の功多きに居る。

氏は又曾に畜牛界の先輩たる而已ではなく馬匹改良の恩人である、曩に種馬組合を設けて大に產馬の改良增殖に盡瘁する處あり、現に同地が軍馬供給所たるに至りしもの、此又氏に負ふ處大なるものがある。

氏が畜產の奬勵に熱心なる、曾て日清戰爭に當り、牛は食用として馬は軍用として徵發さるゝもの多く、爲めに各地方頓に其數を減じ畜產界の恐慌を來たすや、各地方に奔走して牛馬の增殖改良を絶叫し、之が恢復に努力至らざるなく、或は各府縣に開催せらるゝ品評會、共進會には缺かず出席して各地の狀況を精査研究し、地方當業者の意見を叩き自ら所說を發表するに力め、殊に明治二十八年大日本畜產會が京都に開設せられ、其後同會が東京に移さるゝに方りても未だ一回として出席せざることなしと云ふ、以て如何に斯業の爲めに忠實熱心なるかを想像するに足るべく、又三十九年縣の囑託を受けて韓國の畜產界を視察するや、同地に乳牛の乏しきを看取し、同志と共に資本金貳拾萬圓の牛乳合資會社を組織し牛乳搾取場を設け、內地より純良なる乳牛を送りて搾取販賣を經營し、往年皇太子殿下彼地御巡啓に際しては、御用命を忝ふし、御賞詞を賜りたるが如き、以て氏が畜產界に貢獻せる功勞の大なるものあると共に、阪東と云へば畜產界の代名詞、斯界の大王として謳はるゝに至りしもの決して偶然ではない。

## ▲氏の人物性行

氏は性淡快にして活氣滿々、毫も偏副を飾らず、今や數萬の富を擁しながら尙牛小屋に起臥して牛馬と寢食を共にし、家に在るや牛毛を以て製したる外套を被り、出るや牛毛の洋服を纏ふて得々たり、而かも名利の念に淡く、道がに辛酸艱苦を經盡したる苦勞人、義俠もあれば同情もある、營利の餘裕は之を投じて惜しむ處なく、自ら學資の窮乏時代に想到して、苦學生には喜んで資を給し、默醫學校の卒業生七名を初め、其他大學生等氏の同情によりて修業せるもの多しと云ふ氏が波瀾に富める經歷は奇行逸事も亦多く、曾て有栖川宮邸內奥井塾に學ぶや、理髮の資なく自ら裁縫用の鋏を以て散髮せしかば、見るから段々畑となり見るもの嗤笑せざるはなく偶々宮殿下の御目に止まり、大笑あらせられたと云ふことである、又三十六年大山元帥が由良要塞檢閱として淡路に來たるや、氏が奥井塾に在りし頃公は同一邸內に居住せられ知遇を受けたる緣故を以て、敝衣垢面の儘面接を求めて舊情を溫め、公は氏が人と爲りと事業を賞揚措かざりしと云ふ、氏は又何れの會合にも必ず演舌をやる、而かも先登第一ならでは不滿である、故に氏が出席すべき會合のプログラムには氏の演舌は必ず第一となつて居る、曾て奥羽地方を視察するや、恰も青森畜產大會に列し、例の先登第一破鐘の如き聲を以て東北の畜產界を罵倒すること甚だ猛烈、滿堂爲めに色を喪ひ「兵庫縣からカミナリが來て青森に落ちた」と諷刺せらるゝに至つた、又常に牛毛の外套を纏ひ夏冬なしに襲用するを以て「夏冬が一度に來たか阪東さん」と綽名せらるゝに至れるが如き、其他逸事奇聞は鮮くないが、以上は以て兵庫縣下の快男兒として其人と爲りの一斑が解るであらう。

氏に一男二女あり長男武君は熱心なる基督敎信者にして、また得易からざる篤學の人である、氏の飜譯せる「ウキルソン」氏畜牛病論の如きは有益の著書として汎く世に行はれ、各地畜產學校敎科書に用ひられて居る、夫人りつ子は貞淑の聞え高く、氏が今日ある夫人內助の功大に與つて力ありと云ふことである。

# 淡路實業銀行頭取　山添俊雄君

（津名郡中河原村）

前項中村重次郎氏を敍するに當つて、地方小銀行の合併が經濟界の發達を促すべき機宜に適したる行動として、大に之を吹稱したると共に余輩も亦合併論者の一人である、然れ共物に利弊の伴ふは數の免れざる所にして、変通の至便にして

信用機關の完備せる地方に於ては、小銀行分立の不利益なるは勿論であるが、淡路の如き交通の不便なる一孤島にありては、單に一銀行の獨占に委ねんか、狹隘なる感情上の衝突等によりて、金融を阻碍するの虞れがある、されば此弊害を看取して同地が曩に一銀行に合併せられたるにも拘はらず、新たに實業銀行なるものゝ創立せられたる所以であらう、而して同行の設立に最も多大の功勞ある人物は山添俊雄氏である

氏は明治十六年三原郡書記となり、同二十一年縣屬に轉じ議事係りとして其手腕を認められ、勤續七年病氣の爲めに官を辭して痾を鄉里に養ひ、其間村會、郡參事會員等に擧げられ、政友會を標榜して同地方の牛耳を執り、縣會議員候補者に推されたりしも辭して之に應せず、自ら實業界に入らんことに志し、同志と共に淡路實業銀行の創立を企て、其創立委員長となり、之が認可に奔走すること數年、服部縣知事の不

# 醫師　村上俊平君

（洲本町）

認可說に逢ひ、非常なる困難を感じたりしも、專ら氏が巧妙なる運動の結果は主務省を動かし、明治四十一年遂に設立認可を得たるに至つた、爲めに氏が手腕は一般の認識する處となり、設立同時に頭取に擧げられ現に之が經營を主宰しつゝあるが、創立以來日尙淺しと雖、氏が經營の手腕は倍々發揮せられて、今や信用ある地方銀行として認識せらるゝに至つた、想ふに今後の發展に就ては氏の才腕に期待せらるゝもの多きと共に、氏も又其期待を空うする人物ではない、氏は又同行を經營する一面に於ては、產牛馬組合長、郡農會議員等に推され、農業の改善、牧畜、開墾、殖林、溜池の築造等に力を致し、村長としては自治體の改善發達に盡瘁して治績の見るべきもの多く、新時代に生れて新敎育あり、同地方新進の人物として大に將來を囑望せられて居る。

我が日本の文明が泰西文物の輸入と共に急速の進步を爲したることは爰に呶々するまでもないが、就中其最も進步の著しきものは醫學である、顧みれば僅に四十年以前迄は草根木皮の漢法醫のみにてありき、然るに今や洋醫を以て滿たされ我が國の醫界に一新生面を開くに至りしは、洵に悅ばしき現象にして、現に全國に於て數萬の洋醫を有し、遥く兵庫縣にありても千有餘名の多きに達して居るが、此る多き洋醫の中にありて、內務省の第五號と云へる免許狀を有し、洋法醫の先驅として大に吹稱するに足るべきものは村上俊平翁である。

翁は洲本町高村幹齋の次男にして、板並村の醫村上文菴に養はれ、其膝下に句讀を受け、年十五歲にして明石藩儒梁田蘆洲の塾に入りて、漢學を修め、應慶四年森田節齋が帷を淡路に垂るゝや其門に入りて文章を學び、後大阪市北御堂內大阪府醫院大阪醫學校に入り、「エルメレンス」氏に就いて初めて洋醫の學を修めたりしが、家貧にして學資に乏しく、通學の餘暇同市大手通りの野田上岡、本町の田中法庵、天滿の小川光齋、高麗橋の島好節氏等の需めにより、曾て漢法醫書、竝に生理、理化學等の講義を授け、僅に束修を受けて漸く衣食と書籍の代に充てたと云ふことである而かも晝間通學の餘暇なるが故に、晨に天滿に至れば夕に本町に通ふと云ふ風にて、恰かも講談師が席廻りを爲すが如く、寸時も忽にせざりしと云ふ、吁、是れ今日豐富なる學資を支

村上兵吉君

給せられ、良敎師を得て何等の不自由なく學びつゝ、然かも學の不成者をして慚死せしむべき好敎訓ではないか。

明治九年同校を卒へ十年僅に三十圓の費金を以て開業したが、同地方に於ける洋醫開業の嚆矢として嶄新なる手腕は里人の歡迎甚しく、常に門前市を爲すの有樣、遂に今日の成功を見るに至つたと云ふことである。

翁資性溫順潤の如く、加ふるに漢籍の造詣頗る深く、最も文章を能くし詞藻英發にして適勤三唱に値すべきものがある其人格の崇高なる縣下に於ける杏林の一異彩であらう。

嗣子兵吉氏は土佐の人、大阪醫學校出身にして翁の養嗣となり、卒業後大阪醫學校病院に勤務し、後一年志願兵として軍隊に入り、日露戰役に出征して二等軍醫となり、凱旋後副院長として開業して居られるが、同地新進の名手として令名がある。

# 醫師　三島節治君

（洲本町）

明治三十一年大阪醫學校の出身にして、眼科專門醫としては大家の技倆を有して居る、氏は曩に神戸、大阪病院竝に東京大學に助手として實際の研究に從事し、大に得る所あり、後ち三十五年洲本町に門戸を張り、傍ら同地の高等女學校、中學校の囑託醫として聲名がある、殊に氏はトラホームの治術に於ては、獨特の技倆を有し、優に刀圭界大家を凌ぐの概がある、曩に大阪醫師大會において、深遠の學理と實際の臨床談を試み、其着眼の精緻にして識見の該博なる、來會の大家先輩をして非常なる喝采を博せしめた、業は一所に精なるに於て勝ち、野盡病として文明國に指彈せられ我國に最も多くの患者を有する、トラホーム病の治療法に對つて腐心研究一身を委ねつゝある氏の如きは、洵とに學界の珍として推稱するに足るべきのみならず、人類に貢獻する處頗る多く、年齒少壯氏が今後の成功は更らに大に刮目に値するものあらんか。

# 編者自傳

本書輯むる所數百人、何れも國家縣下の要材にして世に貢獻する所尠なからざるの士なり、而して今こゝに稿を脫し、筆を擱かんとするに當り、顧みて自ら世に爲す所なきを恥ぢずんばあらず、隨て余には誌すべき過去なく、傳ふべき何物をも有せず、然るにも拘はらず茲に自傳せんとするは、之を傳へんが爲めに非ずして、實は過去を語り、現在を明にし、以て搭載の諸名士に謝せんとするの意味に外ならざる也。

余は宍粟郡千種村の產、淺學非才、不肖の身なりと雖、而かも自ら顧みず少にして天下に志あり、夙に鄕を出でゝ四方に漂浪し、或は事を計劃して苦心慘憺の境に陷り、或は失敗挫折して不遇に彷徨し、又或時は操觚者となりて新聞雜誌に關係し、起倒流轉幾回なるを知らず、斯くて既に人生の半に達す、多くは之れ失敗の歷史ならざるは莫し、故に若し失敗を以て人生の不幸なりとすれば、余は疑ひもなく天下の不幸兒たり、然れども余は失敗の裡に安如たるを得たり、而して若し來るべき後半世にして更らに余の意志は失敗に由つて益々固く、志操は彌々雄健を加へたり、而して若し來るべき後半世にして更らに失敗の歷史を繰返すものとするも、余は毫も之を慨みず、之を悔ひざるべし、蓋し志の成ると成らざるとは余に於て深く問ふ所に非らず、唯だ人事を盡して後ちに天命を待たんとする而已、富貴も欲せず、名譽も希はんとせざるなり、されど生あるもの誰か志無からん、而して志あつて働かざるものあらんや、故に余は飽く迄も活動し、飽く迄も奮進せずんば止まず、蓋し活動は余の生命にして努力奮鬪は余が唯一の快樂とする所、成敗利鈍は固より深く問はんとする所に非らざるなり、抑も世路曲折多く、航行波瀾を免れず、事成らんとして敗れ、志達せんとして折るゝは世態人事の常なり、それ達人は大觀すと、余不肖敢て大觀せるに非ずと雖、斯くて志成らず、事敗れて終ゆるも是れ天命なり、又何をか悔ひん。

雖然、余は趣味ある後半生を有す、古人曰ふあり、失敗は成功の母にして大なる成功を爲さんとせば、先づ大なる失敗の經驗を嘗めざるべからずと、言にして欺かずんば余の後半生には必らず光輝なかるべからず、成功なからずんば、如何となれば余は過去に幾多の失敗を演じ、經驗を嘗め、既に古人の所謂成功の基礎を成したればなり、古人の言、果して我れを欺かざる歟。

ア、余はすでに一千有餘日を本書の編纂に費し、殆んど他を顧みるの遑あらざりしと雖、今漸く成る、いでや大に活動し、奮闘し、更らに大に突進せん哉。

現代
# 兵庫縣人物史
終

明治四十四年十一月二十五日印刷
明治四十四年十一月二十八日發行

編纂兼發行者　神戸市奥平野一番ノ百四　田住豐四郎

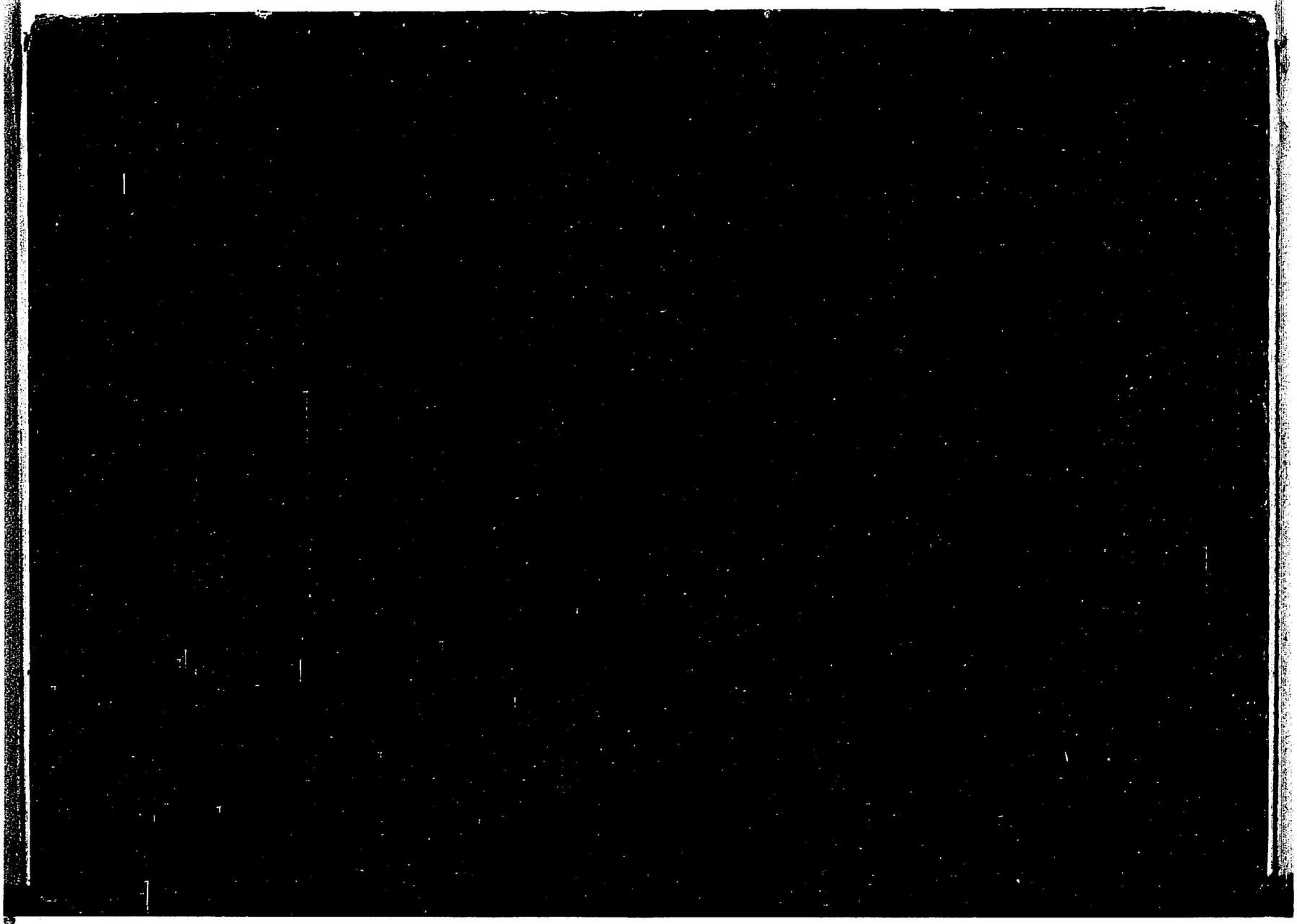
印刷者　神戸市再度筋三十四番屋敷　益田勝利

印刷所　神戸市再度筋三十四番屋敷　光村印刷株式會社

發行所　神戸市奥平野一番ノ百四　縣友

不許複製

331
34



331
34
Ⓜ

004352−000−6

331−34

# 現代兵庫県人物史

田住　豊四郎／編

M44
ACE−0799